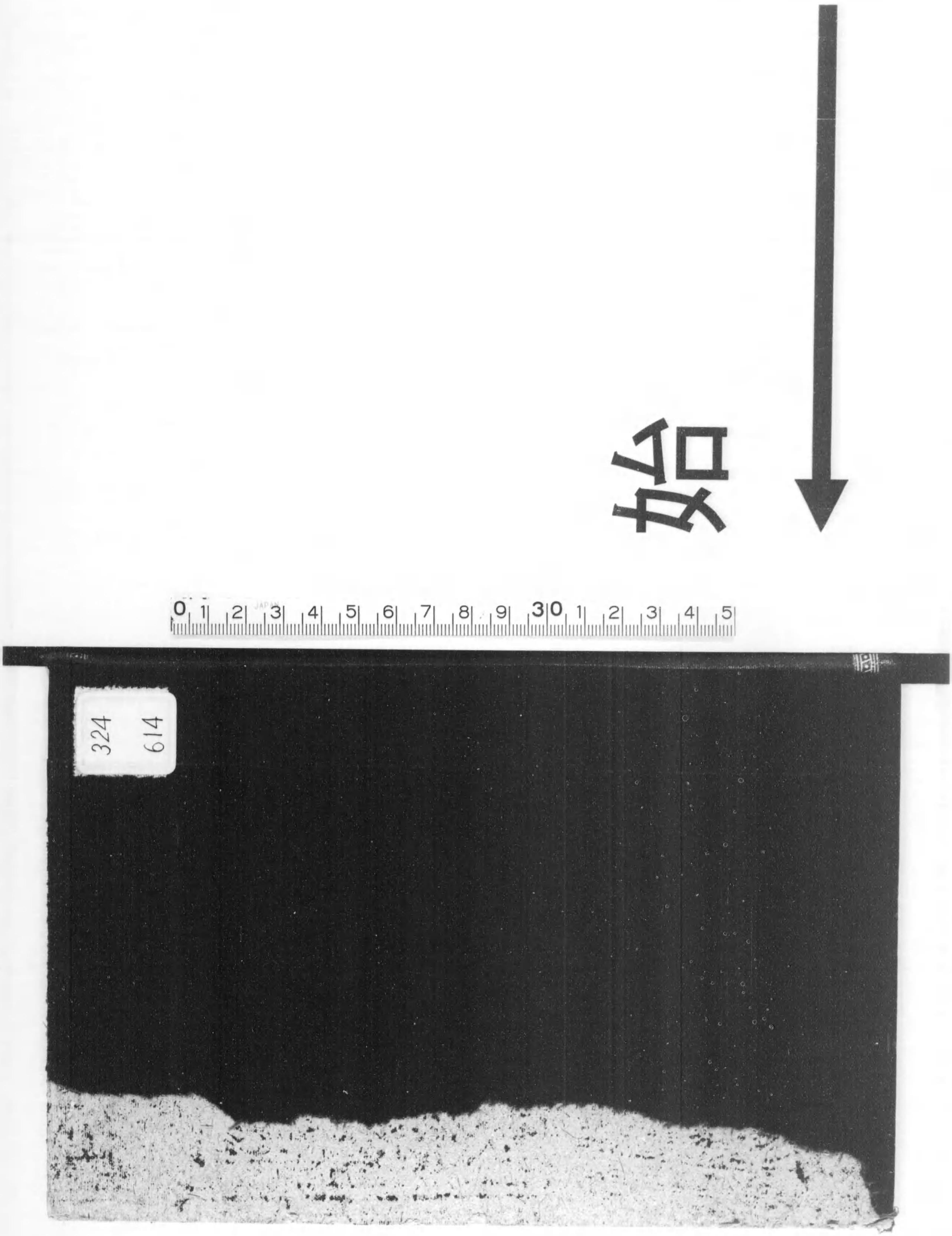

324
614

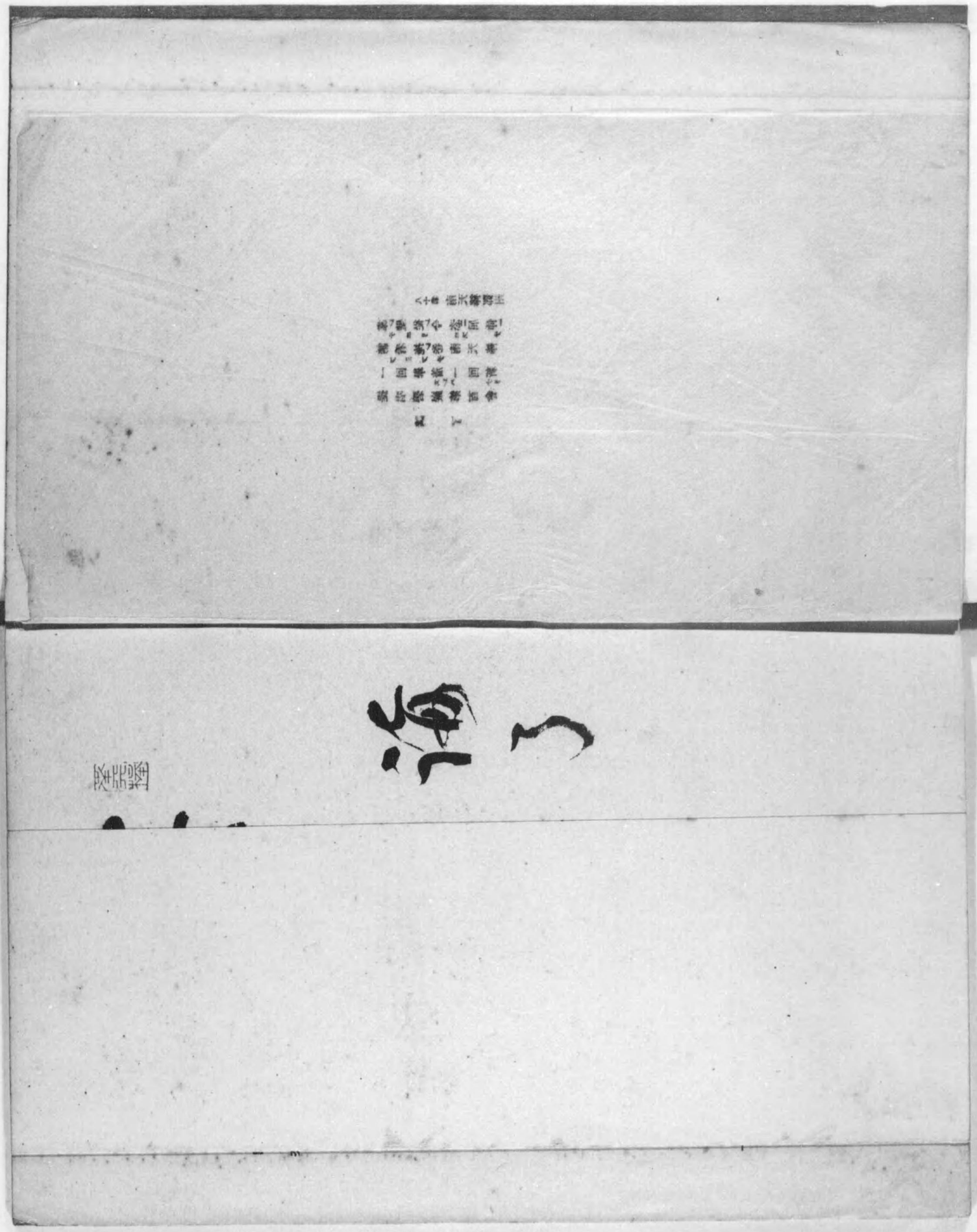
3, 5,15

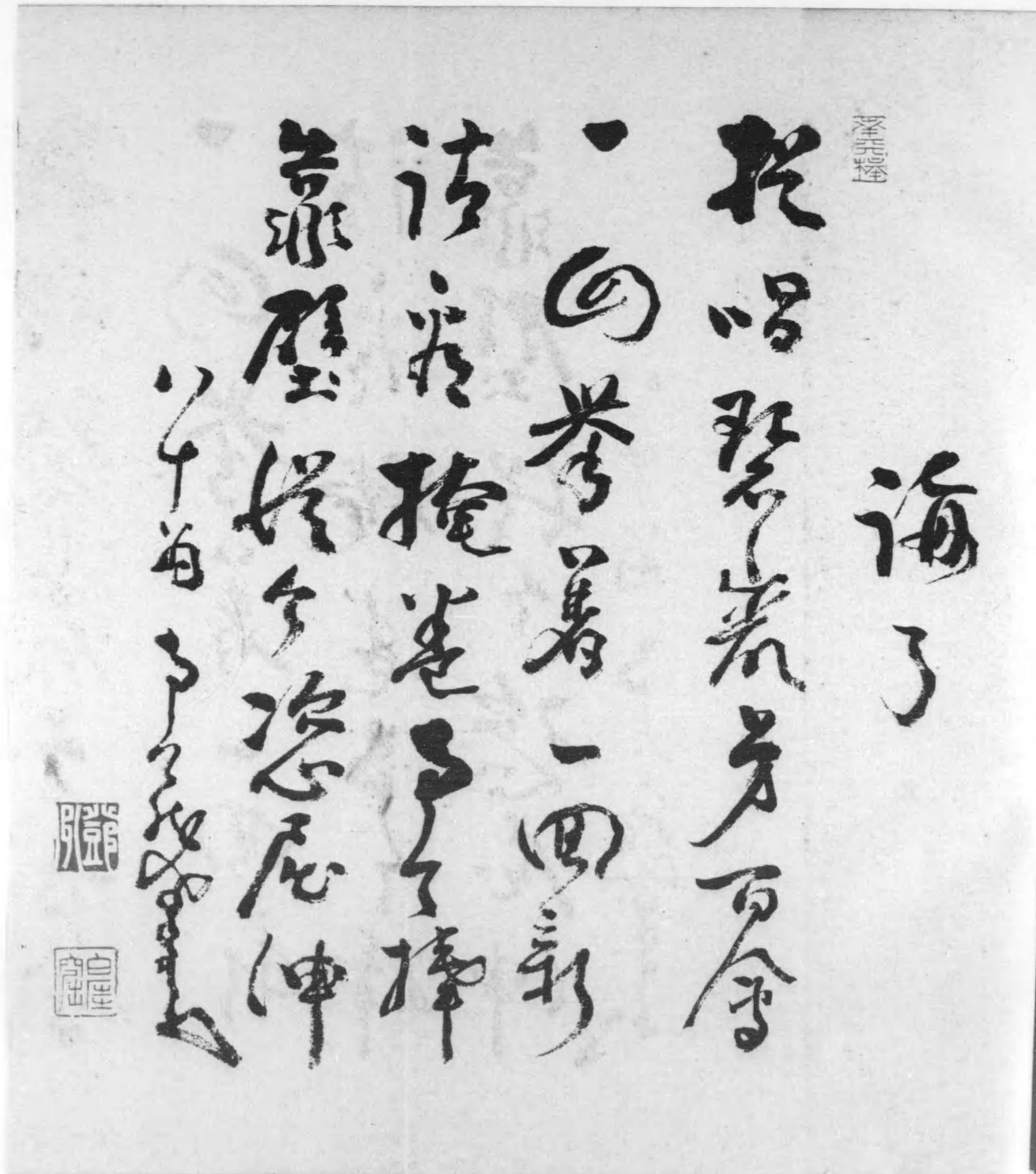
324-614

拙鳴嵐集

大正
9.6.16
内交

提灯ハ一回ニ幾ツ消スヤ
答一回百
八十番 南天棒路用





提唱碧巖集 下卷

目次

前言……（一）

卷七

第六十一則　風穴若立一塵……（五）
第六十二則　雲門中有一寶……（二二）
第六十三則　南泉兩堂爭猫……（四六）
第六十四則　南泉問趙州……（五九）
第六十五則　外道問佛有無……（七〇）
第六十六則　巖頭什麼處來……（九七）
第六十七則　梁武帝請講經……（一二七）
第六十八則　仰山問三聖……（一三七）

第六十九則　南泉拜忠國師……（一五八）
第七十則　潙山侍立百丈……（一八〇）

卷八

第七十一則　百丈併却咽喉……（一九七）
第七十二則　百丈問雲巖……（二〇七）
第七十三則　馬大師四句百非……（二一七）
第七十四則　金牛和尚呵呵笑……（二四六）
第七十五則　烏臼問法道……（二六二）
第七十六則　丹霞問甚處來……（二九〇）
第七十七則　雲門答餬餅……（三一五）
第七十八則　十六開士入浴……（三三〇）
第七十九則　投子一切聲……（三四六）
第八十則　趙州孩子六識……（三六四）

卷九

第八十一則　藥山射塵中塵……（三九一）
第八十二則　大龍堅固法身……（四一一）
第八十三則　雲門露柱相交……（四三九）
第八十四則　維摩不二法門……（四四三）
第八十五則　桐峰庵主大蟲……（四六七）
第八十六則　雲門有光明在……（四八九）
第八十七則　雲門藥病相治……（五〇五）
第八十八則　玄沙接物利生……（五二一）
第八十九則　雲巖問道吾手眼……（五四七）
第九十則　智門般若體……（五七四）

卷十

第九十一則　鹽官犀牛扇子……（五九三）
第九十二則　世尊一日陞座……（六一六）

第九十三則　大光師作舞……（六二九）
第九十四則　楞嚴經若見不見……（六四一）
第九十五則　長慶有三毒……（六五八）
第九十六則　趙州三轉語……（六七八）
第九十七則　金剛經輕賤……（七一〇）
第九十八則　天平和尚兩錯……（七三四）
第九十九則　肅宗十身調御……（七五九）
第一百則　巴陵吹毛劍……（七八四）
原本後序（無窩作）……（八〇七）

附錄

其一　雪竇禪師略傳、圓悟禪師略傳……（一）
其二　本則に出でたる祖師略傳……（九）
其三　支那傳燈列祖略系譜……（二六）

目次終

提唱碧巖集 六花

「提唱碧巖集」も此の卷で終了ぢや。雪竇のお饒舌に加へて、圜悟が太鼓を叩いて百則の公案に花を咲かせ、いらざることに八十餘人の僧俗を引っ張り出してサ、緒のない處に緒をすげてからに、學人に玉のやうな膏汗を絞らせた。それに又た南天棒が評に評を加へ、下語に下語を下したから、此の書の紙數も、豫定よりは非常に多くなつた。ぢやから讀む者も一層の勇猛心を以って讀まんけりやならぬぞ。

總て物は終始一貫して、始めて圓成するものぢや。此の「提唱碧巖集」もサ、上卷のみ讀んで、マア斯んなものかと片付けたでは駄目ぢやぞ。人を殺しては須らく血を見るべしで、讀み掛つたからにや、一字一句たりとも、餘さず漏さず讀まなくちやならぬ、眼を書物に曝す時は、ソノ書物に穴が開

いてサ、幾百枚の下をも見透す程の眼力を以つてせよ。書を書くには、唐紙百枚を貫く程の力を持たなくてはならぬ。米庵と云ふ書家は、百枚を抜いたと云ふ。イヤハヤ恐しいものぢや。なんでもソノ精神が無くては駄目の皮ぢや。

此の提唱碧巖を讀む者も左樣ぢや。文字葛藤を見る計りでなく、其の眞意を究めんとするでなくちやならぬ。古來から、碧巖は文章が好い、諷刺が旨い、ヤー法財が豐富であるのと、只だ〳〵碧巖の表面のみを見てからに、其の內容に向つて、眞箇に骨折るとに注意せぬ者が多い。慨嘆の至りぢや。納が此の提唱は、碧巖の修辭の美を取るのぢやなくて、其の眞髓を引ッ攫んで、赤裸々に提唱したのぢや。所謂面の赤からんよりは、心の直からんには如かずぢや。

故に此の提唱を讀む者は、碧巖の美に捉へられずに、雪竇、圜悟、南天棒の土手ッ腹を見拔かうとするが好い。世の中に疊の上の水練と云ふことがあるが、水練を疊の上で遣つても、水の搔き方、足の動かし方、呼吸の遣ひ方は會得する。併し實地に水に浸つて、サテ疊の上で遣つた通りに遣らうとしても、水と疊とは違ふから、此の體を浮ばせることが出來ぬ。疊の上ぢや沈む恐れはないが、水の中ではぐず〳〵して居ると直にブク〳〵ぢや。ソレぢやから、疊の上で手段方法を覺えたら今度はそれを實地に修練せなくてはならぬ。ソノ修練が積むと、水と疊の區別なく、自由自在に働ける。

今ま此の碧巖の提唱も、ソレと同じで、讀んだり聞いたりは、是れ疊の上の水練ぢや、つまり各々、主人公を捉へ出す手段方法ぢや。先づ第一則の「武帝問達磨」より、第一百則の「巴陵吹毛劍」に至るまで、皆な是れ水練の手段ぢや、方法ぢや。此の手段方法を讀み究め、是れを己がものと成し得て、サーそれから一則々々に、其の師家に就いて參究せよ。ソレが實地に水中に入つて、泳術を自覺すると云ふものぢや。

碧巖を讀んでも、見ても、聞いてもサ、コノ則は斯うぢや、アノ則はアヽぢやと、自己分別に其の儘分別して措くはつまらぬこと。ソレなら寧ろ讀まぬ方が好い。毎度納が云ふ、禪は實學ぢや、だらう學問ぢやない。火と云ふたら火、水と云ふたら水、其の實地に行かなくてはならぬぞ。火は熱いだらう、水は冷たいだらうぢやない、熱いは直に熱い、冷いは直に冷い、ソコを究めるのぢや。

納が若い時、豐前の永福寺に居られた懶翁和尙に參じやうと、明兄と共に行つたが、此の懶翁と云ふは、鬼文靜とも云はれた惡辣の師家ぢや。サー此の文靜に參じて、納は「牛過窓櫺」の話でブッ打かれたが、納も其の時には氣が付かぬので、泣いた〳〵。詮方なく明兄と一處に暫暇して、ソレから八幡宮に參詣しやうと思ふて出た、途中は中々幽雅な風景が多い。ソコデ或る溪流の橋の上まで來ると、明兄が納に向つて、「山河の水源、何處にか在る」と問ふたから、納はサ、「明兄、近前來」と呼んだ。スルト明兄は、「ハイ」と答へつゝ近前し來つたソノ一刹那、納は明兄の素ッ首に手を掛け、「水源底見よ〳〵」と、袈裟文庫を掛けた儘の明兄を、河の中へ投却した。明兄は水中でアップ〳〵して

居つたが、衲は其の儘歸つて再び懶翁の室に入り、遂に「牛過窓欞」を透過したことがあつた。後から明兄も川岸に泳ぎ上り、濡れ鼠の儘是れも亦た懶翁の許に來て再び入室した。水源を透徹し來つたと喜んで居た。明兄は後に山城花園の壽聖院と云ふ寺に董されて、師席を嗣いだと聞く。

サー諸人も明兄の如く、碧巖の碧巖を知らうとならば、先づ此の「提唱碧巖集」を見ると同時に、明兄が水底に入つて水源を究めたと同じやうに、實參實究せよ。くれ〴〵も皮相の碧巖に付いて廻るまいぞ。此の老僧も早や八十一ぢや、化緣も盡きなんとするに臨み、心肝を紙面に吐出して、後昆の依標とするのぢや。

前來の卷は、幸に　天覽の榮を辱ふした。老僧の微意、天聽に達する、誠に是れ宗門の光榮ぢや。サー專門の宗師家は南天棒の肚裏を評商せよ。又た篤志の老居士は參究して、自己のものとするが好い。毎度前話が長たらしいが、コレも老婆心よりぢや。サー是れから本文の提唱にかゝらう。

佛果圜悟禪師碧巖集卷第七

秣陵遠庵吳自弘　校
天界比丘　性湛　閲

第六十一則　風穴若立一塵　【風穴若立一塵】

垂示云、建法幢立宗旨、還他本分宗師定龍蛇、別緇素、須是作家知識、劍刃上論殺活、棒頭上別機宜、則且置且道、獨據寰中事一句作麼生商量、試舉看。

【和訓】垂示に云く、法幢を建て、宗旨を立することは、他の本分の宗師に還す。龍蛇を定め、緇素を別つことは、須らく是れ作家の智識なるべし。劍刃上に殺活を論じ、棒頭上に機宜を別つことは、則ち且らく置く。且らく道へ、獨り寰中に據る事、一

句作麼生か商量せん。試に擧す、看よ。

【提唱】　コレから卷の第七ぢや、第六十一則、「風穴若立一塵」と、コノ則は、便ち臨濟の宗風、向上の機有りて諸方を坐斷す。而も後人に至つては、之れを知らざるが故に、只だ麁强の會を作して、多く不實の見に落つ。風穴、之れを尊んで、別に一則の因緣を設け、以つて後規を垂れ、永く有力の好兒孫を待つことを明すのぢや。

「垂示に云く、法幢を建て、宗旨を立することは、他の本分の宗師に還す」と、サー佛祖の命脈を手に握つた本分の宗師の仕事は、常に斯うなくてはならぬぢや。六道四生、三賢十聖の目的も、祖祖の本懷も、皆な法幢を建てるにあるぞ。「法幢」とはサ、衆生を利濟する處の旗、鉾ぢや。法幢に就いて、コノ南天棒はサ、云ふて聞かさん。「學者、縊れ死しても、點滴も施さぬ。是れを法幢と曰ふ。若し利他の大願が無ければ、師學共に惡道に墮ちるぞ」と。宗旨を立するのも、中々容易ぢやない。コリヤ家々の宗旨ぢや、學者に手目は見せぬ。コノ「宗旨」に就いても老衲は云ふて置かう。「古人曾つて、自己は明らむと雖も、宗旨未だ明かならざるを歎く者有り。今人、此の道棄てゝ土の如し」と。「龍蛇を定め、緇素を別つことは、須らく是れ作家の知識なるべし」と、擇法眼を具したる大善知識ぢやないと、到、不到を見定めたり、僞者か眞者かを知ることはならぬぞ。「劍刃上に殺活を論じ、棒頭上に機宜を別つことは、則ち且らく置く」と、雪峰の輥毬とか、仰山の枕子とか云ふやうな難透の話頭で、衲僧の首根ッ子を押へたり、惡辣な手段で、上ぢや、中ぢや、下ぢやと、來機の是非を別つことは扱て置きサ。「且らく道へ、獨り寰中に據る事」と、コリヤ主位ぢや。一法不立の地、佛祖も影覗きはならぬ處ぞ。是りやサ、雲門の、氣宇如王の一句子がいけば斯うぢや。「一句作麼生か商量せん。試に擧す、看よ」と、サー此處に至つては、ドウ商量したものぞ。ソレには、風穴今日の活作用を看よと、本則に結び付けた。

擧風穴垂語云　○興雲致雨也要爲主爲賓　**若立一塵**　○我爲法王於法自在○花簇簇錦簇簇　**家國興盛**　○不是他屋裏事　**不立一塵**　○掃蹤滅跡○失却眼睛○和鼻孔失也　**家國喪亡**　○一切處光明○用家國作什麼○全是他家屋裏事　**雪竇拈拄杖云**　○須是壁立千仞始得○達磨來也　**還有同生同死底衲僧麼**　○還我話頭來○雖然如是要平不平之事須於雪竇商量始得○還知麼○若知許爾自由自在○若不知朝打三千暮打八百

【和訓】舉す。風穴、垂語して云く。(○雲を興し雨を致す、也た主と爲り賓と爲らんことを要す。)若し一塵を立すれば。(○我爲法王、於法自在。○花簇簇、錦簇簇。)家國興盛し。(○是れ他の屋裏の事にあらず。)一塵を立せざれば。(○蹤を掃ひ跡を滅す。○眼睛を失却す。○鼻孔に和して失す。)家國喪亡す。(○一切處光明。○家國を用ひて什麼か作さん、○全く是れ他家屋裏の事。)雪竇、拄杖を拈じて云く、(○須らく是れ壁立千仞にして始めて得べし。○達磨來也。)還つて同生同死底の衲僧有り麼。(○我に話頭を遡し來れ。○然も是くの如くなりと雖も、不平の事を平げんと要せば、須らく雪竇に於て商量して始めて得べし。○還つて知る麼。○若し知らば、儞に許す、自由自在なることを。○若し知らずんば、朝打三千、暮打八百。)

【提唱】

本則　コレから本則ぢや。

「舉す。風穴、垂語して云く」と、コノ則は祖々傳來の向上の些子を提げ起つた好示衆ぢや。併しサ、危い哉此の則、恐くは喪身失命に遇はう。但し鷲王の乳を擇ぶがやうに見去れ。

「若し一塵を立すれば」と、サー此の「若し一塵を立すれば、家國興盛し。一塵を立せざれば、家國喪亡す」と云ふ漢字十六字には、二義が有るぢやが、後人は錯つて一義として居る。サテ、「一塵を立する」と云ふはサ、字面の上から云ふたら、大極無極の處から、一機を立するぢや。コリヤ建立ぢや、今時ぢや。併し此の南天棒なら斯うは云はぬ。「若し一塵を立すれば、家國喪亡し。一塵を立せざれば、家國興盛す」と云はうぞ。

「家國興盛し」と、煩惱もあれば菩提もある、山もあれば川もある。實に、ハヤ、錦上に花を鋪き、一毛頭上に寶王刹と現ずるぢや。

「一塵を立せざれば」と、本分事上から云ふてサ。コリヤ掃蕩ぢや、那邊ぢや。又た石火電光に似たりぢや。

「家國喪亡す」と、悟りあることも、後生あることも、一切合切喪亡ぢや。黃金鑄出す鐵崑崙か。

「雪竇、拄杖を拈じて云く」と、斯く拈じ來つて、天下の人に看せしむるぞ。サー建立、掃蕩の中、雪竇は建立ぢや。衆生本來成佛と見るのは、天然外道ぢや。南天棒云く、雪竇は是れ雲門の的孫、飽くまで言句に富む。眼高く見て黃金に至らず。然かも風穴の語に於て、是の如く賞翫する、最も仔細にすべし。南天棒は、之れ雪竇の語に依つて勝れりと道はず。上々の菩薩は信じて疑はず、中下の菩薩は疑つて信ぜずとは、此の語の爲に道ふならん。

「還つて同生同死底の衲僧有り麼」と、コノ語は劍刃上に人を求むぢや。多少の人、喪身失命するぞ。大狠毒ぢや。若し此の末後の大事を知らなけりや、爭でか風穴の語を會さうぞ。是れ雪竇の垂手ぢや。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「舉風穴垂語云」――――「雲を興し雨を致す、也た主と爲り賓と爲らんことを要す」、斯うして大法雨を降らす、コレも爲人ぢや。併しコノ下語は不可ない、衲は取らぬ。

「若立一塵」――「我爲法王、於法自在」、コレは「法華經」の句ぢや。一莖草を拈じて丈六の金身と作すも、縱横自在底。コリヤ風穴の働きを云ふたものぢや。「花簇簇、錦簇簇」、隱居もあれば大屋もある、亭主もあれば嚊もある。實にハヤ、萬善萬行、盡く花簇々、錦簇々ぢやないか。

「家國興盛」――「是れ他の屋裏の事にあらず」、佛性の取り捌きと云ふことか。ソンナことではいかぬ。何故ならばサ、今時那邊のヘリキリがあつては不可ぬぞ。コリヤ我家の本意ぢやない。

「不立一塵」――「蹤を掃ひ跡を滅す」、喝ーッ。「眼睛を失却す」、是れ、一法を見ざるからぢや。「鼻孔に和して失す」、省要の處ぐるみ失ふぞ。

「家國喪亡」――「一切處光明」、光明寂照遍河沙ぢや。實にハヤ、十方世界に光明が遍照して居る。「家國を用ひて什麼か作さん、」サ！光明全體ぢや、何んぞ家國のみならんや。「全く是れ他家屋裏の事」、本分の事上ぢやものを、穩坐地ぢやなぞとは、ヒョンナ處へ入れたものぢや。

「雪竇拈拄杖云」――「須らく是れ壁立千仞にして始めて得べし」、是れナカ〳〵容易ぢやない。「達磨來也」、活達磨來やうとも、倒退三千ぢや。

「還有同生同死底衲僧麼」――「我に話頭を還し來れ」、圜悟我れこそ知音よ。サー退け〳〵、己にも云はせよ、謠はせて呉れよと。コノ下語は面白くない、老衲は取らぬ。「然も是くの如くなりと雖も、不平の事を平げんと要せば、須らく雪竇に於て商量して始めて得べし」、悟が不平か、迷が不平か、佛が不平か、不平だらけぢや。悟りの場拔けを仕樣と思ふなら、悟りのカスが拔けて始めて得やうぞ。「還つて知る麼」、サー知つたかドウぢや。「若し知らば、爾に許す、自由自在なることを」、若し會つたら、寢さうと起さうと、自由自在ぢや。「若し知らずんば、朝打三千、暮打八百」、若し會らなけりや、朝打三千暮打八百、拄杖のブチ折れる程、打つて〳〵打ちコカさうと。コリヤ一寸增しな好い下語ぢや。「同生同死」が濟めると、コノ語も濟めるぞ。

只如風穴示衆云若立一塵家國興盛不立一塵家國喪亡且道立一塵卽是不立一塵卽是到這裏須是大用現前始得所以道設使言前薦得猶是滯殼迷封直饒句下精通未免觸途狂見他是臨濟下尊宿直下用本分草料若立一塵家國興盛野老顰蹙意在立國安邦須藉謀臣猛將然後麒麟出鳳凰翔乃太平祥瑞也他三家村裏人爭知有恁麼事不立一塵家國喪亡風颯颯地野老爲什麼出來謳歌只爲家國喪亡洞下謂之轉變處更無佛無衆生無是無非無好無惡絕音響蹤跡所以道金屑雖貴落眼成醫又云金屑眼中醫衣珠法上塵己靈猶不重佛祖是何人七穿八穴神通妙用不爲奇特到箇裏衲被蒙頭萬事休此時山僧都不會若更說心說性說玄說妙都甩不著何故他家自有神仙境南泉示衆云黃梅七百高僧盡是會佛法底人不得他衣鉢唯有盧行者不會佛法所以得他衣鉢又云三世諸佛不知有貍

奴白牯却知有野老或顰蹙或謳歌且道作麼生會且道他具什麼眼却恁麼須知野老門前別有條章雪竇雙拈了却拈拄杖云還有同生同死底衲僧麼當時若有箇漢出來道得一句互爲賓主免得雪竇這老漢後面自點胸

【和訓】只だ風穴、衆に示して云ふが如きんば、若し一塵を立すれば、家國興盛し、一塵を立せざれば、家國喪亡すと。且らく道へ、一塵を立するや即ち是、一塵を立せざるや即ち是。這裏に到つて、須らく是れ、大用現前して始めて得べし。所以に道ふ、設使ひ言前に薦得するも、猶ほ是れ殼に滯り封に迷ふ。直饒ひ句下に精通するも、未だ途に觸れて狂見を免れず。他は是れ臨濟下の尊宿、直下に本分の草料を用ふ。若し一塵を立すれば、家國興盛し、野老顰蹙す。宣、國を立し邦を安んずるに在り、須らく謀臣猛將に藉るべし。然して後に麒麟田で鳳凰翔ける、乃ち太平の祥瑞なり。他の三家村裏の人、爭でか恁麼の事有ることを知らん。一塵を立せざれば、家國喪亡す。風、颯颯地。野老什麼と爲てか出で來つて謳歌す、只だ家國喪亡するが爲めなり。洞下に之れを轉變の處と謂ふ。更に佛無く衆生無く、是無く非無く、好無く惡無し、音響蹤跡を絕す。所以に道ふ、金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳と成ると。又た云く、金屑は眼中の翳、衣珠は法上の塵、已靈猶ほ重んぜず、佛祖是れ何人ぞと。七穿八穴、神通妙用、奇特と爲さず。箇裏に到つて、衲被蒙頭にして萬事休す。此の時山僧都て不會。若し更に心と說き性と說き、玄と說き妙と說く、都て用不著。何が故ぞ。他家に自ら神仙の境有り。南泉、衆に示して云く、黃檗七百の高僧、盡く是れ佛法を會する底の人、他の衣鉢を得ず。唯だ盧行者のみ有つて、佛法を會せず、所以に他の衣鉢を得と。又た云く、三世の諸佛、有ることを知らず、貍奴白牯、却つて有ることを知ると。野老或は顰蹙し、或は謳歌す。且らく道へ、作麼生か會せん。且らく道へ、他、什麼の眼を具してか却つて恁麼なる。須らく知るべし、野老門前、別に條章有ることを。雪竇、雙拈し了つて、却つて拄杖を拈じて云く、還つて同生同死底の衲僧有り麼と。當時若し箇の漢有つて出で來つて、一句を道ひ得て、互に賓主と爲らば、雪竇、這の老漢の後面に、自ら點胸することを免れ得ん。

【提唱】コレから圜悟の評ぢやが、此の評は南天棒は不贊成ぢや。風穴の示す處、雪竇の擧する處と、圜悟の評とは、許多違ふ處がある。「只だ風穴、衆に示して云ふが如きんば、若し一塵を立すれば、家國興盛し」と、併し、一塵を立せずして、家國は興盛ぢや。本則でも云ふた通り、此の南天棒は左樣ぢや。「一塵を立せざれば、家國喪亡すと」、大地に土が一ト嘗もなく、東海道に人ッ子一人通らぬ。「且らく道へ、一塵を立するや卽ち是」と、コリヤ緣起法界ぢや。サー隻手の音聲を聞け。サウでないと、是か不是か會らぬぞ。「一塵を立せざるや卽ち是」と、コリヤ緣起無生ぢや。ハヽヽ、可笑しくてならぬ。サー何故可笑しいナ。諸人看よ〳〵。「這裏に到つて、須らく是れ、大用現前して始めて得べし」と、立すると、立せざるとの、兩頭共に不是にし、同生同死を手に入れて、初めて「大用現前」ぢや。コレを、法幢を建て宗旨を立すると名付くるぢや。「所以に道ふ、設使ひ言前に薦得するも、猶ほ是れ殼に滯り封に迷ふ」と、コリヤ風穴の上堂の語ぢや。悟つて見れば、云ふともない、語るともないと合點するは、拔殼に滯つて、能う見泥を出ぬのぢや。ソリヤ縫罅の處を知らぬからぢや。「直饒ひ句下に精通するも、未だ途に觸れて狂見を免れず」と、一句下に於て萬事に精通するも、未だ〳〵知見情識が有つて、邪見の網を免れぬのぢや。「他は是れ臨濟下の尊宿、直下に本分の草料を用ふ」と、風穴はサ、臨濟下の尊宿ぢやから、直にコノ祖師門下の大事を用ひられた。「若し一塵を立すれば、家國興盛し、野老顰蹙す。意、國を立し邦を安んずるに在り」と、ソ

コで諸道具が揃ふて來るがサ、佛見法見もない本分の家山へ入得して見りや、何も用はないと云ふて、本分正位の漢は面を顰める。法度が多いからぢや。謀臣猛將等は、數日戰つて後、太平を致すぢやが、山家村裡の漢は嫌ふ、無事こそ好けれと云ふてサ。「須らく謀臣猛將に籍るべし。然して後に麒麟出で鳳凰翔ける、乃ち太平の祥瑞なり」と、四弘の誓願を備へた圓頓の菩薩の如き學道の士、勇猛の氣概を以つてからに、難透難解を漕ぎ拔けろ。サウあらうぞならば、一切種智を得て、眞の太平を致し、祥瑞を現はすぢや。「他の三家村裏の人、爭でか恁麼の事有ることを知らん」と、コリャ邊土の賤が伏屋の人を云ふ。「法藏論」に所謂、「少安にして以つて大安を知らず」と云ふたやうな人を指すのぢや。燕雀何んぞ大鵬の志を知らんやぢや。「一塵を立せざれば、家國喪亡す。風、颯颯地」と、外、諸緣を止め、泅魚滯瀝し、內心喘無く、病鳥芦に栖むぢや。本分さへ守つて居れば、ソレで好いと思ふて居るか。役に立たぬこッちや。「家國喪亡」で、金輪奈落まで掃き切つたなぞと、氣散んじなものぢや。「野老什麼と爲てか出て來つて謳歌す、只だ家國喪亡するが爲めなり」と、我法二空を悟つて二乘聲聞に陷り、宇宙双日なしなぞと云ふて居る偏見の輩は、無爲を樂んでからに謳歌するがサ、コリャ立枯の住處、空劫以前ぢや。「洞下に之れを轉變の處と謂ふ。更に佛無く衆生無く、是無く非無く、好無く惡無し、音響蹤跡を絕す。所以に道ふ、金屑貴しと雖も、眼に落ちて臀と成ると」、洞下ではサ、コレを本分の正位、五位の入り口と謂ふぢや。山河大地を轉じて自己とすると。只だコノ一枚悟りぢや不可ぬ。ソレぢや實にハヤ、無佛無衆生ぢや。更に跡方も無くなつて、永く菩提心を失ひ、魔道に墮ちるぞ。コヽが卽ち家國喪亡の處ぢや。「又た云く、金屑は眼中の臀」と、コノ四句は德山圓密禪師の頌ぢや。近頃はコヽ迄來た者も少い。「衣珠は法上の塵」と、イヤハヤ、汚ない語ぢや。「己靈猶ほ重んぜず」と、コヽに至つては、釋迦も達磨も何んでもない。「佛祖是れ何人ぞと」、宇宙双日なしぢや。ソレぢやのに何んのことか、佛の祖のと。「七穿八穴、神通妙用、奇特と爲さず」と、佛界魔界を透つて、一法も立せざる底、自由自在ぢや。神通ぢや、妙用ぢやと、何んの糞てんがうナ。「箇裏に到つて、衲被蒙頭にして萬事休す」と、ハア又た出た。痴々兀兀か。コリャ石頭が艸庵の歌ぢや。「此の時山僧都て不會」と、コリャ善だか惡だか、會せぬが好い。百不會、百不知が眞の太平ぢや。「若し更に心と說き性と說き、玄と說き妙と說く、都て用不著」と、コノざまで、何を用ち得るものぞ。餓鬼の重荷ぢや。「何が故ぞ、他家に自ら神仙の境有り」と、小果の羅漢、正位に證を取る底。機、位を離れずんば、毒海に墮在すとは此處ぢや。「南泉、衆に示して云く、黃梅七百の高僧、盡く是れ佛法を會する底の人、他の衣鉢を得ず。唯だ盧行者のみ有つて、佛法を會せず、所以に他の衣鉢を得と」、五祖(弘忍)下の七百の高僧はサ、佛法は會したが、衣鉢を得なんたぞ。六祖は佛法は會せなんたが衣鉢を得たと。サー若し一片の悟を認るならば、寧ろ舊時の迷に如かん哉ぢや。「又た云く、三世の諸佛、有ることを知らず、貍奴白牯、却つて有ること

を知ると」、コリヤ天臺の韶國師の語ぢや、「會元」の十にある。コノ語、錯つて見損ふぞ、恐しい「示衆ぢや。コノ場へ出す語ではない。三世の諸佛が向上の事有ることを知らずして、畜生奴が却つて知つて居るとサ。是れ家國興盛の處ぢや。「野老或は顰蹙し、或は謳歌す。且らく道へ、什麼生か會せん」と、顰蹙と謳歌と、コリヤ又た何方が好いナ。「且らく道へ、他、什麼の眼を具してか却つて恁麼なる」と、「他」とは野老ぢやが、野老が眼あるぢやない、此方へ取り用ひて云ふのぢや。「須らく知るべし、野老門前、別に條章有ることを」と、野老には野老で、別に向上の面白い事があるぢやと。併しサウは云ふものゝ、多寡が小果の見ぢや。「雪竇、雙拈し了つて、却つて拄杖を拈じて云く、還つて同生同死底の衲僧有り麼と」、雪竇が、家國興盛と家國喪亡との二つを拈し來つてから に、「同生同死」と云ふて出た。「當時若し箇の漢有つて出て來つて、一句を道ひ得て、互に賓主と爲らば、雪竇、這の老漢の後面に、自ら點胸することを免れ得ん」と、眞箇の衲僧が有つて、此處で互に賓主と爲つたら、「萬里の清風只だ自知す」なぞと、雪竇に我儘は云はせまいにサ。「這の老漢」とは風穴のことぢや。「後面」とは拈語を指す。「自ら點胸」なぞと云ふが、コレは點胸ではない、點胸と見ては迷惑ぢや。評は斯うぢやが、ドウモ本則とは違ふぞ。

野老從教不展眉　○三千里外有箇人○美食不中飽人喫　**且圖家國立**

雄基　○太平一曲大家知○要行卽行要住卽住○盡乾坤大地是箇解脫門儞作麼生立　**謀臣猛將今何在**　○有麼有麼○土曠人稀相逢者少○且莫點胸　**萬里清風只自知**　○旁若無人○敎誰掃地○也是雲居羅漢

【和讃】　野老從教あれ眉を展べざることを。（○三千里外、箇の人有り。○美食飽人の喫に中らず。）且らく國る家國雄基を立することを。（○太平の一曲、大家知る。○行かんと要すれば卽ち行き、住らんと要すれば卽ち住る。○盡乾坤大地、是れ箇の解脫門。儞作麼生か立せん。）謀臣猛將今何にか在る。（○有り麼有り麼。○土曠かに人稀れにして、相ひ逢ふ者の少し。○且らく點胸することを莫れ。）萬里の清風只だ自知す。（○旁若無人。○誰をしてか掃地せしめん。○也た是れ雲居の羅漢。）

【提唱】

頌　コレから雪竇の頌ぢや。

「野老從教あれ眉を展べざることを」と、エー、此の木地の儘、立木の儘の喰ひ拔け奴がと。サー風穴は、只だ向上の大事を拈じた。又た雪竇は人の知らざるとを恐れて擧揚したのぢや。佛國土の因緣、菩薩の威儀をボッ立てゝサ。安悟りには關はぬ。是れ雲門宗の大事ぢや。

「且らく圖る家國雄基を立することを」と、「野老從教あれ眉を展べざることを」ぢやが、雪竇な

ぞは左様でないぞ。人はドウあらうともサ。コノ法窟の爪牙に對して、時の學者が眉を顰めやうとも、喜ばうともサ、ソンナことには關はず、身を碁石に磨つても、難透難解をボッ越えて、太平の基業を建てるぢや。サウあらうぞならば、百萬騎の中へ切り込んでも、チッとも氣遣ひない。

「謀臣猛將今何にか在る」と、コノ「謀臣猛將」とはサ、實に佛に代つて化を揚ぐる底の者ぢや。正中來を越えて、兼中至に出でゝ下化するぢや。今一時はサウ云ふ人もないぢやテ。コノ句の寒じいことは、塗毒皷のやうぢや。サー此の句を知ると、次ぎ下の「萬里の清風只だ自知す」の句も知れやうぞ。

「萬里の清風只だ自知す」と、冷暖自知ぢや。ナンと云ふたとて、自知するでなければ知れぬ。獨り狂言するより外はない。コノ些子は父子不傳底ぢや。雪竇、コノ些子のスタレ果てたのを嘆いて、コレを扶起せんが爲めに斯のやうに頌したぢや。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「野老從教不展眉」――「三千里外、箇の人有り」、風穴と雪竇とは知音同士ぢや。殊に此處には、圜悟と云ふものが居るぞ。「美食飽人の喫に中らず」、雪竇、ガィにけなりがらすな。そんな悟りの穢いものは、衲は可厭ぢや〳〵。

「且圜家國立雄基」――「太平の一曲、大家知る」、作家なりや、ソリヤ知つて居る。「行かんと要すれば卽ち行き、住らんと要すれば卽ち住る」、コノ外、何んの雄基があらうぞ。「盡乾坤大地、是れ箇の解脫門。爾作麼生か立せん」、盡大地、是れ解脫門ぢやから、雄基の立て處はあるまい。雪竇、お主はコノ解脫門に向つて、ドウ立するぞ。

「謀臣猛將今何在」――「有り麼有り麼」、サーその謀臣猛將、有るかドウぢや。「土曠かに人稀れにして、相ひ逢ふ者の少し」、雪竇、お主の境界は、遠州の味方ヶ原に出たやうぢや。味方ヶ原は古戰場ぢや。コノ南天棒も初行脚の時、奥山の半僧坊の方廣寺で、龍水和尙の碧巖會に參ずる爲めに通つてみたが、隨分廣いものぢや。行き逢ふた人と云ふては、ホンの數へる程しかなかつた。「目らく點胸すること莫れ」、雪竇、ソレぢや餘んまり味噌臭いぞ。

「萬里清風只自知」――「旁若無人」、雪竇、人も無げに、何を云やるぞ。「誰をしてか掃地せしめん」、ソンナに大口を開いたら、隨侍の者もあるまい。「也た是れ雲居の羅漢」、エー自慢臭い。總じて自慢するものを「雲居の羅漢」と云ふ。

適來雙提了也這裏却只拈一邊放一邊裁長補短捨重從輕所以道野老從敎不展眉我且圜家國立雄基謀臣猛將今何在雪竇拈拄杖云還有同生同死底衲僧麼一似道還有謀臣猛將麼一口吞却一切人了也所以道土曠人稀相逢者少還有相知者麼出來一坑埋却萬

里清風只自知便是雪竇點胸處也

【和訓】適來は雙提し了れり。這裏は却つて只だ一邊を拈じ、一邊を放す。長を裁り短を補ひ、重を捨て輕に從ふ。所以に道ふ、野老從教あれ眉を展べざることをと。我れ且らく家國、雄基を立せんとを圖る、謀臣猛將今ま何にか在ると。雪竇、拄杖を拈じて云く、還つて同生同死底の衲僧有り麼と。一へに還つて謀臣猛將有り麼と道ふに似たり。一句に一切の人を呑却し了れり。所以に道ふ、土曠に人稀れにして、相ひ逢ふ者の少しと。還つて相ひ知る者の有り麼。出で來れ、一坑に埋却せん。萬里の清風只だ自知すと。便ち是れ雪竇、點胸の處なり。

【提唱】コレから圜悟の評ぢやが、コノ評も不徹在ぢや。南天棒は取らぬ。「適來は雙提し了れり」と、サー本則の、立不立を雙提して、所謂、建立と掃蕩とを雙了したがサ。「這裏は却つて只だ一邊を拈じ、一邊を放す」と、建立卽ち「興盛」を取り上げ、掃蕩卽ち「喪亡」を放つたと云ふがサ、全體、建立と掃蕩と、二つはない。圜悟ぢやあるまいし。「長を裁り短を補ひ、重を捨て輕に從ふ」と、若し、正の長を裁つて偏の短を補ひ、正の重を捨てゝ偏の輕に從ふと評して、建掃の二門、正偏の二位を分つたならば、未だ夢にも本則及び頌を見ざること在らん。何故ならばサ、「我は愛す、韶陽新定の機、一生人の與に釘を抽き橛を拔くことを」ぢや。「所以に道ふ、野老從教あれ眉を展べざることをと」、サー是れが立拈ぢや。「我れ且らく家國、雄基を立せんとを圖る」と、コリヤ雪竇ぢやない。風穴が、正偏回互、今時那邊を以つて、家國、雄基を立せんとを圖ると云ふのぢや。成る程〳〵。コヽが一塵を立せぬ處と見ねば、禪宗の飯は喰はれぬぞ。「謀臣猛將今何にか在ると」、茲に至つては、今時那邊、正偏、爪牙も神符も入用ぬぢや。「雪竇、拄杖を拈じて云く、還つて同生同死底の衲僧有り麼と、一へに還つて謀臣猛將有り麼と道ふに似たり。一口に一切の人を呑却し了れり」と、雪竇がサ、掃蕩も建立も一つにしてサ、天下の衲僧を一口に呑却して了つた。「所以に道ふ、土曠かに人稀れにして、相ひ逢ふ者の少しと。還つて相ひ知る者の有り麼。出で來れ、一坑に埋却せん」と、コリヤ下語を提げ出してサ、同生同死、建立掃蕩、今時那邊、一枚に、雪竇も風穴も、一つ穴に葬つて仕舞へと。コレぢや不可ぬ。茲では、共に雄基を立すると云ふべきぢや。コレでは元の悟りの穴ぢやわい。「萬里の清風只だ自知すと。便ち是れ雪竇、點胸の處なり」と、コレを眞箇に點胸と見ると蹉過するぞ。南天棒が注意して置かう。コレには少しく仔細がある、人々氣を付けて看るが好いぞ。先づコレで六十一則は終りぢや。

【注釋】〔三賢〕小乘にては、五停心觀位、別相念住位、總相念住位の聖者を三賢と云ひ、大乘にては、十住、十行、十廻向の菩薩を三賢と云ふ。〔十聖〕三賢に對す、十地の菩薩を云ふ。三賢十聖は、六道四生に對して云ふ。〔擇法眼〕を具したる大善知識云々〕擇法眼とは法を擇ぶ眼なり。卽ち具眼と云ふことを意味す。〔雪峯の棍毬〕雪峯義存禪師、一日玄沙の來るを見て、三箇の木毬を一齊に輾す。玄沙便ち見て、斫牌の勢を作す。雪峯深く之れを肯ふと。〔仰山の枕子〕公案なり。僧、仰山に問

ふ、法身還つて解脫の法有りや也た無や。山云く、我れ說き得じ、別に一人在つて說き得ん。僧云く、說き得る底の人、什麼の處にか在る。山、枕子を推し出す。溈山聞いて乃ち云く、寂子、劍刃上の事を用ふと。〔一切種智〕三智の一、能く一種の智を以つて一切諸佛の道法を知り、又た能く一切衆生の因種を知るを云ふ。「觀音玄義卷下」に「能く一種の智に於て、一切の道を知り、一切の種を切り、一相寂相種の行類、能く知り能く解するを一切種智と名く」と。〔空刼〕世界壞滅し了つて後、再び成立せざる已前の時間、即ち空虛を意味す。〔天台の韶國師〕名は德韶、處州龍泉の陳氏の子。年十五にして出家す。遊方して初め投子山の大同禪師に謁し、次に龍牙の疎山に謁す。是くの如くして五十四員の善知識に歷參し、最後に江西の撫州に法眼文益禪師に謁して「曹源の一滴水」の問答を聞いて大悟す。後に天台に入つて止り、天台の敎儀を究む。吳越の忠懿王に重ぜられ、國師號を賜はる。宋の大祖、開寶五年六月二十八日、蓮華峯に寂、壽八十二。〔方廣寺〕遠江國引佐郡奥山村に在り、臨濟宗方廣寺派の本山なり。〔龍水和尙〕方廣寺に住す、嘉永、安政年代なり。號を積翠軒と云ふ。

第六十二則　雲門中有一寶　【雲門中有一寶】

垂示云、以無師智發無作妙用、以無緣慈作不請勝友、向一句下有殺有活、於一機中有縱有擒、且道什麼人曾恁麼來試擧看。

【和訓】垂示に云く、無師の智を以つて、無作の妙用を發し、無緣の慈を以つて、不請の勝友と作る。一句下に向つて、殺有り活有り。一機の中に於て、縱有り擒有り。且らく道へ、什麼人か曾つて恁麼にし來る。試に擧す、看よ。

【提唱】コレは第六十二則、「雲門中有一寶」ぢや。コノ則はサ、臨濟の句中に、自ら雲門の言句を藏す。則ち世人の知らざる大事を明す。以つて參祥す可き爾。是れを東海日多の兒孫と曰ふ歟。

「垂示に云く、無師の智を以つて、無作の妙用を發し」と、「無師の智」とはサ、自己の腕前で割り出すぢや。釋迦に依つて得るでもない、達磨に依つて得るでもない、自受用三昧ぢや。赤子が乳を吮ふことを知るやうなものぢや。コリヤ實に大圓鏡智ぢや。サー此の智を以つて、別に機を加へず、夫れより哆々唎々、難透を透過してサ、「無作の妙用」、所謂三智を發するぢや。サウあらうどならば、「摺木は直く杓子は曲れり」で、ソノ通り働くぢや。卽ち一切の法に於て、心住處無く、作して作すなく、作すなくして作す。ぢやから妙用と云ふ。「法華經」に、「一切智、佛智、自然智、無師智」とある。ソシテ「玄贊」には、「一切智とは空智を觀ずるなり、三乘同じく有り。佛智とは、有事を觀する智、唯だ佛獨り成す。自覺に依つて此の二智を生ず、故に自然智と名く。他の緣を待たず、故に無師智と名く。或は智性を自然智と名け、智相を無師智と名く」とある。「無緣の慈を以つて、不請の勝友と作る」と、コノ「無緣の慈」と云ふのは、大乘の慈ぢや。悟つて後には、是れは起らねばならぬぞ。度す可き衆生の無い處から起る慈悲ぢや、實に化他自在の境ぢや。コノ慈悲のことは、

「涅槃經」の十四、梵行品に云ふてあるのに、「三種の慈悲あり。一には衆生緣慈、乃ち一切衆生、皆な五蘊の法を具足す、故に見て慈悲を起すなり、是れ小慈なり。二には法緣慈、三には無緣の慈、能所の心を忘して慈を起す、是五蘊の法を信じ慈悲を起すなり、是れ中慈なり。三には無緣の大慈を以つて、同生同死してからに、假令奈落の底迄も行つれ大乘の慈なり」と。サー此の無緣の大慈を以つて、同生同死してからに、假令奈落の底迄も行つて濟度せにやならぬぞ。先方で請はんでも、此方から出掛けてやる。コレが無緣の慈と云ふものぢや。「華嚴經」には、「當に先づ一切衆生をして、無上菩提、無餘涅槃を得せしめ、然して後ち成佛せしめんことを要すべし。何が故ぞ。衆生、我が發心を請ふに非ず、我れ自ら衆生の爲めに、不請の友と作る」と云ふてある。「維摩經」の佛國品にも、「衆生請はず、友として之れを安んず」とある。又た肇法師の語にも、「眞友は請を待たず、譬へば慈母の嬰兒に赴くが如し」と、斯やうな譯ぢやから、コノ南天棒の東奔西走も會るじやらう。「一句下に向つて、殺有り活あり」と、難透の一句ぢや。コノ古則を手に入れ切つて見よ。何事も好き自在ぢや。「一機の中に於て、縱有り擒有り」と、大地寸土無しぢや。拈鎚竪拂に自ら八境界あり、所有無量の法門、妙義を現ずるぞ。「且らく道へ、什麼人か曾つて恁麼にし來る。試に擧す、看よ」と、サー何人が此の八境界を自由にし得るかッ。本則を看るが好い。

擧雲門示衆云乾坤之內　○土曠人稀○六合收不得　宇宙之間　○休向鬼窟裏作活計○蹉過了也　中有一寶　○在什麼處○光生也○切忌向鬼窟裏覓　祕在形山　○拶○點　拈燈籠向佛殿裏　○猶可商量　將三門來燈籠上　○雲門大師是卽是不妨諦訛○猶較些子○若子細檢點將來末免屎臭氣

【和訓】擧す。雲門、衆に示して云く、乾坤の內。（○土曠かに人稀れなり。○六合收不得。）宇宙の間。（○鬼窟裏に向つて活計を作すことを休めよ。○蹉過了也。）中に一寶有り。（○什麼の處にか在る。○光生ぜり。○切に忌む、鬼窟裏に向つて覓むることを。）形山に祕在す。（○拶。○點。）燈籠を拈じて佛殿裏に向ひ。（○猶ほ商量しつ可し。）三門を將つて燈籠上に來す。（○雲門大師、是は則ち是、妨げず諦訛なることを。○猶ほ些子に較れり。○若し子細に檢點し將ち來れば、未だ屎臭氣を免れず。）

【提唱】

本則　コレから本則ぢや。

「擧す。雲門、衆に示して云く、乾坤の內」と、コリヤ百則と掛合ひの則ぢや。盤に和して托出す夜明珠か。言外の玄機、不思議の妙用、總べて這裏に在るぞ。併し哀しむべし、此の道、今人は棄てゝ土の如しぢや。コノ示衆、前の四句は肇論の文、後の二句は雲門の活處ぢや。南天棒曰く、此

の則は別に大事が有るぞ。智恵の有る者は來年になつて知りつらう。

「宇宙の間」と、「天地四方を宇と曰ひ、古往今來を宙と曰ふ」と、「花抄」に云ふてある。マーそれで好い。

「中に一寶有り」と、サーこゝに三千世界と釣換のものがある。實にハヤ、如意寶珠とも、阿字不生とも、不可思議とも、名の付けやうのないものがあるぞ。

「形山に祕在す」と、五蘊の形山に祕在して有るとサ。併しコリヤ彼方からは祕在せぬ、只だ手前が知らぬからぢや。

「燈籠を拈じて佛殿裏に向ひ」と、理事不二、眞妄一如ぢや。立臼が燈籠の中で踊るぞ。コノ處は只はいかぬ。

「三門を將つて燈籠上に來す」と、昨夜も立臼が舞ひ踊り騷いだぞ。サー如何ぢや。此處等はシツカリ看て、斷見にならぬが好い。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「擧雲門示衆云乾坤之內」――「土曠かに人稀れなり」、コノ一寶は實に龍女以來のものぢや。コレが現ずれば、三千世界に人ッ子一人ないぞ。「六合收不得」、コイツはナカ〳〵廣大な、圓滿の珠ぢやから、コノ座には收らぬ。六方洹沙の刹土にも置き處はないぞ。

「宇宙之間」――「鬼窟裏に向つて活計を作すことを休めよ」、コリヤ圜悟、腕前を倦くつたナ。

「六合收不得」の鬼窟裏に入るまいぞと。「蹉過了也」、上のやうなたわごとを云ふと、蹉過するぞ。コリヤ好下語ぢや。

「中有一寶」――「什麼の處にか在る」、サー何處にあるか。「光生ぜり」、イヤ〳〵、光りもせぬが、暗くもない。「切に忌む、鬼窟裏に向つて覓むることを」、暗もないが明もない、ぢやから正位に證を取るな。

「祕在形山」――「拶」、コリヤ拶殺ぢや。祕在の處を拶破せよ。「點」、コリヤ點破ぢや。打き碎くぢや。併し點破するは、第二、漸の旨ぢや。頓大乘はサ、「逐はねども同じ溪川の水」でなくちやならぬ。ぢやから「形山」を破らずサ、其の儘の寶珠として置けば好いに。

「拈燈籠向佛殿裏」――「猶ほ商量しつ可し」、サー此れは、トクと商量せにやならぬ。商量の餘地がまだ〳〵充分あるぢや。

「將三門來燈籠上」――「雲門大師、是は卽ち是、妨げず誹訕なることを」、コレは面白い下語ぢや。サーコノ誹訕の處を、トクと見屆けよ。コレが見えなきや、隻手を聞いたとは嘘々。「猶ほ些子に較れり」、マーこんなものか。「若し子細に檢點し將ち來れば、未だ屎臭氣を免れず」、併しサ、雲門が傳來の些子を知らせたさに、悟りのヒリ糞の臭いのも知らずに居るわい。コリヤ好下語〳〵。コ

ノ中に大事があるぞ。

雲門道、乾坤之內宇宙之間中有一寶祕在形山且道雲門意在釣竿頭意在燈籠上此乃肇法師寶藏論數句雲門拈來示衆肇公時於後秦逍遙園造論寫維摩經方知莊老未盡其妙肇乃禮羅什爲師又參瓦棺寺跋陀婆羅菩薩從西天二十七祖處傳心印來肇深造其堂奧肇一日遭難臨刑之時乞七日假造寶藏論雲門便拈論中四句示衆大意云如何以無價之寶隱在陰界之中論中語言皆與宗門說話相符合不見鏡清問曹山清虛之理畢竟無身時如何山云理卽如是事作麼生清云如理如事山云喘曹山一人卽得爭奈諸聖眼何清云若無諸聖眼爭知不恁麼山云官不容針私通車馬所以道乾坤之內宇宙之間中有一寶祕在形山大意明人人具足箇箇圓成雲門便拈來示衆已是十分現成不可更似座主相似與儞注解去他慈悲更與儞下注脚道拈燈籠向佛殿裏將三門來燈籠上且道雲門恁麼道意作麼生不見古人云無明實相卽佛性幻化空身卽法身又云卽凡心而見佛心形山卽是四大五蘊也中有一寶祕在形山所以道諸佛在心頭迷人向外求內懷無價寶不識一生休又道佛性堂堂顯現住相有情難見若悟衆生無我我面何殊佛面心是本來心面是娘生面刮石可移動箇中無改變有者只認昭昭靈靈爲寶只是不得其用亦不得其妙所以動轉不得開撥不行古人道窮則變變則通拈燈籠向佛殿裏若是常情可測度得將三門來燈籠上還測度得麼雲門與儞一時打破情識意想得失是非了也雪竇道我愛韶陽新定機一生與人抽釘拔楔又云曲木據位知幾何利刃翦却令人愛他道拈燈籠向佛殿裏這一句已截斷了也又將三門來燈籠上若論此事如擊石火似閃電光雲門道汝若相當去且覓箇入路微塵諸佛在儞脚跟下三藏聖教在儞舌頭上不如悟去好和尙子莫妄想天是天地是地山是山水是水僧是僧俗是俗良久云與我拈面前按山來看便有僧出問云學人見山是山水是水時如何門云三門爲什麼從這裏過恐儞死却遂以手劃一劃云識得時是醍醐上味若識不得反爲毒藥也所以道了了了了時無可了玄玄玄處直須呵雪竇又拈云乾坤之內宇宙之間中有一寶祕在形山掛在壁上達磨九年不敢正眼覷著而今衲僧要見劈脊便棒看佗本分宗師終不將實法繫綴人玄沙云羅籠不肯住呼喚不回頭雖然恁麼也是靈龜曳尾雪竇頌云

【和訓】雲門道く、乾坤の內、宇宙の間、中に一寶有り、形山に祕在すと。且らく道へ、雲門の意、釣竿頭に在るか、意、燈籠上に在るか。此れは乃ち肇法師の寶藏論の數句、雲門拈じ來つて衆に示す。肇公時に後秦の逍遙園に於て論を造る。維摩經を寫して、方に莊老の未だ其の妙を盡さざるとを知る。肇乃ち羅什を禮して師と爲す。又た瓦棺寺の跋陀婆羅菩薩の、西天の二十七祖の處從り、心印を傳へ來るに參ず。肇深く其の堂奧に造る。肇、一日難に遭ふ。刑に臨むの時、七日の假を乞ふて、寶藏論を造る。雲門便ち論中の四句を拈じて衆に示す。大意に云く、如何して無價の寶を以つて、陰界の中に隱在すと。論中の語

貴、皆な宗門の說話と相ひ符合す。見ずや、鏡淸、曹山に問ふ、淸虛の理、畢竟身無き時如何。山云く、理は卽ち是くの如し、事、作麼生。淸云く、如理如事。山云く、曹山一人を瞞ずることは卽ち得たり、諸聖の眼を爭奈何ん。淸云く、諸聖の眼無くんば、爭でか不恁麼なることを知らん。山云く、官には針をも客さず、私に車馬を通ずと。所以に道ふ、乾坤の內、宇宙の間、中に一寶有り、形山に祕在すと。大意、人人具足、箇箇圓成を明す。雲門便ち拈じ來つて衆に示す、已に是れ十分に現成す、更に座主に似て相ひ似て、倆が與に注解し去る可からず。他、慈悲、更に倆が與に注脚を下して道は、燈籠を拈じて佛殿裏に向ひ、三門を將つて燈籠上に來すと。且らく道へ、雲門恁麼に道ふ意作麼生。見ずや、古人云く、無明の實相卽佛性、幻化の空身卽法身と。又た云く、凡人に卽して佛心を見ると。形山は卽ち是れ四大五蘊なり、中に一寶有つて形山に祕在すと。所以に道ふ、諸佛心頭に在り、迷人外に向つて求む、內に無價の寶を懷いて、識らずして一生休すと。又た道く、佛性堂堂として顯現す、住相の有情は見難し。若し衆生無我なることを悟らば、我が面何んぞ佛面に殊らんと。心は是れ本來の心、面は是れ娘生の面。刼石は移動す可くとも、箇の中改變無しと。有る者は只だ昭昭靈靈を認めて實と爲す、只だ是れ其の用を得ず、亦た其の妙を得ず。所以に動轉すると得ず、開擬して行せず。古人道く、窮する則んば變じ、變ずる則んば通ずと。燈籠を拈じて佛殿裏に向ふ。若し是れ常情ならば、測度し得可し。三門を將つて燈籠上に來す。遡つて測度し得んや麼。雲門、倆が與に一時に情識意想、得失是非を打破し了れり。雪竇道く、我は愛す潤陽新定の機、一生人の與に釘を抽き楔を拔くことをと。又た云く、曲木、位に據る、知んぬ幾何ぞ、利刃纔却して人をして愛せしむと。他道く、燈籠を拈じて佛殿裏に向ひと。道の一句、已に截斷し了れり。又た三門を將つて燈籠上に來すと。若し此の事を論ぜば、擊石火の如く、閃電光に似たり。雲門道く、汝若し相ひ當り去らんとならば、且らく箇の入路を覓めよ。微塵の諸佛、倆が脚跟下に在り。三藏の聖敎、倆が舌頭上に在り。如かじ、悟り去つて好ならんには。和尙子、妄想すること莫れ。天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水、僧は是れ僧、俗は是れ俗。良久して云く、我が爲に面前の按山を拈じて來れ、看んと。便ち僧有り、出でゝ問ふて云く、學人、山は是れ山、水は是れ水と見る時如何。門云く、三門什麼と爲てか這裏從り過ると。倆が死却せんことを恐れて、遂に手を以つて劃一劃して云く、識得する時は是れ醍醐の上味、若し識不得ならば、反つて毒藥と爲ると。所以に道く、了了了の時了す可き無く、玄玄玄の處直に須らく呵すべしと。雪竇又た拈じて云く、乾坤の內、宇宙の間、中に一寶有り、形山に祕在し、壁上に掛在す。達磨九年、敢て正眼に覷著せず。而今納僧見んと要すや、劈脊に便ち棒せんと。看よ、他の本分の宗師、終に實法を將つて人を繫縛せざることを。玄沙云く、羅籠すれども背て住せず、呼喚すれども頭を回さずと。然も恁麼なりと雖も、也た是れ靈龜、尾を曳く。雪竇、頌して云く。

【提唱】 コレから圜悟の評ぢや、が、コノ評は南天棒は取らぬ。强ひて用ひるなら、多數の字を削つて用ひるぢや。此の儘ぢや所依す可からず。全體に雪竇の頌意とは大いに違ふぞ。「雲門道く、乾坤の內、宇宙の間、中に一寶有り、形山に祕在すと」、コレは、錯つて會する者が多い。「且らく道へ、雲門の意、釣竿頭に在るか、意、燈籠上に在るか」と、サー雲門の意は、釣竿頭、卽ち前の四句に在るか。或は燈籠上、卽ち後の二句に在るか。コリャ畢竟、隻手より割り出したものぢやが、コノ十四字は無い方が好い、削るべし〳〵。「此れは乃ち肇法師の寶藏論の數句、雲門拈じ來つて衆に示す。肇公時に後秦の逍遙園に於て論を造る」と、コノ肇法師と云ふは、京兆(長安)の人ぢやつたが、家が貧しいので、人の爲に傭書となつた(今で云へば筆耕ぢや)。博く經史を觀たが、ソノ中でも尤も莊老の學に通じた。年十二歲にして沙門と爲り、其の名聲は三輔に震ふた。羅什、之れを見て驚いて、法中の龍象なりと云ふて嘆稱した。雲門はソノ肇法師の著された「寶藏論」中の數句を取つて、衆に示したのぢや。コノ「寶藏論」はサ、無量の法財招かずして到り、又た心源、寶藏を開くとでも云はうか。コレは後秦の逍遙園で書かれたと云ふ。後秦と云ふは、姚萇字は景茂が、東晉の大元十

一年、長安に入つて皇帝の位に即いたを云ふ。「維摩經を寫して、方に莊老の未だ其の妙を盡さゞることを知る。肇乃ち羅什を禮して師と爲す」と、此處には「初」の一字を入れてみるが好い。コノ「維摩經」は、後漢の嚴佛調と云ふ人が譯したのぢや。サー維摩經を寫してからに、自分が今迄尊んで居た莊老の二學は、未だ〳〵二乘緣覺がエイサラぢや、トテモこれには及ぶものでないと云ふことが解つたものぢやから、鳩摩羅什を拜して、師と仰いだ。「又た瓦棺寺の跋陀婆羅菩薩の、四天の二十七祖の處從り、心印を傳へ來るに參ず。肇深く其の堂奥に造る」と、コノ「瓦棺寺」と云ふは、「水滸傳」の中に出て來る寺で、能く芝居でもするから、皆も名前丈は知つて居る筈ぢや。ソノ由緒を云ふて見ると、サー妙なこともあるものぢや。昔ソノ地に法華の持者が有つて、死んだ後、土で燒いた瓦のやうな瓶に似た棺に納めて埋葬したさうぢや。スルト其の後、墓の上に蓮花が生えた。コノ南天棒も瓶の中に安定することに、チャンと決めてあるが、サー何が生えるかな。ソコデ人々は之れを奇として墓を開いてみればサ、死者の口中から生えて居たので、ソノ供養の爲に其處に寺を建てゝ、瓦棺寺と號したと。李白の「七横江の詞」に、「山を倒す白浪、瓦棺閣よりも高し」とある。肇公は即ち此の寺に居つた跋陀婆羅菩薩に參じたのぢや。「跋陀婆羅」は、具には佛跋陀婆羅と云ふ、之れを飜すると覺賢と云ふ。「華嚴經」や「圓覺經」を譯した人ぢや。跋陀婆羅の「婆」の字は衍字ぢや。圓悟の評では、コノ跋陀羅は、西天の第二十七祖、般若多羅の法を嗣いだとあるが、又た一說には、跋陀羅は法を達磨の法弟佛大光に嗣いだ。コレは西來百年前のことぢやと云ふ。唐へ來てから、初め羅什に謁して、長安に居つた。然るに今も昔も同じことか、羅什の徒弟の爲に嫉まれて、長安を逐ひ斥けられたが、盧山の遠法師、弟子を遣はして之れを請じ、禪經を譯させた。具には「正宗記」を見るが好い。兎に角、肇はコノ跋陀羅に參じ、智能人に過ぎて居るから、造詣する處も亦た深かつたのぢや。「肇、一日難に遭ふ、刑に臨むの時、七日の假を乞ふて、寶藏論を造る」と、何故難に遇ふたかと云ふに、後秦の國王符堅、肇に勅して、俗に還らしめて臣と爲さんとしたが、肇が肯ぜなかつたので、國王大いに怒り、遂に之れを刑した。肇はソノ時、七日の假を乞ふて「寶藏論」を造り、更に辭世の詞を賦した、コリャ有名な頌ぢや。曰く、「五蘊本と有らず、四大本來空、頭を將つて白刃に臨む、猶ほ春風を斬るが如し」と。其の時僅かに三十二歳ぢやつた、若いものぢや。「雲門便ち論中の四句を拈じて衆に示す。大意に云く、如何して無價の寶を以つて、陰界の中に隱在すと」、コノ「大意」の二字が未審しい。コレより已下、「相符合」に至る二十九字は削つた方が好い。眞如の月を陰界に隱すなぞとは不可々々。「論中の語言、皆な宗門の說話と相ひ符合す」と、コリャ雲門の語とは、雲泥の隔りがあるぞ。よしんば宗門の說話とは符合してもサ、雲門の語とは大いに違ふた。同じことなら、宗門初心の說話と書きたい。サウあらうぞならば、一寸見られる。「見ずや、鏡淸、曹山に問ふ、淸虛の理、畢竟身無き時如何」と、コノ鏡淸は作家ぢや。

コノ問は鏡清でなけらにや提出が出來ぬ、賞す可し〳〵。「清虚の理」とはサ、眞實無相になつた時のとぢや。即ち本有の佛性が露はれてサ、肉身舍利と現ずると身は隱くれる、身が直に清虚となるからぢや。「清虚之理畢竟無身」の八字は、「寶藏論」中、「廣照空有品」に在る語ぢや。今ま「寶藏論」の意を汲んで云はうぞならば、迷ふ者は、山河大地及び此の色身を實有と認むるが故に、我他、彼此が起る。元來清虚の一理のみぢや。色身はないもの、山河大地もないものぞと云ふのぢや。「山云く、理は即ち是くの如し、事、作麼生」と、理事不二でなくちやならぬ、エー如何ぢやと。コノ糞横著者め。「清云く、如理如事」と、コリヤ又た面白い。コノ答は送り狼ぢや、マルデ燈心で斬り合ふやうなものぢや。鏡清、ナカ〳〵ひるまぬ。「山云く、曹山一人を瞞ずることは即ち得たり、諸聖の眼を爭奈何ん」と、曹山一人を瞞著することは出來ても、諸聖の眼を瞞著することはなるまいと。曹山もナカ〳〵許さぬ、押し掛け〳〵問ひ詰める。「清云く、諸聖の眼無くんば、爭でか不恁麼なることを知らん」と、ウン、貴公が諸聖の眼を開けずんば、サウでないと云ふことは知るまいと。コリヤ又た格別な答ぢや、サテ〳〵達者なものぢや。「山云く、官には針をも容さず、私に車馬を通ずと」、ウン左樣か、穿鑿すれば許しはせぬが、ソンナラ内證にして差し置くぞ。「所以に道ふ、乾坤の内、宇宙の間、中に一寶有り、形山に祕在すと」、本則にある句が出たわい。「大意、人人具足、箇箇圓成を明す」と、肇論の大意は斯う〳〵ぢやと。コノ十一字は間違ひぢや。雲門の意はサウでない。「雲門、便ち拈じ來つて衆に示す」と、雲門拈じ來れば、瓦礫も是れ黄金か。「已に是れ十分に現成す、更に座主に似て相ひ似て、儞が與に注解し去る可からず」と、雲門示衆の十六字の上に、已に是れ十分に現成すと。サー何んと現成したぞ。言句が過ぎたとはドウぢや。「他、慈悲、更に儞が與に注脚を下して道く、燈籠を拈じて佛殿裏に向ひ、三門を將つて燈籠上に來すと」、コノ二十四字は削つた方が好い、納は取らぬ。一寶即ち是れ形山ぢや、形山即ち是れ一寶ぢや。雲門が慈悲で、更に儞の爲に注脚を下してと云ふがサ、コレを若し注脚とするならば、雲門大師は頭を病んで、寢床に入らうぞ。コノやうな評では、大事な示衆が、煎じカスになる。「且らく道へ、雲門恁麼に道ふ意作麼生」と、サー雲門の意は如何ぢやと。「見ずや、古人云く」と、コレから、「刻石可移動箇中無改變」と云ふに至る漢字百十四字は削つて見るが好い。是れ等古人の語、惡くはないが、此處に持つて來ては、分別了簡に渉つて好くない。ぢやから納は取らぬのぢや。「無明の實性即佛性、幻化の空身即法身と」、コレは永嘉の「證道歌」にある句ぢや。無明を推し究めて見ると、即ち佛性ぢや。無明の外に佛性はない。「幻化の空身即法身」で、澁柿を見よ。甘干となるぞ。「又た云く、凡心に即して佛心を見ると。形山は即ち是れ四大五蘊なり、中に一寶有つて、形山に祕在すと」、コレは澄觀大師（清涼國師）の語ぢや。即ち「華嚴大疏」の序句ぢや。サー有るの無いの、孕んだの產んだのと、一寶は内外の間にはないぞ。ソレを「中に」とは何んのことぢや、何處も彼處も此の一寶ぢやぞ。

「所以に道ふ、諸佛心頭に在り、迷人外に向つて求む、内に無價の寶を懷いて、識らずして一生休すと」、コレは長沙景岑の語ぢや。三世の諸佛も外にはないぞ、ソレを西の方ぢやと東の方ぢやと、探し廻つて、自己に彌陀を持つて居るのも知らず、ヤミ〳〵と徒死をするぢや。三世の諸佛も吹き出さう。「又た道く、佛性堂堂として顯現す、住相の有情は見難し。若し衆生無我なることを悟らば、我が面何んぞ佛面に殊らんと」、コレも長沙の語ぢや。好いことは好いがサ、雲門の語に比すれば間違ふぞ。天堂地獄引ッからげて、ノッシラと、ソレ其の通り此の座敷に現はれて居る。併し狼狽者は吸ふてみるともならぬ。若し自性無我なる處へ行き付くとサ、猫の面も杓子の面も別に變つたことはないと。コレは安悟りぢや。「心は是れ本來の心、面は是れ娘生の面。刼石は移轉す可くとも、箇の中改變無しと」、コリャ懶瓚和尚の語ぢや。山河大地引ッからげて「本來の心」ぢや。親の產み付けて呉れた面が直に如來の面ぢや。サー刼石はデングリ返らうとも、本來の心、娘生の面を見屆けたものは改變なしぢやと。コレ迄が好くないぢや。「有る者は只だ昭昭靈靈を認めて寶と爲す、只だ是れ其の用を得ず、亦た其の妙を得ず。所以に動轉すること得ず、開撥して行せず」と、コレからの評は好い。黑い眼で見ずに見るぢや。ナカ〳〵此の中、久しく駄目を寶と思つた計りで居られるものでない。柳は綠、花は紅、雀はチウ〳〵、鴉はカァ〳〵ぢや。どうして〳〵、堅の棒を横に直すこともならず、偏正回互向去刼來、自由に働けぬ。ぢやから轉變自在がなく、大道をオッ開いて、人の爲に應化することは出來ぬ。「古人道く、窮する則んば變じ、變ずる則んば通ずと」、コリャ易の語ぢや。難透の話に行き詰つて、大地黑漫々の時に、雙手の聲如何と、究め去り究め來れば、山も無くなり川も無くなる。サー此處になれば、内典にも外典にも、皆な通ずるぢや。「燈籠を拈じて佛殿裏に向ふ。若し是れ常情ならば、測度し得可し」と、拄杖を拈じて三千界を呑ましむるぞ。コリャ下語の、「猶ほ商量す可し」と云ふに應ずるぢや。「三門を將つて燈籠上に來す。還つて測度し得んヤ」と、コレぢや上汁も吸ふとはなるまいと。コリャ又た下語の「猶ほ些子に較れり」と云ふに應ずる。「雲門、儞が興に、一時に情識意想、得失是非を打破し了れり」と、コンナ注脚ではいかぬ。肇論の四句ばかりでは、情量に落ちる死句ぢや。コノ雲門の二句は、情量を斷る、是れ活句ぢや。「雪竇道く、我は愛す韶陽新定の機、一生人の爲に釘を抽き楔を拔くことをと」、コリャ雪竇が雲門を嘆美するぢや。祖々傳來の毒手ぢや。雲門のみぢやないけれども、手際が好かつたから格別と云ふ爲に、「新定の機」と云ふぢや。コリャ悟つた者の釘を抽き楔を拔くぢや。「又た云く、曲木、位に據る、知んぬ幾何ぞ、利刃翦却して人をして愛せしむと」、コレは雪竇の「祖英集」の中にある勝因長老を送る偈の八句中の末の二句ぢや。是れ又た雲門を稱したのぢや。曲木、位に據るの人は多けれどもサ、吹毛を振起する人は、雲門一人と云ふ意ぢや。雲門中に就いて、利刃を以つてからに、情塵意想を剗除する、所謂煩惱の根を切り、菩提の葉を斷るぢや。「他道く、燈籠を拈じて佛殿裏に向ひと。這の

一句、已に截斷し了れり、又た三門を將つて燈籠上に來すと」、コンナことを云ふては、雲門の意には叶はぬぞ。コノ二十五字は好くない、削つた方が好い。「這の一句、已に截斷」と云ふが、コレでは切れぬ。太刀先ばかり折れてサン〳〵ぢや。「若し箇の事を論ぜば、擊石火の如く、閃電光に似たり。雲門道く」と、祖師門下の事を論ずるならば、第二機ではいかぬから、雲門、上堂してサ。「汝若し相ひ當り去らんとならば、且らく箇の入路を覓めよ。微塵の諸佛、儞が脚跟下に在り、三藏の聖教、儞が舌頭上に在り」と、若しと云ふ下に、「不」の字を入れてみるが好い、蜀本、福本共に入れてある。先づ承當し去らうと思ふならば、コノ法性へスッと入得せよ。數々の諸佛を識得してみれば、脚上脚下皆な是れ佛ぢや。如來一代の教文は、皆な悉く儞が舌頭上にあるぞ。「如かじ、悟り去つて好ならんには。和尚子、妄想すること莫れ、天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水、僧は是れ僧、俗は是れ俗」と、何事よりも、萬事を放下して悟るが肝要じや、悟りは天下にかへぬ寶ぢや。ぢやから、コレ〳〵和尚子、妄想かはくな。天は天ぢや、地は地ぢや。「和尚子」と云ふのは、大德と云ふも同じぢや。「良久して云く、我が與に面前の按山を拈じて來れ、看んと」、サー富士山を串ザシにして將つて來いと。コリャ、上の通りに云ふた計りでは、無事に落ちるを恐れてぢや。「便ち僧有り、出でゝ問ふて云く、學人、山は是れ山、水は是れ水と見る時如何」と、或る坊主が、飛び出して問ふたと見える。「門云く、三門什麼と爲てか這裏從り過ると」、ソレなら、何故コノ三門を通つたぞ。「儞が死却せんことを恐れて」と、コノ四字は編者の語ぢや。「遂に手を以つて劃一劃して云く、識得する時は是れ醍醐の上味、若し識不得ならば、反つて毒藥と爲ると」、ソコデ雲門が、悟りをヘリ切つて見せたぢや。サー各々、印籠の中の富士山を識得すりや何んでもないがサ、若しサウでないならば、今時の有りの儘、立の儘となる。コリャ僧俗男女と見る連中ぢや。コヽの「門云三門爲什麼云々」が、雲門の本錄には、「師、手を以つて面前に劃一劃して云く、三門什麼と爲てか、佛殿に騎つて這裏從り過る」となつて居る。「所以に道く、了了了の時了す可き無く、玄玄玄の處直に須らく呵すべしと」、サー悟了は未悟に同じぢや。轉た悟らば轉た參ぜよ。コリャ同安常察禪師の十玄談の語ぢや。「傳燈」の三十九にある。「雪竇又た拈じて云く、乾坤の內、宇宙の間、中に一寶有り、形山に祕在し、壁上に掛在す。達磨九年、敢て正眼に覷著せず。而今衲僧見んと要すや、劈脊に便ち棒せんと」、「形山に秘在す」の四字は削るが好い、雪竇の本錄にはない。サー其の一寶はドウした。椽の下に隱したか、雪隱に吊るくつたか。コリャ達磨も遂に得見付けなんだのぢやナ。何故マン丸に、本當に見んぞ。能く見りや、シジ(放尿)、フンダリ(阿屎)まで、コノ一寶ぢやがサ。眼を以て見、耳を以つて聞かんけりや、コノ南天棒を喫へ。「看よ、佗の本分の宗師、終に實法を將つて人を繫綴せざることを」と、實法もないがサ、不實の法と云ふもない。ぢやから「形山に祕在す」などと云ふて、人を惑しはせぬぞ。「玄沙云く、羅籠すれども敢て住せず、呼喚すれども

頭を廻さずと」、コリヤ自性、活潑潑の處を說いたのぢや。捉へやうとしてもツルリと拔ける、イクラ呼んでも振り返つても見ぬぢや。「然も恁麼なりと雖も、也た是れ靈龜、尾を曳く。雪竇頌、して云く」と。サー此くの如く提撕するも、ハヤ靈龜、尾を曳くぢや。ヤッパリ跡が付く。ソコデ雪竇の頌ぢや。

看看 ○高著眼○用看作什麼○驪龍玩珠 古岸何人把釣竿 ○孤危甚孤危○壁立甚壁立○賊過後張弓○腦後見腮與莫往來 雲冉冉 ○打斷始得○百匝千重○炙脂帽子鶻臭布衫 水漫漫 ○左之右之○前遮後擁 明月蘆花君自看 ○看著則瞎○若識得雲門語便見雪竇末後句

【和訓】看よ看よ。(○高く眼を著けよ。○看ることを用ひて什麼か作さん。○驪龍珠を玩ぶ。) 古岸何人か釣竿を把る。(○孤危、甚だ孤危。○壁立、甚だ壁立。○賊過ぎて後ち弓を張る。○腦後に腮を見れば與に往來すること莫れ。) 雲冉冉。(○打斷して始めて得ん。○百匝千重。○炙脂帽子、鶻臭布衫。) 水漫漫。(○左之右之。○前に遮り後に擁す。) 明月蘆花君自ら看よ。(○看著すれば則ち瞎す。○若し雲門の語を識得せば、便ち雪竇末後の句を見ん。)

【提唱】

頌 コレから雪竇の頌ぢや。

「看よ看よ」と、コノ二字は實に金的ぢや。雲門の心腸を吐き盡したものぞ、下語を力に看るな。大燈國師も云ふて居るのに、當頭、「看よ〳〵」の一句に頌し了れりと。老衲に云はせるならばサ、コノ二字で示衆の全體を頌した。コノ一頌、雲門の示衆を其の儘に描き出したやうぢや。

「古岸何人か釣竿を把る」と、斯樣な向上の旨を以つて、金龍を釣らうとするのは、唯だ雲門の有るのみぢや。コリヤ中々蝦蟆螺蚌の類は、手も付けることはならぬぞ。針さら呑まねば役に立たぬ。雲門ならでは、此の垂語は下すまい。

「雲冉冉」と、雲門の示衆、茫々として邊際無き底を云ふ。苗の青々、草のムラ〳〵として居る貌ぢや。サー野原平等、何處がドウやら知れたものでない。コノ語、恐しいぞ。昔から錯つて會するものが多い。

「水漫漫」と、コノ毒水を呑んでこそぢや。

「明月蘆花君自ら看よ」と、コリヤ一色邊、異中の異ぢや。明暗見分け難い底を云ふ。彌陀か題目か、君自ら看よ〳〵と。サー此の一句、雲門の示衆を、丁度畫に描いたやうに寫し出したが。ドウも此の差別が見惡い。明月が蘆花を照すか、蘆花が明月を照すか。畫でもない、夜でもない。實に

ハヤ明暗双々底ぢや。シッカリ看るが好い。

著語 コレから圜悟の著語ぢや。

「看看」――「高く眼を著けよ」、サー諸人、油斷はならぬぞ、他人のとぢやない。各々頂門に眼を具へてからに好く看よ。「看ることを用ひて什麼か爲さん」、圜悟、お主なぞは、アクフク見て置いたから左樣であろ。「驪龍、珠を玩ぶ」、コリャ好下語ぢや。「看よ看よ」の語は、驪龍の珠を綾に取るやうな。見事々々、讃歎も及ばぬ。

「古岸何人把釣竿」――「孤危、甚だ孤危」、「壁立、甚だ壁立」、危いたかみぢやぞ。ソラ險しい。鋭い。「賊過ぎて後ち弓を張る」、燈籠を拈じた處でこそ會すべしぢや。茲ぢや遲い〳〵。併しコノ一句は不可ぬ。「腦後に腮を見ば與に往來すること莫れ」、雲門は恐しい面付ぢや、道連になるなと。サー全體雲門がドウズリか、雪竇がドウズリか、どちらぢや。コノ句は好いぞ。

「雲冉冉」――「打斷して始めて得ん」、ソノ雲を打斷せよ、我が這裏にカタフタも無くせよ。「百匝千重」、何處ぞ彼處も全體白雲ぢや。世界の國土は佛原ぢや。「炙脂帽子、鵲臭布衫」、ムサ〳〵しい一色邊、異中の異ぢや。ソンナ脂垢の付いた古頭巾や、汗臭い古肌衣は見るも可厭ぢや。

「水漫漫」――「左之右之」、「前に遮り後に擁す」、前も後も水漫々で押し分けられぬ。是れ皆な彌陀ぢや、妙法蓮華經ぢや。サー一色邊、合頭すべからず。

「明月蘆花君自看」――「看著すれば則ち瞎す」、本來無一物の一寶ぢや。ソレを雪竇が、自ら看よと云ふがサ、見だなら、ソレこそ眼が潰れるぞ。「若し雲門の語を識得せば、便ち雪竇末後の句を見ん」、コノ「末後」の二字は惜むべしぢや。

若識得雲門語便見雪竇爲人處他向雲門示衆後面兩句便與爾下箇注脚云看看爾便作瞠眉瞠眼會且得沒交涉古人道靈光獨耀迥脫根塵體露眞常不拘文字心性無染本自圓成但離妄緣卽如如佛若只向瞠眉努眼處坐殺豈能脫得根塵雪竇道看看雲門如在古岸把釣竿相似雲又冉冉水又漫漫明月映蘆花蘆花映明月正當恁麼時且道是何境界若便直下見得前後只是一句相似

【和訓】 若し雲門の語を識得せば、便ち雪竇爲人の處を見ん。他、雲門に、衆に示す後面の兩句に向つて、便ち爾が與に箇の注脚を下して云ふ、看よ看よと。爾便ち瞠眉瞠眼の會を作さば、且得沒交涉。古人道く、靈光獨り耀いて、迥かに根塵を脫す、體露眞常、文字に拘らず。心性無染、本と自ら圓成す。但だ妄緣を離るれば、卽ち如如佛と。若し只だ瞠眉努眼の處に向つて坐殺せば、豈に能く根塵を脫得せんや。雪竇道く、看よ看よ。雲門、古岸に在つて釣竿を把るが如くに相ひ似たり。雲又た冉冉、水又た漫漫。明月蘆花に映じ、蘆花明月に映ず。正當恁麼の時、且らく道へ、是れ何の境界ぞ。若し便ち直下に見得せば、前後只だ是れ一句に相ひ似たり。

【提唱】 コレから圜悟の評ぢやが、コノ評も好くない、老衲は取らぬ。「若し雲門の語を識得せば、便ち雪竇爲人の處を見ん。他、雲門、衆に示す後面の兩句に向つて、便ち爾が與に箇の注脚を下して」と、「燈籠を拈じて」と、「三門を將つて」と云ふ二句に計り旨趣が有ると見ては不可ぬぞ。サテ雪竇、注脚を下せば粉微塵ぢや、是れが何んと。「後面兩句」より已下の十一字は、取り分け好くない。削る方が好い。「云ふ、看よ看よと。爾便ち瞠眉瞠眼の會を作さば、且得沒交渉」と、看よ〳〵と云はれて、分別臭い悟り面をした處が始らぬ。「古人道く、靈光獨り耀いて、逈かに根塵を脫す」と、コリヤ百丈の語ぢや。古靈の神讃禪師、之れを拈じて受業師を度したと云ふ。即ち、自己の靈光が輝けば、逈かに六根六塵を脫するぢや。「體露眞常、文字に拘らず」と、ムクリ出し、洗ひ出しの眞實常往ぢや。歌にも連歌にも詠まれぬ。四十九年の說でも說き當てぬぞ。「心性無染、本と自ら圓成す」と、ゴミもホコリも付かぬ、本來淸淨ぢや。「但だ妄緣を離るれば、卽ち如如佛と」、但だ虛妄不實の緣を離るれば、不變直に隨緣、隨緣卽不變で、其の身其の儘佛ぢや。「若し只だ、瞠眉努眼の處に向つて坐殺せば、豈に能く根塵を脫得せんや」と、若しもサ、目付や力氣んだ處に在るなどと見ては、トテモ六根六塵は脫し得んぞ。「雪竇道く、看よ看よ。雲門、古岸に在つて釣竿を把るが如くに相ひ似たり」と、コノ雲門の下に、「燈籠を拈じて佛殿裏に向ひ、三門を將つて燈籠上に來す」の十四字を入れて見よ。コレはサ、大魚を釣り出さんと掛つたのぢや。「雲又た冉冉、水又た漫漫」と、栗も稗も、冉々、漫々ぢや。實にハヤ、雲門の示衆には齒も立たぬ。知解情識に亘ると、ソレこそ喪身失命ぢや。コノ已下の評は、恐らくは人錯つて會するぞ。「明月蘆花に映じ、蘆花明月に映ず」と、コノ「映」と云ふ字は意識の筆頭ぢや。コレでは頌にも本則にも叶はぬ。好くない語ぢや。「正當恁麼の時、且らく道へ、是れ何んの境界ぞ。若し便ち直下に見得せば、前後只だ是れ一句に相ひ似たり」とコノ座敷が引ッくるめて皆な彌陀ぢやと。コリヤ又た南天棒に云はせると、アンマリ好過ぎた評ぢやわい。

語註 〔哆々唎々〕 嬰兒の行貌を示す形容にして、哆々は語音を發する貌。唎々は語音を發する貌。即ち行に行相なく、語に語相なき宗旨を表はすに譬ふ。〔玄贊〕「法華經玄贊」と云ひ、十卷あり。唐の慈雲の著なり。〔八境界〕 八識を云ふ。〔形山〕 四大合成の肉身のこと。〔三輔〕 郡名。漢の時、京兆、右扶風、左馮翊を三輔と云ふ。〔懶瓚和尙〕 第三十四則、仰山問甚處來の則の評唱に詳しく出づ。〔同安常察禪師の十玄談〕 同安常察は九峯道虔の法嗣なり。禪師、佛法の中に於て、其の義の玄妙なるもの十題を撰び、一般の人に佛祖單傳の妙旨を知らしめんとす。(一)心印、(二)祖意、(三)玄義、(四)塵異、(五)佛敎、(六)還嚮、(七)破還嚮、(八)轉位、(九)回機、(十)正位前。〔針さら呑まねば〕 針の付いた儘呑まねば。〔アクフク見て置いたから〕 アクフクは、タラフク、即ち充分と云ふこと。〔ドウスリ〕 盜賊、追剝等を云ふ。〔受業師〕 得度受敎の師なり、又た親敎師とも云ふ。「釋氏要覽」に、「毘奈耶に云く、鄔波陀那、此には親敎と云ふ。能く世を出離する業を敎ゆるに由るが故に、受業和尙と稱す」と。

第六十三則　南泉兩堂爭猫

【南泉兩堂爭猫】

垂示云、意路不到、正好提撕、言詮不及、宜急著眼、若也電轉星飛、便可傾湫倒嶽、衆中莫有辨得底麽、試擧看。

【和訓】垂示に云く、意路到らず、正に好し提撕するに。言詮及ばず、宜しく急に眼を著くべし。若し也た電轉じ星飛ばゝ、便ち傾湫倒嶽す可し。衆中、辨得する底有ること莫しや麽、試に擧す、看よ。

【提唱】コレは第六十三則、「南泉兩堂爭猫」と云ふぢや。コノ則はサ、便ち古人、只だ向上の一機を貴んで、事々の上に於て、全提正令の作用を明すぢやぞ。

「垂示に云く、意路到らず、正に好し提撕するに」と、分別了簡に及ばず、心計ひに行かぬ處と。即ち南泉斬猫は、是れ意路不到、言詮不及ぢや。埒の明かぬ中は、ヤでもオウでもサ、小脇に掻い込んで遣り込むぢや。「言詮及ばず、宜しく急に眼を著くべし」と、頭に草鞋を戴くやうなことは、トテモ教へても出來るものぢやない、即ち差配のならぬ處の作用ぢやがサ、コリヤ雙手の聲だか、摺鉢だか。是等は平生、言語道斷、心行所滅の處を間斷なく工夫すると、コレがハッキリ手に入るぞ。「若し也た電轉し星飛ばゝ」と、骨折つて工夫して行くとサ、ホッとして正眼を開くことが出來る。サーさうあらうぞならば、「便ち傾湫倒嶽す可し」と、天地をグレンドウ返して、天堂は奈落の底に、奈落は天堂の上に在ることを知らうぞ。所謂長河を攪して酥酪と作し、荆棘林を轉じて平地と作すぢや。「衆中、辨得する底有ること莫しや麽。試に擧す、看よ」と、サー意路到らず、言詮及ばざる處に、辨得する者が有るか無いか。總體垂示は本則を睨んで云ふものぢやが、別してコノ垂示は本則に的當して、僅かな語の中に、趙州の、草鞋を戴くの商量まで、能く云ひ盡した。各々シッカリ本則を見るが好い。

擧南泉一日東西兩堂爭猫兒。○不是今日合鬧。○也一場漏逗。南泉見遂提起云、道得即不斬。○正令當行十方坐斷。○這老漢有定龍蛇手脚。衆無對。○可惜放過。○一隊漆桶攙作什麽。○杜撰禪和如麻似粟。泉斬猫兒爲兩段。○快哉快哉。○若不如此盡是弄泥團漢。○賊過後張弓。○已是第二頭。○未擧起時好打。

【和訓】舉す。南泉一日、東西の兩堂、猫兒を爭ふ。（○是れ今日合鬧なるのみにあらず。○也た一場の漏逗。）南泉見て、遂に提起して云く、道ひ得ば即ち斬らじ。（○正令當行、十方坐斷。○這の老漢、龍蛇を定むる手脚有り。）衆到無し。○惜む可し放過することを。○一隊の漆桶、什麼を作すにか堪へん。○杜撰の禪和、麻の如く粟に似たり。）泉、猫兒を斬つて兩段と爲す。（○快哉快哉。○若し此くの如くならずんば、盡く是れ泥團を弄する漢。○賊過ぎて後ち弓を張る。○已に是れ第二頭。○未だ舉起せざる時、好し打つに。）

【提唱】

本則　コレから本則ぢや。

「舉す。南泉一日、東西の兩堂、猫兒を爭ふ」と、コノ示衆は、是れ禪修行者の胸腹病ぢや。下語も評も、とくとないぞ。南泉會下のひまの奴等が、佛性が如何の斯うのとやつたものぢや。「東西の兩堂」とは、前堂、後堂ぢや、又た東藏主、西藏主とも云ふ。猫兒のことは、「椿庭抄」に、「唐土の寺院、鼠を制する爲に、一切經堂に猫を飼ふ云々」とある。

「南泉見て、遂に提起して云く、道ひ得ば即ち斬らじ」と、コレが南泉のホテツバラぢや。コヽを看よ、あとに用はない。實に此處に些子があるぞ。サー何んとでも云ふべい、云へば助ける、サー如何ぢや。

「衆、對無し」と、エイなびナ。

「泉、猫兒を斬つて兩段と爲す」と、トウ〳〵斬つた。南泉、機に臨んでは、閻魔王でも斬らんでナンとせう。評に、「其れ實に當時元と斬らざらんか」とは、イヤ手ぬるい云分ぢや。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「擧南泉一日東西兩堂爭猫兒」――「是れ今日合鬧なるのみにあらず」、今日ばかりではない、毎日のこと。坊主どもがガヤ〳〵と、十二時中、やかましい。「也た一場の漏逗」、大衆、無調法を仕出來してサン〳〵ぢや。

「南泉見遂提起云道得即不斬」――「正令當行、十方坐斷」、誠に南泉ぢや。斯うお觸が廻つてからは、息はならぬ。知識も長老も肝が冷え渡らう。「這の老漢、龍蛇を定むる手脚有り」、南泉の老爺、をいぼれと思ひの外、見事な手脚があるわい。

「衆無對」――「惜む可し放過することを」、嗚呼々々惜しいことぢや、アッタラ猫を殺さすか。多くの坊サマ達の中、一人も南泉の刀を取り上ぐるものが無かつたが殘念ぢや。「一隊の漆桶、什麼を作すにか堪へん」、エー喰らひどうめ。顏付きは禪宗坊主らしいが、猫の糞にもならぬ。「杜撰の禪和、麻の如く粟に似たり」、禪坊主の癖に、見性の眼の開かぬ奴が、世間に澤山ある。

「泉斬猫兒爲兩段」――「快哉快哉」、小氣味が好い、好く切れる刀ぢや。鋏鋤か正宗かサ。「若し此くの如くならずんば、盡く是れ泥團を弄する漢」、チト極め付けなければ、首座ばかりでない、皆

なドも坊ぢや。「賊過ぎて後ち弓を張る」、最早斬り方が遅い。初めの爭の時に斬れば好いのに。「已に是れ第二頭」、コレぢや第二に落ちた。「未だ擧起せざる時、好し打つに」、南泉が未だ猫を擧起せざる時斬れば好いにサ。サウあらうぞならは、猫も活きやうものを。コノ「打」の字は、「斬」にするが好い。

宗師家看他一動一靜一出一入且道意旨如何這斬猫兒話天下叢林商量浩浩地有者道提起處便是有底道在斬處且得都沒交涉他若不提起時亦匝匝地作盡道理殊不知他古人有定乾坤底眼有定乾坤底劒倆且道畢竟是誰斬猫兒只如南泉提起云道得即不斬當時忽有人道得且道南泉斬不斬所以道正令當行十方坐斷出頭天外看誰是箇中人其實當時元不斬此話亦不在斬與不斬處此事軒知如此分明不在情塵意見上討若向情塵意見上討則辜負南泉去但向當鋒劒刃上看是有也得無亦得不有不無也得所以古人道窮則變變則通而今人不解變通只管向語句上走南泉恁麼提起不可教人合下得甚語只要教人自薦各各自用自知若不恁麼會卒摸索不著雪竇當頭頌云

【和訓】宗師家、看よ、他の一動一靜、一出一入。且らく道へ、意旨如何。這の斬猫兒の話、天下の叢林、商量浩浩地。有る者は道ふ、提起の處便ち是と。有る底は道ふ、斬處に在りと。且つ得たり、都て沒交渉なることを。他若し提起せざる時も亦た匝匝地に道理を作し盡さんや。殊に知らず、他の古人、乾坤を定むる底の眼有り、乾坤を定むる底の劒有ることを。倆且らく道へ、畢竟して是れ誰れか猫兒を斬る。只だ南泉提起して、道ひ得ば即ち斬らじと云ふが如きんば、當時忽ち人有つて道ひ得ば、且らく道へ、南泉斬らんか斬らざらんか。所以に道ふ、正令當行、十方坐斷と。天外に出頭して看よ、誰れか是れ箇の中の人、其れ實に當時元と斬らざらんか、此の話亦た斬と不斬との處に在らず。此の事軒かに知らしんぬ、此くの如く分明なることを。情塵意見の上に在つて討ねざれ。若し情塵意見の上に向つて討ねば、則ち南泉に辜負し去らん、但だ當鋒、劒刃上に向つて看よ。是れ有も也た得たり、無も也た得たり、不有不無も也た得たり。所以に古人道ふ、窮する則んば變じ、變ずる則んば通ずと。而今の人、變通を解せず、只管に語句上に向つて走る。南泉、恁麼に提起す、人をして合に甚の語と下し得せしむ可からず。只だ人をして自ら薦み、各各自ら用ひ、自ら知らしめんことを要す。若し恁麼に會せずんば卒に摸索不著ならん。雪竇當頭に頌して云く。

【提唱】コレから圜悟の評ぢや。「宗師家、看よ、他の一動一靜、一出一入」と、サー八宗の目明しとなるべき坊サマ達よ、コノ南泉の一機一境、把住放行の處を看よ。「且らく道へ、意旨如何。這の斬猫兒の話、天下の叢林、商量浩浩地」と、「古岸何人か釣竿を把る」で、全く坊サマ達にサ、宗旨を呑み込ませたい計りぢや。尋常ならば殺生戒ぞ。「有る者は道ふ、提起の處便ち是と」、コレにはサ、佛々の要機、祖々の機用が、皆な籠つて居るとも云ふし、又た、「有る底は道ふ、斬處に在りと。且つ得たり、都て沒交渉なることを」と、斬つた處が好いなどと、何を云ふのか、ソンナことでは尻に目藥ぢやわい。「他若し提起せざる時も、亦た匝匝地に道理を作し盡さんや」と、若し南泉が提起

しなければ、引ッからげて理窟は云はぬ。「殊に知らず、他の古人、乾坤を定むる底の眼有り、乾坤を定むる底の劍有ることを」と、いやサ、南泉にはサ、南泉の働きがあるぢや。劍ぢやない、鰲を釣る釣竿ぢや。斬猫の端的、乾坤がソヨともせぬぞ。「爾且らく道へ、畢竟して是れ誰れか猫兒を斬る。只だ南泉提起して、道ひ得ば卽ち斬らじと云ふが如きんば、當時忽ち人有つて道ひ得ば且らく道へ、南泉斬らんか斬らざらんか」と、道ひ得ば斬らぬと云ふても、南泉のことぢやから、たとへ道ひ得ても、逃しはせまいと、圜悟は云ふがサ、ソレぢや此の話は見えぬぞ。誰かが何んとでも道ひ得たならば、ナンの斬るものか、斬りはせん。「所以に道ふ、正令當行、十方坐斷と。天外に出頭して看よ、誰れか是れ箇の中の人」と、南泉の這裏、佛祖に和して已に悉く斬り了つた。サー何處に誰れが有るか、看よ〳〵。「其れ實に當時元と斬らざらんか、此の話亦た斬と不斬との處に在らず」と、斬らいで何んとする。斬つたとも〳〵〳〵。コノ十七字は不可ぬ、衲は取らぬぞ。「此の事軒かに知んぬ。此くの如く分明なることを。情塵意見の上に在つて討ねざれ。若し情塵意見の上に向つて討ねば、則ち南泉に辜負し去らん」と、妄想では駄目ぢや。ソンナことなら南泉ばかりか、佛祖にも辜負するぞ。「只だ當鋒、劍刃上に向つて看よ。是れ有も也た得たり、無も也た得たり、不有不無も也た得たり」と、道ひ得ば卽ち斬らじと云ふ處と、猫兒を斬る劍刃上とをシッカリ看よ。眞に道ひ得た上からは、斬も也た得たり、不斬も也た得たりぢや。「不有不無」と、イヤ〳〵只だ道ひ得ると、道ひ得ざるとぢや。「所以に古人道ふ、窮する則んば變じ、變ずる則んば通ずと。而今の人、變通を解せず、只管に語句上に向つて走る」と、サー虛空も變じ、變ずれば摧くぞ。然るにサ、今の人は其の變通を知らぬ。南泉、恁麼に提起す、人をして合に甚の語と下し得せしむ可からず。只だ人をして自ら薦み、各各自ら用ひ、自ら知らしめんことを要す」と、サー南泉が提起した端的、有も也た斬、無も也た斬ぢや。コリャ人に口利巧なことを云はせんとしたのぢやないぞ、只だ自知させたい爲めぢや。コノ南天棒が其の時居つたならば、和尙作麼生と遣るべいにサ。「若し恁麼に會せずんば、卒に摸索不著ならん」と、フン、若しコンナことを云ふたら、南泉は馬でも牛でも斬るぢやらう。「雪竇當頭に頌して云く」と、ソコデ雪竇がサ、頭から斯う頌した。

兩堂俱是杜禪和　○親言出親口○一句道斷○據欵結案　撥動煙塵不奈何　○看儞作什麼折合○現成公案○也有些子　賴得南泉能擧令　○擧拂子云一似這箇○王老師猶較些子○好箇金剛王寶劍用切泥去也　一刀兩段任偏頗　○百雜碎○忽有人按住刀看他作什麼○不可放過○也便打

【和訓】　兩堂俱に是れ杜禪和。（○親言、親口より出づ。○一句に道斷す。○欵に據つて案に結す。）　煙塵を撥動して奈何とも せず。（○看よ、爾什麼の折合をか作さん。○現成公案。○也た些子有り。）　賴に南泉の能く令を擧することを得たり。（○拂子を擧して云く、一へに這箇に似たり。○王老師猶ほ些子に較る。○好箇の金剛王寶劒、用ひて泥を切り去るや。）　一刀兩段偏頗に任す。（○百雜碎。○忽に人有つて刀を按住せば、看よ他、什麼をか作さん。○放過す可からず。○也た便ち打つ。）

【提唱】

頌　コレから雪竇の頌ぢや。

「兩堂俱に是れ杜禪和」と、ヤイ蹉過するない。コノ役に立たぬヨタ者奴が、猫一疋でバタ〳〵しやあがるざまはよ。

「煙塵を撥動して奈何ともせず」と、此の事を念とせぬから、猫の一疋をアチコチと吐かしてサ、南泉に一拶せられて、何んと云ふて好からうと腹の中がグレンドウ返してモメごとぢや。サーいく、ら情識の煙塵を起しても及ばぬこと〳〵。眞箇の猫を知らぬからサ。

「賴に南泉の能く令を擧することを得たり」と、サー此處が些子ありぢや。是れ佛祖の掟通りぞ。

「一刀兩段偏頗に任す」と、是は是、非は非、人が何んと云ふとも、スッキリ關はぬ、まゝの皮よ。

コノ偏頗と云ふのは、「史記」の微子世家に曰く、「偏する毋れ、頗する毋れ、王の義に遵ふ」と。註には、「公安國が曰く、偏は不平、頗は不正。言は、當に先王の正義を修して以つて、民を治むべし」とある。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「兩堂俱是杜禪和」――「親言、親口より出づ」、腹な立つナ、親の言ぢや。雪竇なりやこそ南泉屋裏の事を知つた。「一句に道斷す」、コレは違ひはない。關八州引ッからげて爭ふたは猫ぢや。ぢやから杜禪和と云ふた。圜悟も心有つて書いた、蹉過するな。「欵に據つて案に結す」、爭ふたは「欵」ぢや、ソコデ杜禪和と云ふ。サー書付の通り、一人も碌な者は御座りませぬ。

「撥動煙塵不奈何」――「看よ、爾什麼の折合をか作さん」、南泉に問はれてドウ働くぞ。ナンと聞に合せるぞ。「現成公案」、ソノ儘ぢや。柳は綠、花は紅で、少しも隱れはない。コノ下語はサ、明眼の人には役に立つが、ナマクラ者には役に立たぬ。「也た些子有り」、サー出て來た〳〵本分の消息が。コリヤ是れ、佛祖傳來の些子か、コレには少々譯があるぞ。

「賴得南泉能擧令」――「拂子を擧して云く、一へに這箇に似たり」、南泉の行令と、圜悟の擧拂と似て居るとサ。似たのはソレ計りか、柱にも似たが茶釜にも似たりぢや。「王老師猶ほ些子に較る」、コリヤ圜悟、隨分嚴しい語ぢや。南泉が斬つた處で、初めて坊主らしいと。ソレにサ、又た、「好箇の金剛王寶劒、用ひて泥を切り去るや」、コレも酷い。南泉、お主の刀は銘刀ぢやのに、何故坊主共

を切り殺さいで、役にも立たぬ泥を切つたと。イヽヤ泥ぢやない、猫ぢや。

「一刀兩段任偏頗」――「百雜碎」、メー兩段處か、粉微塵ぢやと。コリヤ一寸圜悟、上手な語ぢや。

「忽に人有つて刀を按住せば、看よ他、什麼をか作さん」、若しサ、一人の坊サマでも出て來て、ソノ刀を捉へたら、何んとも仕樣があるまいと。コリヤ死たわごとぢや。皆な腰拔坊主ぢや、碌な者は一人もない。「放過す可からず」、「也た便ち打つ」、勝手にサラセと云ふ處か、ナカ〳〵許さぬ、先づ三十年ぢや。

兩堂俱是杜禪和雪竇不向句下死亦不認驢前馬後有撥轉處便道撥動煙塵不奈何雪竇與南泉把手共行一句說了也兩堂首座沒歇頭處到處只管撥動煙塵奈何不得賴得南泉與他斷這公案收得淨盡他爭奈前不搆村後不迭店所以道賴得南泉能舉令一刀兩段任偏頗直下一刀兩段更不管有偏頗且道南泉據什麼令

【和訓】兩堂俱に是れ杜禪和と。雪竇、句下に向つて死せず、又た驢前馬後を認めず、撥轉の處有つて便ち道ふ、煙塵を撥動して奈何ともせずと。雪竇、南泉と手を把つて共に行く、一句に說き了れり。兩堂の首座、歇頭の處沒し。到る處に只管煙塵を撥動して、奈何ともすること得じ。賴に南泉、他の與に這の公案を斷つて、收得淨盡することを得たり。他、爭奈がせん前、村に搆らず、後、店に迭らざることを。所以に道ふ、賴に南泉能く令を擧することを得たり、一刀兩段偏頗に任すと。直下に一刀兩段す、更に偏頗有ることを管ぜず。且らく道へ、南泉、什麼の令にか據る。

【提唱】コレから圜悟の評ぢや。「兩堂俱に是れ杜禪和と。雪竇、句下に向つて死せず、亦た驢前馬後を認めず、撥轉の處有つて便ち道ふ」と、雪竇もサヽ、「兩堂俱に是れ杜禪和」と云ふ處へ頭を突き込んでは居らぬ。ソレから又た、烏は黑く鷺は白いなぞとも云はぬ。乾坤を引つくり返して云ふのに、「煙塵を撥動して奈何ともせずと」サ。「雪竇、南泉と手を把つて共に行く」と、雪竇は能く南泉のホテツ腹を見拔いて置いた。同じ穴の貉か。「一句に說き了れり」と、ムヽ、旨さう〳〵。「兩堂の首座、歇頭の處沒し。到る處に只管煙塵を撥動して、奈何ともすること得じ」と、東西兩堂の首座等はサ、外に向つて馳求して居るものぢやから、休歇を知らぬ。ソレぢやから、猫一疋にサ、マルデ戰場に行つて、馬塵を揚げるやうな騷ぎをしくさる。サウして手も出し得ぬとは、何んの爲めに睾丸を提げて居るかサ。「賴に南泉、他の與に這の公案を斷つて、收得淨盡することを得たり」と、南泉が一刀兩斷して、兩堂の首座の目を覺したと。サーそりや好いがサ、猫を切つたとて、ガイに收得淨盡でもない。「他、爭奈がせん前、村に搆らず、後、店に迭らざることを」と、サー南泉の所在は窺ひ難いぞ。家舍を離れて途中に在らず、途中に在つて家舍を離れずか。南泉の腹中は、ドウも見定められぬわい。「所以に道ふ、賴に南泉能く令を擧することを得たり、一刀兩段偏頗に任すと。直下に

一刀兩段す、更に偏頗有ることを管せず」と、南泉は猫ばかり斬るのぢやないぞ、釋迦でも達磨でも斬るぞ。畢竟此の本則は、斬つた處にはない、只だ「道ひ得ば卽ち斬らじ」と云ふ處にある。人が何んと評判しやうとも、ソンナことには頓着せぬ。「且らく道へ、南泉、什麼の令にか據る」と、若し佛祖の令に據ると道はゞ、ソレ三十棒ぢや。コレも畢竟、慈悲の爲めぢや。猫兒を斬つたは佛の掟か、南泉の肝腸を見るが好い、サウで無くては知れぬぞ。

注釋　〔提撕〕提撕の二字共に、ひつさぐる意なり。師家が學人を提携誘引して、正眼を開かしむること。又は古人の語錄公案を提唱して、後進を指導するを云ふ。〔下語も評もとくとないぞ〕下語も評も屑かぬと云ふこと。〔八宗の目明しとなるべき坊サマ〕目明しとは、先導若しくは棟梁と云ふこと。〔此の事軒かに知んぬ、此くの如く分明なることを云々〕軒は明と同義なり。〔腹の中がグレンドウ返して云々〕グレンドウ返しとは、顚動すること也。〔親言、親口より出づ〕親言とは「兩堂俱に是杜禪和」の語を指す。卽ち此の語は、雪竇が南泉屋裏の事を知つて頌したる語なりとの意。〔王老師猶ほ些子に較る〕王老師とは南泉を指す。南泉は俗姓を王氏と稱せしに依る。〔百雜碎〕粉碎して微塵の如くすること、其の數無量なるを云ふ。〔先づ三十年ぢや〕先づ三十年も參究せよと云ふこと。〔頭を突き込んでは居らぬ〕滯ること、拘泥すること、又た動きの取れぬこと。〔前不構村後不迭店〕方語の、兩頭共に失すと云ふこと。

第六十四則　南泉問趙州　【南泉問趙州】

舉南泉復舉前話問趙州　○世須是同心同意始得　○同道者方知　州便脫草鞋於頭上戴出　○不免拖泥帶水　南泉云子若在却救得猫兒　○唱拍相隨　○知音者少　○將錯就錯

【和訓】　舉す。南泉復た前話を舉して趙州に問ふ。（○也た須らく是れ、同心同意にして始めて得べし。○同道の者方に知る。）州、便ち草鞋を脫して、頭上に於て戴いて出づ。（○免れず泥を拖き水を帶ぶることを。）南泉云く、子若し在らましかば、却つて猫兒を救ひ得ん。（○唱拍相ひ隨ふ。○知音の者少し。○錯を將つて錯に就く。）

【提唱】　第六十四則、「南泉問趙州」と。コノ則はサ、古人の受用、機中に句を藏す。全く是れ、後賢の企て及ばざるを明すぢや。虛堂門下、別に道理あるは、此の事有るを以ての故ぢや。兒孫、後人をして知らしめざる可からざる耳。コノ則にも垂示はない、直に本則ぢや。

本則

「擧す。南泉復た前話を擧して趙州に問ふ」と、コリヤ南泉が、趙州の働きを人に見せんが爲に問ふたぢや。趙州が外から歸つて來た時の話しぢや、

「州、便ち草鞋を脱して、頭上に於て載いて出づ」と、南泉が、「道ひ得ば卽ち斬らじ」と云ふと、趙州の奴が、草鞋を脱いで頭の上に戴つけて、サッサと出て行つた。サー此處が、大燈、關山の道が分れた處ぢやぞ。

「南泉云く、子若し在らましかば、却つて猫兒を救ひ得ん」と、エーお主が居つたらば、猫は救はれうものをとサ。ソレでは趙州が居つたら、南泉は斬らずに置くか。サー猫は活きて居るか死んで居るか。猫ばかりぢやない、趙州の草鞋は活か死か。看よ！！。「却」は恰もと云ふ意ぢや。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「擧南泉復擧前話問趙州」――「也た須らく是れ、同心同意にして始めて得べし」、コレは大事な處ぢや程に、別人に話しは出來ぬ。南泉と同一眼を具したものでなくてはならぬ。南泉と趙州とは、同心同意ぢや。「同道の者方に知る」、蛇の道は蛇が知る。知音同士はすさまじいものぢや。

「州便脱草鞋於頭上戴出」――「免れず泥を拖き水を帶ぶることを」、見たくでもないことをするかと。イヤ〳〵見事なものぢや。圜悟、ソナタは其の時如何するぞ。

「南泉云子若在却救得猫兒」――「唱拍相ひ隨ふ」、南泉と趙州、名人と名人との出合ひぢや。觀世、今春、謠方と囃方と揃ふて舞ひ始めた。「知音の者少し」、斯うした處は、門外漢の知ることではない。諸人は如何ぢや、知るか如何か。「錯を將つて錯に就く」、趙州が錯つたのを、又た南泉が褒めたのは、取りも直さず、錯を將つて錯に就くぢや。コリヤ如來以來の錯ぢやがサ、轉々錯らずんば如何ぢや。コノ魂膽、ナカ〳〵知り人がない。

趙州乃南泉的子道頭會尾擧著便知落處南泉晚間復擧前話問趙州是老作家便脱草鞋於頭上戴出泉云子若在却救得猫兒且道眞箇恁麼不恁麼南泉云道得卽不斬如擊石火似閃電光趙州便脱草鞋於頭上戴出佗參活句不參死句日日新時時新千聖移易一絲毫不得須是運出自己家珍方見他全機大用他道我爲法王於法自在人多錯會道趙州權將草鞋作猫兒有者道待他云道得卽不斬便戴草鞋出去自是爾斬猫兒不干我事且得沒交涉只是弄精魂殊不知古人意如天普蓋似地普擎他父子相投機鋒相合那箇擧頭他便會尾如今學者不識古人轉處空去意路上卜度若要見但去他南泉趙州轉處便見好頌云

【和訓】 趙州は乃ち南泉の的子なり。頭を道へば尾を會す、擧著すれば便ち落處を知る。南泉晚間に、復た前話を擧して趙州に問

ふ。州は是れ老作家、便ち草鞋を脱して、頭上に於て戴いて出ず。泉云く、子若し在らましかば、却つて猫兒を救ひ得んと。且らく道へ、眞箇恁麼か不恁麼か。南泉云く、道ひ得ば即ち斬らじと。擊石火の如く、閃電光に似たり。趙州便ち草鞋を脱して、頭上に於て戴いて以づ。他、活句に參じて死句に參ぜず。日日新に時時新なり、千聖も一絲毫を移易すること得じ、須らく是れ、自己の家珍を運出して、方に他の全機大用を見るべし。他道ふ、我爲法王、於法自在と。人多く錯つて會して道ふ、趙州權りに草鞋を將つて猫兒と作すと。有る者は道ふ、他の、道ひ得ば即ち斬らじと云はんを待つて、便ち草鞋を戴いて出で去らん。自ら是れ儞、猫兒を斬る、我が事に干らずと。且得沒交渉。只だ是れ精魂を弄す、殊に知らず、古人の意、天の普く蓋ふが如く、地の普く擎ぐるに似たり。他の父子相ひ投じ、機鋒相ひ合ふ。那箇頭を擧すれば、他便ち尾を會す。如今の學者、古人の轉處を識らず、空しく意路上に去つて卜度す。若し見んと要せば、但だ他の南泉、趙州の轉處に去つて便ち見ば好し。頌して云く。

【提唱】 コレから圜悟の評ぢや。「南泉は乃ち趙州の的子なり。頭を道へば尾を會す、擧著すれば便ち落處を知る」と、趙州は南泉の子ぢやから、チョビッと始を云へば、モウ終を知る。チャンと玉の落處を知るぢや。「南泉晩間に、復た前話を擧して趙州に問ふ。州は是れ作老家、便ち草鞋を脱して頭上に於て戴いて出づ。泉云く、子若し在らましかば、却つて猫兒を救ひ得んと」、南泉が晩になつて、斬猫の話を持ち出して、趙州に話したと見える。スルト趙州は老作家ぢやから、本則にあるやうに働いた。ソコデ南泉が、若し貴公が居つたら猫は斬られいで濟んだものをと。併しサ、コリャ南泉の生れぬ先から知らねば救はれぬぞ。「且らく道へ、眞箇恁麼か不恁麼か」と、コノ「眞箇」の二字は未審しい。南泉の意は、ナンの二つあるものか。サー南泉は、本當に猫を救ふたか救はぬか。「南泉云く、道ひ得ば即ち斬らじと。擊石火の如く、閃電光に似たり。趙州便ち草鞋を脱して、頭上に於て戴いて出づ。他、活句に參じて、死句に參ぜず。日日新に時時新なり」と、南泉の働きもすさまじいが、趙州も中々ぢや。活句に骨折つたりやこそ、コノ藝當が打てる。ぢやから是れ、各々安居に精を出せよ、轉た悟らば轉た參ぜよぢや。「千聖も一絲毫を移易すること得じ」と、南泉の問に、趙州が草鞋を戴いた出合ひは、實にハヤ、千聖も助言を入れることはならぬぞ。一分一厘でも改易は出來ぬ。「須らく是れ、自己の家珍を運出して、方に他の全機大用を見るべし」と、一旦の雀悟りぢや不可ぬ。難透を透過して後の家珍でなくちや默目ぢやぞ。「他道ふ、我爲法王、於法自在と」、「他道」を、福本には「道ふことを見ずや」に作つてゐるが、老衲ならば「故に道ふ」と云ひたい。コノ句は、「法華經」の譬喩品の偈にある。コリャ自己の佛性を徹底したからぢや。「人多く錯つて會して道ふ、趙州權りに草鞋を將つて猫兒と作すと。有る者は道ふ、他の、道ひ得ば即ち斬らずと云はんを待つて、便ち草鞋を戴いて出で去らん。自ら是れ儞、猫兒を斬る、我が事に干らずと。且得沒交渉。只だ是れ精魂を弄す」と、コレをサ、人が多く錯つて會して、趙州が猫の眞似をするのヤレ南泉が云ひ掛けるのを待つてからに、外に飛び出してサ、南泉、斬りたくば斬れ己は干はぬと云ふ意ぢやなぞと、邪解が多いぢや。ドウして〳〵、ソンナことぢやないわい。「殊に知らず、古人の

意、天の普く蓋ふが如く、地の普く擎ぐるに似たり」と、古人は其のやうな小さい了簡ではない、所謂法界に周遍するぢや。併し去りとは餘り安賣りな評ぢやぞ。「他の父子相ひ投じ、機鋒相ひ合ふ。那箇頭を擧すれば、他便ち尾を會す。如今の學者、古人の轉處を識らず、空しく意路上に去つて卜度す」と、今時の學人は、父子相ひ投じ、機鋒相ひ合ふ底の古人の働きを知らぬから不可んぞ。サー各々、心の主となつて、心を主とするなよ。「若し見んと要せば、他の南泉、趙州の轉處に去つて便ち見れば好し。頌して云く」と、全く此處を見たいと思ふならばサ、南泉と趙州との轉々の處を見るが好い。サー頌ぢや。

公案圓來問趙州　○言猶在耳○不消更斬○喪車背後懸藥袋　長安城裏任閑遊　○得恁麼快活○得恁麼自由○信手拈來草○不可不教爾恁麼去也　草鞋頭戴無人會　○也有一箇半箇○別是一家風○明頭也合暗頭也合　歸到家山即便休　○脚跟下好與三十棒○且道過在什麼處○只爲爾無風起浪○彼此放下只恐不恁麼○恁麼也太奇

【和訓】公案圓かにし來つて趙州に問ふ。（○言、猶ほ耳に在り。○斬ることを消せず。○喪車の背後に藥袋を懸く。）長安城裏閑遊に任す。（○恁麼に快活なることを得たり。○恁麼に自由なることを得たり。○手に任せて草を拈じ來る。○爾をして恁麼にさらしめずんばある可からず。）草鞋頭に戴く人の會する無し。（○也た一箇半箇有り。○別に是れ一家風。○明頭も也た合し、暗頭も也た合す。）歸つて家山に到つて即便ち休す。（○脚跟下好し三十棒を與ふるに。○且らく道へ、過、什麼の處にか在る。○只だ爾が風無きに浪を起すが爲めなり。○彼此放下せば只だ恐らくは不恁麼ならんことを。○恁麼ならば也太奇。）

【提唱】

頌　コレから雪竇の頌ぢや。

「公案圓かにし來つて趙州に問ふ」と、南泉、先に腹一杯働いて來たが、又た趙州を見て問ふたぢや。併しサ、猫を斬ったのが聞かな。雪竇の奴に圓なと云はれても、コノ南天棒は圓にはないぞ。若し大衆の中で見當でも吐かしたら、圓なと云ふべいか。

「長安城裏閑遊に任ず」と、コリャ南泉の意氣ぢや。コノ中に自ら趙州の悠々閑々の地が顯はれて居るぞ。雪竇も極く老婆ぢや、肝腸心腸、都べて吐き盡して頌した。

「草鞋頭に戴く人の會するなし」と、趙州の働きは、誰れも知り人がないと云ふがサ、趙州が草鞋を頭に戴いてから問ふたら、ドンナものぢや。可笑しかるべい。

「歸つて家山に到つて即便ち休す」と、趙州の奴、南泉の長安城に遊んだが、ヤッパリ手前の寢處

が好いと見えて、サッサと家郷に歸つて休息したとサ。イヤ〳〵趙州、ナンで戻らう、戻るナリカバネでは未だ遠い〳〵。又た、家山に到つて卽ち休すと云ふ點は是ぢや。人々〳〵、長安城裏の閑遊を知らなければ、本分の地を認めて住まるからぢやと。コリヤ雪村老の講ぢや。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「公案圓來問趙州」――「言、猶ほ耳に在り」、斬猫のことは未だ耳にあるのにサ。「更に斬ることを消せず」、南泉、又た干戈を動かして、趙州が能く働かねば、再び猫を斬る氣か。ソレは御無用〳〵。「喪車の背後に藥袋を懸く」、斬つた後で、何んの彼のと、藥袋の取り沙汰は遲八刻ぢや。喧嘩過ぎての棒ちぎりも同じぢや。

「長安城裏任閑遊」――「恁麼に快活なることを得たり」、猫を斬つたのが快活だがサ。併し羨しい境界ぢやナ。「恁麼に自由なることを得たり」、酒々落々、出やうと入らうと、人の足は借らぬぞ、一手に信せて草を拈じ來る」、コリヤ下の趙州へ掛けて云ふたぢや。到り得、歸り來る底の人ならば、手當り次第に草を採つて、拈じ來つて丈六の金身とする。ソンナことは朝の間の茶の子ぢや。「倆をして恁麼に去らしめずんばある可からず」、皆々をして、コノやうな境界に到らしめいでは置かぬ。

「草鞋頭戴無人會」――「也た一箇半箇有り」、無いとは云ふまい。一人やソコラは、骨の有る者も居る。ソレ此處に圜悟が控へて居るぞ。「別に是れ一家風」、コリヤ又々格別なものぢや。圜悟には圜悟の家風がある、南天棒には南天棒の家風があるぢや。親の眞似をせぬから、釋迦でも達磨でも御存じない。「明頭も也た合し、暗頭も也た合す」、今時、差別の上からでも、那邊、平等の上からでも、何方から打つても、南泉の氣に叶ふぞ。

「歸到家山卽便休」――「脚跟下好し三十棒を與ふるに」、若し家山に休すと云はゞ、踏ん延へた足を打ちノメセ。「且らく道へ、過、什麼の處にか在る」、サー此の三十棒を貰ふた過は何處にあるかサ。「只だ倆が風無きに浪を起すが爲めなり」、南泉が、ナンの風無きに浪を起さうぞ。ソリヤ兩堂の奴等が爭ふ處から起るぢや。「彼此放下せば、只だ恐らくは不恁麼ならんことを」、南泉にも趙州にも關はぬか。南泉の猫も、趙州の草鞋も、何も彼も放下せよと云ふのか。併し放下したとても、ガイにそないに樂でもあるまい。イヤとても放下はなるまい。「恁麼ならば也太奇」、放下したら太だ奇特ぢやとサ。ぢやが圜悟のやうに云ふては立枯になる。氣を付けサラセ。

公案　圓來問趙州慶藏主道如人結案相似八棒是八棒十三是十三已斷了也却拈來問趙州州是他屋裏人會南泉意旨他是透徹底人涇著磕著便轉具本分作家眼腦纔聞舉著剔起便行雪竇道長安城裏任閑遊漏逗不少古人道長安雖樂不是久居又云長安甚鬧我國晏然也須是識機宜別休咎始得草鞋頭戴無人會戴草鞋處這些子雖無許多事所以道唯

我能知唯我能證方見得南泉趙州雪竇同得同用處且道而今作麼生會歸家山即便休什麼處是家山他若不會必不恁麼道他既會且道家山在什麼處便打

【和訓】 公案圓かにし來つて趙州に問ふと。慶藏主道く、人の案に結するが如くに相ひ似たり。八棒は是れ八棒、十三は是れ十三、已に斷り了れりと。却つて拈じ來つて趙州に問ふ。州は是れ他の屋裏の人、南泉の意旨を會す。他は是れ透徹底の人、壓著磕著、便ち轉ず。本分の作家の眼腦を具す、纔かに擧著するを聞いて、剔起して便ち行く。雪竇道く、長安城裏閑遊に任すと。漏逗少なからず。古人道く、長安樂しと雖も、是れ久居するに不らず。又た云く、長安甚だ鬧し、我が國晏然と。也た須らく是れ機宜を識り、休咎を別つて始めて得べし。草鞋頭に戴く人の會する無しと。草鞋を戴く處、這の些子、許多の事無しと雖も、所以に道ふ、唯だ我れ能く知り、唯だ我れ能く證すと。方に南泉、趙州、雪竇、同得同用の處を見得せん。且らく道へ、而今作麼生か會せん。家山に歸つて即便ち休すと。什麼の處か是れ家山。他若し會せずんば、必らず恁麼に道はじ。他既に會す。且らく道へ、家山什麼の處にか在る。便ち打つ。

【提唱】 コレから圜悟の評ぢや。「公案圓かにし來つて趙州に問ふと。慶藏主道く、人の案に結するが如くに相ひ似たり」と、判斷の仕易いやうに、口上書を上げたやうぢや、少しも私は入れぬと。コリャあるべきことぢや。「八棒は是れ八棒、十三は是れ十三、已に斷り了れりと」、「道ひ得ば即ち斬らじ」と云ふ處で埒が明かなんだら、八棒喫すれば好いにサ。南泉が即ち斬つたのは十三棒ぢや。斯う有りうちのことぢや。コレデ裁決は濟んだ。八棒と十三棒とのことは、前にも云ふて置いた。「却つて拈じ來つて趙州に問ふ。州は是れ他の屋裏の人、南泉の意志を會す。他は是れ透徹底の人、壓著磕著、便ち轉ず。本分の作家の眼腦を具す、纔かに擧著するを聞いて、剔起して便ち行く」と、趙州は南泉のホテッ腹を知り拔いて居るから、仇箭は射ぬ、全體黑星ぢや。ぢやからチラリッと擧著するを聞けば、直に引ッからげて走るぞ。「雪竇道く、長安城裏閑遊に任すと。漏逗少なからず」と、コリャ評し得て大いに好しぢや、南天棒も大好きぢや。雪竇の頌には錯る處有り、コレデ雲門宗を紛碎し了つた。「漏逗少なからず」で、云ひ過ぎたぢや、コレぢや正位、二乘に墮ちるぞ。「古人道く、長安樂しと雖も、是れ久居するに不らず」と、上位は靜かと思ふらめど、コノ鬧しいのを能く知れ。東京は鬧しくて火事早いぞ。途路好しと雖も、家に歸らんには如かずぢや。正位、二乘は未だ眞物ぢやない。「又た云く、長安甚だ鬧し、我が國晏然と」、コリャ藥山惟儼と高沙彌との語ぢや。藥山が弟子の高沙彌に問ふた、我れ聞く長安甚だ鬧しと、汝還つて知る麼。沙彌が云く、我が國晏然と。サー此の「我が國」とは何處のことぢやナ。途中に在つて家舍を離れずか。南天棒曰く「滿面の漸惶、大拖泥」と。「也た須らく是れ、機宜を識り、休咎を別つて始めて得べし」と、機宜、休咎を識る人で無けにや、上の意味合は會からぬ。「草鞋頭に戴く人の會する無しと。草鞋を戴く處、這の些子、許多の事無しと雖も」と、草鞋を頭に戴せたのと戴せぬのと、コレはサ、深いことはないけれども、知らねば深いぞ。「雖」と云ふ字は衍字か。「所以に道ふ、唯だ我れ能く知り、唯だ我れ能く證すと」、何んても肯心自ら許すで、自知するのみぢや。傍から付け燒刃では不可ぬぞ。「方に南泉、趙州、

雪竇、同得同用の處を見得せん。且らく道へ、而今作麼生か會せん」と、コノ三人は同じことをして居るが、會かるか如何ぢや。「歸つて家山に到つて卽便ち休す」と、コノ頌は、宗旨を知らねば夢にも見ることはならぬぞ。「什麼の處か是れ家山」と、ハテ、家山へ戻つた分では面白うない。コレを諸相非相、無相平等の家山と見ては、コノ頌は夢にも見えぬ、宗旨を知らぬからサ。「他若し會せずんば、必らず恁麼に道はじ。他既に會す。且らく道へ、家山什麼の處にか在る。便ち打つ」と、雪竇は會つて居るに違ひない。會らなけりゃ、斯うは云ふまいぞ。サテ正に會つて居るなら、家山は何處に在るぞと一掌を喫はせた。コレぢゃ圜悟の機用、漏逗ぢゃぞ。

【注釈】〔雪竇老〕臨濟宗、名は友梅、行空と號す。元時代に入唐す。「上位は靜かと思ふらめ」表面は平穏の樣なれどもの意。

第六十五則　外道問佛有無　【外道問佛有無】

垂示云無相而形充十虛而方廣無心而應徧刹海而不煩擧一明三目機銖兩直得棒如雨點喝似雷奔也未當得向上人行履在且得作麼生是向上人事試擧

【和訓】垂示に云く、無相にして形はる、十虛に充ちて方廣なり。無心にして應ず、刹海に徧くして煩はしからず。擧一明三、目機銖兩、直に棒、雨點の如く、喝、雷奔に似たることを得るも、未だ向上の人の行履に當り得ざること在り。且らく道へ、作麼生か是れ向上の人の事。試に擧す。

【提唱】第六十五則、「外道問佛有無」と、コノ則はサ、四大は是れ百病の倉、一大增損すれば、百一病生ず。若し有と道はゞ因果に墮ち、無と道はゞ惡見に落ちん。此の二途を離れ、如何に身を保たん。若し此の受持を明めずんば、念々の間、四威儀中、總に是れ凡夫の行にして、賢聖の行を失す。是の故に外道、佛前に請益し、佛に向つて決了す。是れ衲僧、平生知らざる可からざるの大事を明すのぢゃ。

「垂示に云く、無相にして形はる、十虛に充ちて方廣なり」と、實相は無相で、全體現前するぞ。有相の時は、人々の眞の故鄕は隱れる。無相ぢゃから無盡無測ぢゃ、言ふことも、語ることもならぬ。

「無心にして應ず、刹海に徧くして頻はしからず」と、柳は無心にして綠、花は無心にして紅ぢや。法身其の儘に働いて、刹々塵々、十方法界に彌綸して、スッキリ邪魔にはならぬ。茶に遇ふては茶を喫しサ、飯に遇ふては飯を喫しサ、少しも缺障りはないぞ。無心ぢやから斯う働けるぢや。「擧一明三、目機銖兩」と、コヽ處を呑込む頓機、聰明の漢ならばサ、タッタ一聲でも無量の法門を會して、目分量で、學人がドノ位の器量と云ふことも直に會るぢや。「直に棒、雨點の如く、喝、雷奔に似たることを得るも、也た未だ向上の人の行履に當り得ざること在り」と、サー上のやうに合點して、ソレ棒喝を以つて學者を接しやうとも、ナカ〳〵大閑の明いた田地には行かれぬぞ。櫻町院の御製にも、「うけつぎし國の司の甲斐もなく惠まぬ民に惠まるゝかな」と宣ひしやうに、ナカ〳〵向上には達し得られぬものぢや。「且らく道へ、作麼生か是れ向上の人の事。試に擧す」と、サー向上の神符を握つた人は、ドウ云ふ人ぢやと。コノ下に「看よ」と入れる方が好い。

擧外道問佛不問有言不問無言　○雖然如是屋裏人也有些子香氣○雙劍倚空飛○賴是不問世尊良久　○莫謗世尊○其聲如雷○坐者立者皆動他下得

外道讚歎云世尊大慈大悲開我迷雲令我得入　○伶俐漢○一撥便轉○盤裏明珠

外道去後阿難問佛外道有何所證而言得入　○不妨令人疑著○也要大家知○鋼鑪著生鐵

佛云如世良馬見鞭影而行　○且道喚什麼作鞭影○打一拂子○棒頭有眼明如日○要識眞金火裏看○○拾得口喫飯

【和訓】擧す。外道、佛に問ふ、有言を問はず、無言を問はず。（○然も是くの如くなりと雖も、屋裏の人也た些子の香氣有り。○雙劍空に倚つて飛ぶ。○賴に是れ問はず。）世尊良久。（○世尊を謗すること莫れ。○其の聲雷の如し。○坐者立者皆な他を動かすこと得じ。）外道讚歎して云く、世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむ。（○伶俐の漢。○一撥すれば便ち轉ず。○盤裏の明珠。）外道去つて後、阿難、佛に問ふ、外道何んの所證有つてか、而も得入を言ふ。（○妨げず人をして疑著せしむることを。○也た大家、知らんことを要す。○鋼鑪生鐵を著く。）佛云く、世の良馬の、鞭影を見て行くが如し。（○且らく道へ、什麼を喚んでか鞭影と作さん。○打つこと一拂子。○棒頭に眼有り、明かなること日の如し。○眞金を識らんと要せば火裏に看よ。○口を拾ひ得て飯を喫せよ。）

【提唱】

本則　コレから本則ぢや。

「擧す。外道、佛に問ふ、有言を問はず、無言を問はず」と、外道が、釋迦如來をシコナシて見んと、斯う問ふて來た。コノ外道はサ、是でもない、非でもない、可不可一條の場まで知つて、コヽに

行き詰つて居た。即ち九十六種の諸見を超越してからに、本分の正位と、只だ壁一重隔る底の漢ぢや。如來の時代ばかりぢやない、即今此の場で斯う問ふて來たら、諸人、何々とするぞ。ナカ〳〵工みの上に工んで來た問ぢや。言へば常見ぢやし、言はなきや斷見ぢやから、「有言を問はず、無言を問はず」と、兩手飛車に出て來た。コノ外道とは、長爪梵志のことぢや、後に佛弟子となつて、摩訶拘絺羅と云ふた。

「世尊良久」と、流石は如來ぢや、水長うして船高しぢや。機を見て手を下すことの早さ、實にハヤ、三界の大導師ぢやわい、ナカ〳〵味好く遣つた。正に是れ、紙鐵砲を與へ了つたぢや。然も一時とは云ひながら、コノ「良久」は、上下四維、十方法界に透徹した。併しサ、正眼に看來れば、コノ時ばかりが良久ぢやない、初め鹿野苑より、終り跋提河に至るまで、全體良久ぞ。

「外道讃歎して云く、世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむ」と、外道は、釋迦如來のコノ良久に依つてからに、七識根本の業に住まつて居つた迷雲が、グワラリッと晴れて、實に有無に渉らざる底の悟りのドン底を打ち碎いて、眞正の處へ至つた。コノ外道が佛に遇ふたは、盲龜の浮木ぢや。若し今日佛に遇はなんだならばサ、一生の間、有と無とに捉はれて暮すであらうのに。今ぞコノ良久に遇ふて、「我をして得入せしむ」と、初めて菩提を成した。

「外道去つて後、阿難、佛に問ふ、外道何んの所證有つてか、而も得入と言ふ」と、サー傍の人には會らない、阿難もヤッパリ其の一人と見えて、外道が退つた後、釋迦如來の處へ行き、外道は何處を見付けて得入しやしたかナと問ふた。

「佛云く、世の良馬の、鞭影を見て行くが如し」と、コヽには些子の詮議が有るぞ。龍蛇を定むるの眼正しけりや會るぢや。「鞭影」とは何處か、良久の處か。コリヤ喩ぢやないぞ、喩と見ると、良久は半文錢の價値もない。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「擧外道問佛不問有言不問無言」――「然も是くの如くなりと雖も、屋裏の人也た些子の香氣有り」、コリヤ好い下語ぢや。是の如く問ふは問ふたれども、此奴、隻手を聞いた奴ぢや。外道ぢやあるが、ナカ〳〵納僧の氣息がある。今時の坊主にや、コノ外道だけの者も少いぢや。「雙劍空に倚つて飛ぶ」、有言と無言とに當つて切つて放した天國の名劍、恐しいものぢや。「賴に是れ問はず」、問はんで好かつた、問ふたら困るべいに。

「世尊良久」――「世尊を謗すること莫れ」、若しサ、纔かに有言と道はゞ、即ち佛を謗るぢや。又た纔かに無言と道はゞ、即ち佛を謗るぢや。サー如何ぢや。此の時に限つて世尊が良久したと思ふまいぞ。「其の聲雷の如し」、コヽに至つては、天魔波旬も寄り付くことはならぬ。「坐者立者皆な他を動かすこと得じ」、「坐者」とは八萬の大衆ぢや、「立者」とは外道ぢや。サー大衆も外道もサ、コノ

良久は何んともシンマイはならぬぞ。

「外道讚歎云世尊大慈大悲開我迷雲令我得入」――「伶俐の漢」、コノ外道は俐巧な者ぢや。「一撥すれば便ち轉ず」、ぢやから、チョと指をさへるよ、直に轉處を知るぞ。「盤裏の明珠」、グワラリッと、能くも斯う圓かに悟つた。

「外道去後阿難問佛外道有何所證而言得入」――「妨げず人をして疑著せしむることを」、人が疑ふのは尤もぢや、阿難さへ上汁も吸へぬ。「也た大家、知らんことを要す」、八萬の大衆にも、コノ魂膽は知らせたい。「鋼鑪生鐵を著く」、鍋の破れ目を、生鐵で貼つても著かぬぞ。鑄掛でなくちゃならぬ。所謂自分が究めずして問を作して、什麼とするかサ。「鋼」は「韵會」に古墓の切とある。「說文」には鑄塞とある。「鑪」は「玉篇」に力古の切とある、釜の屬ぢや。鑪釜に隙が有る時は、宜しく鐵を烹て、以つて之れを塞くべし。却つて生鐵を著くるは不可なりと。ぢやから、「鋼鑪生鐵を著く」とは、不恰合の義ぢや。

「佛云如世良馬見鞭影而行」――「且らく道へ、什麼を喚んでか鞭影と作さん」、圜悟は佛でも許しては置かぬ、コレは世尊の漏逗かサ。「打つこと一拂子」、世尊の鞭影は兎に角、圜悟、自己の鞭影を諸人に看せやうと一拂子したか。「棒頭に眼有り、明かなること日の如し」、ソノ棒頭には格外な眼がある。コリャ盲打ぢやないぞ。「眞金を識らんと要せば火裏に看よ」、世尊、甘口なことを云ふな、眞物を見別けやうとするならば、火の燃え立つ中で見ろ。「口を拾ひ得て飯を喫せよ」、第二義に向つてゲジャ〳〵說く、已に口を失ひ了つたぞ。サー其の口をタハッテ飯を喰へ。

此事若在言句上三乘十二分教豈是無言句或道無言便是又何消祖師西來作什麼只如從上來許多公案畢竟如何見其下落這一則公案話會者不少有底喚作良久有底喚作據坐有底喚作默然不對且喜沒交涉幾曾摸索得著來此事其實不在言句上亦不離言句中若稍有擬議則千里萬里去看他外道省悟後方知亦不在此亦不在彼亦不在是亦不在不是且道是箇什麼天衣懷和尙頌云維摩不默不良久據坐商量成過咎吹毛匣裏冷光寒外道天魔皆拱手百丈常和尙參法眼眼令看此話法眼一日問僧看什麼因緣常云外道問佛話眼云僧試擧看常擬開口眼云住住僧擬向良久處會拂常於言下忽然大悟後示衆云白丈有三訣喫茶珍重歇擬議更思量知君猶未徹翠巖眞點胸拈云六合九有青黃赤白一一交羅外道會四維陁典論自云我是一切智人在處索人論議他致問端要坐斷釋迦老子舌頭世尊不費纖毫氣力他便省去讚歎云世尊大慈大悲開我迷雲令我得入且道作麼生是大慈大悲處世尊隻眼通三世外道雙眸貫五天潙山眞如拈云外道懷藏至寶世尊親爲高提森羅顯現萬象歷然且畢竟外道悟箇什麼如趂狗逼墻至極則無路處他須回來便乃活

鱍鱍地若計較是非一時放下情盡見除自然徹底分明外道去後阿難問佛云外道有何所證而言得入佛云如世良馬見鞭影而行後來諸方便道又被風吹別調中又云龍頭蛇尾什麼處是世尊鞭影什麼處是見鞭影處雪竇云邪正不分過由鞭影眞如云阿難金鐘再擊四衆共聞雖然如是大似二龍爭珠長他智者威獰雪竇頌云

【和訓】此の事若し言句上に在らば、三乘十二分敎、豈に是れ言句無からんや。或は無言便ち是と道はゞ、又た何んぞ祖師西來を消して什麼か作さん。只だ從上來許多の公案の如きんば、畢竟如何んが其の下落を見ん。這の一則の公案、話會する者少なからず。有る底は喚んで良久と作し、有る底は喚んで據坐と作し、有る底は喚んで默然不對と作す。且喜すらくば沒交涉、幾くか曾つて摸索し得著し來らん。此の事、其れ實に言句上に在らず、亦た言句の中を離れず。若し稍擬議有らば、則ち千里萬里にし去らん。看よ他の外道省悟の後、方に知んぬ、亦た此に在らず、亦た彼に在らず、亦た是に在らず、亦た不是に在らざることを。且らく道へ、是れ箇の什麼ぞ。天衣の懷和尙頌して云く、維摩默せず良久せず、據坐商量過咎を成す、吹毛匣裏冷光寒し、外道天魔皆な手を拱すと。百丈の常和尙、法眼に參ず。眼、此の話を看せしむ。法眼一日問ふ、儞什麼の因緣をか看る。常云く、外道問佛の話。眼云く、儞試に擧せよ、看ん。常、口を開かんと擬す。眼云く、住みね住みね、儞良久の處に向つて會せんと擬する那。常、言下に於て忽然として大悟。後に衆に示して云く、百丈に三訣有り、喫茶、珍重、歇。擬議して更に思量せば、知んぬ君が猶ほ未だ徹せざることをと。翠巖の眞、點胸、拈じて云く、六合九有、靑黃赤白、一一交羅すと。外道四維陀の典論を會して、自ら我は是れ一切智人と云ふて、在處に人の論議を索む。他、問端を致して、釋迦老子の舌頭を坐斷せんと要す。世尊纖毫の氣力を費さず。他、便ち省し去る。讃歎して云く、世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむと。且らく道へ、作麼生か是れ大慈大悲の處。世尊の隻眼三世を通じ、外道の雙眸五天を貫く。潙山の眞如拈じて云く、外道、懷に至寶を藏す、世尊親しく爲に高く提ぐ。森羅顯現し、萬象歷然たりと。且らく畢竟して外道、箇の什麼をか悟る。狗を趁ふて墻に逼らしむるが如し。極則無路の處に至つて、他須らく回り來つて便乃ち活鱍鱍地なるべし。若し計較是非、一時に放下し、情盡き見除かば、自然に徹底分明ならん。外道去つて後ち、阿難、佛に問ふて云く、外道何んの所證有つてか、而も得入と言ふ。佛云く、世の良馬の、鞭影を見て行くが如しと。後來諸方便ち道ふ、又た風に別調の中に吹かると。又た云く、龍頭蛇尾と。什麼の處か是れ世尊の鞭影、什麼の處か是れ鞭影を見る處。雪竇道く、邪正分たず、過、鞭影に由ると。眞如云く、阿難の金鐘再び擊つ、四衆共に聞く。然も是の如くなりと雖も、大に二龍の珠を爭ふに似たり、他の智者の威獰を長ずと。雪竇頌して云く。

【提唱】コレから圜悟の評ぢや。「此の事若し言句上に在らば、三乘十二分敎、豈に是れ言句無からんや」と、コレが若し言句上のことならばサ、五千四十八卷があるぢやないか。故に西天此土の諸祖傳來の些子は入るまい。「或は無言便ち是と道はゞ、又た何んぞ祖師西來を消して什麼か作さん」と、サー世尊が默言つた處が好い、ソレが見事ぢやと云ふならば、又たなにしに達磨が十萬里の波濤を越へて、的々相承するに及ばうぞ。「只だ從上來許多の公案の如きんば、畢竟何處にあるか。「這の一則の公案、話會する者少なからず。有る底は喚んで良久と作し、有る底は喚んで據坐と作し、有る底は喚んで默然不對と作す。且喜すらくば沒交涉。幾くか曾つて摸索し得著し來らん。此の事、其れ實に言句上に在らず、亦た言句の中を離れず、若し稍擬議有らば、則ち千里萬里にし去らん」と、コノ則なぞはナカ〳〵妄想の差配が多いぢや。ヤア良久ぢや、ヤア據坐ぢや、ヤア默然不對ぢやと、ナンのとかい、盲目

が象を撫ぜるやうに、ソンナことで届くものぢやない。若し當てつ較べつ仕様ぞならば遠うして遠しぢや。「看よ、他の外道省悟の後、方に知んぬ、亦た此に在らず、亦た彼に在らず、亦た是に在らず、亦た不是に在らざるとを。且らく道へ、是れ箇の什麼ぞ」と、外道の悟つたのは、無言でも有言でも、有爲でも無爲でもないぞ。又た良久にも止らぬが、ト云ふて良久でないでもない。サー其は何物ぢやと、劍先きは寒じい。「天衣の懷和尚頌して云く、維摩默せず良久せず、據坐商量過咎を成す、吹毛匣裏冷光寒し、外道天魔皆手を拱すと」、コレは天衣の義懷和尚の頌ぢや。維摩は默つたのぢやない、又た良久もしないのに、或は據坐と爲し或は商量と爲して、大いに疵を付けたぞ。元來コノ良久はサ、天國の寶劍を磨いたやうなもので、奈落の底迄輝り照いて居るぞ。ぢやから三世の諸佛も面出しはならぬ、況してや天魔外道等、一人としてコノ良久に手出しは出來ぬ。「百丈の常和尚、法眼に參ず。眼、此の話を看せしむ。法眼一日問ふ、儞什麼の因緣をか看る。常云く、外道問佛の話。眼云く、儞試に擧せよ、看ん。常、口を開かんと擬す。眼云く、住みぬ住みぬ、儞良久の處に向つて會せんと擬する那。常、言下に於て忽然として大悟」と、コリヤ洪州百丈山の大智院道常禪師のことぢや、法眼の法嗣ぢや。ソノ常和尚がサ、法眼の處へ參じた時、法眼此の話を看せしめた。ソコデ常が本當に見たか如何かと法眼が問ふと、常が口を開かうとするトタン、法眼が云ふのに、止せ〳〵、ガイに良久の場をカヽグルナと。ソコデ常が大悟したと云ふが、コレぢや引ッ張りやうが足らぬ。コヽラを手に据えて見るやうぢやないと、ホントのことはいかぬ。コノ大悟は南天棒は許さぬ、實に合點が行かぬ。「後に衆に示して云く、百丈に三訣有り、喫茶、珍重、歇。擬議更に思量せば、知んぬ君が猶ほ未だ徹せざることをと」、それから後に、百丈が三祕訣を提げて接衆したと見える。ソノ三祕訣は如何あらうぞなれば、「喫茶」、お茶をまゐれ、「珍重」、おまめで目出度い、「歇」、やすめト。コリヤ名劍を引ン拔いて、脇挾んだやうな勢ぢや。サー此の三祕訣がザッと呑み込めると、釜で水を呑む樣ぢやがサ。「會元」十の百丈道常禪師の章に云ふてあるのに、「上堂、衆集まる、便ち曰く、喫茶去と。或る時衆集まる、師曰く、歇と。後に頌有り、曰く、百丈に三訣有り、喫茶、珍重、歇。直下に便ち承當せば、敢て君が未徹を保せんと」。コノ頌と、評中の上堂の語とは少し違つて居るが、意は同じぢや。「翠巖の眞、點胸、拈じて云く、六合九有、青黃赤白、一一交羅すと」、慈明楚圓の法嗣の翠巖可眞が、世尊良久の處を拈じてからに、叮嚀に切り細いて喫ませるぞ。「六合九有」とは、十六世界と云ふたやうなもの。六合は天地四方ぢや、九有は九州ぢや。又た慾界の一と、色界の四禪と、無色界の四空とを九有とも云ふ。「青黃赤白」とはサ、青は官服、黃は道服、赤は僧服、白は俗服ぢやから、老少尊卑を指したもので、諸家を云ふたのぢや。「宗門統要」には、緇素青紫となつて居る。サーそれがサ、コヽでは、「一一交羅す」で、僧俗男女、天堂地獄、ごたまぜになつたと、「宗門統要」には、交羅を交參に作つて、此の下に、「咸言ふ、良久、據坐、對せず

と、要且つ不是」の十二字が有る。「外道、四維陁の典論を會して、自ら我は是れ一切智人と云ふて、在處に人の論議を索む。他、問端を致して、釋迦老子の舌頭を坐斷せんと要す」と、「四維陁の典論」と云ふは外道の書ぢや。「翻譯名義集」の五に依ると、維陁は又た吠陁と名く、此には翻して智論と云ふ。此れを知れば智を生ず、卽ち邪智論ぢや。又た無對とも翻する、舊、毘陁と云ふは訛ぢや。維陁に四有り。一には阿由、此には方命と云ふ、又は壽と云ふ、所謂生を養ひ性を繕ふ。二には殊夜、所謂祭祀祈禱。三には婆磨、所謂禮儀占卜、兵法軍陣。四には阿達婆、所謂異能技數、禁咒醫方等であると云ふてある。斯う云ふ道を究め盡した外道ぢやから、自分でも三千世界に並ぶものはないと思ひ、誰がドンナ問を持つて來ても、云ひ伏せる處から、一つ世尊をも云ひ潰して吳れべいと思つて、本則のやうに問ふて來たものぢや。「世尊、纖毫の氣力を費さず。他、便ち省し去る。讚歎して云く、世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむと。且らく道へ、作麼生か是れ大慈大悲の處」と、處が世尊、何んの造作もなく、少しの力をも費さずして、外道を悟入せしめた。コノ外道は思ひの外の仕合せ者ぢや、犬も歩けば棒に當るとは斯うしたことか。ソコデ外道は讚歎したが、世尊の大慈大悲と云ふ處は何處ぢや。「世尊の隻眼三世に通じ、外道の雙眸五天を貫く」と、コノ「世尊の隻眼三世に通じ」と云ふは、コリヤ化他の方ぢや。又た「外道の雙眸五天を貫く」と云ふは、漸く五天の分ばかりしか見えぬから、卽ち自利の方ぢや、自己ばかりと云ふ義ぢや。三世に通達する眼を得たくば、先づ第一に見性せよ。南天棒が隻手の聲も、天堂地獄、佛界魔界を貫くぞ。

コノ語はナカ〳〵嶮峻ぢや。コレは元、慈明の法嗣の道吾の眞和尙が、問佛の話に答へた語ぢや。ソレに雪巢が續けて頌して云ふのに、「世尊の隻眼三世に通じ、外道の雙眸五尺を貫く、花意正に濃やかにして桃瞼笑ふ、春光柳梢の邊に在らず」と。雪巢は草堂の淸に嗣ぎ、淸は晦堂に嗣いだ。「普燈錄」の二十八に云ふてある。「潙山の眞如拈じて云く、外道懷に至寶を藏し、世尊親しく爲に高く提ぐ。森羅顯現し、萬象歷然たりと」、コノ評判は中々好い。外道の腹中に至寶があると云ふが、コリヤ是れ外道ばかりか、各々銘々が腹の中にも、三千大千世界に取り替へのならぬ大切な珍があるぞ。ソレを世尊が、良久の處で是れ見よと高く提げた。ソノ中には佛界魔界、森羅萬象現前たりぢや。コリヤ慕喆和尙の拈提ぢや、眞如と云ふは道號ぢや、古本には潙山哲としてある。コノ和尙のことは、又た次ぎ下の七十三則の評にも出て居る。「且らく畢竟して外道、箇の什麼をか悟る。狗を趁ふて墻に逼らしむるが如し。極則無路の處に至つて、他須らく回り來つて便乃ち活鱍鱍地なるべし」と、コリヤ圜悟の語ぢや。サー外道、何を悟つたか。コレはサ、外道が本理の極處に行き詰つたを、佛が又た追ひ馳けたぢや。ソレぢやから去り處はない、どうしても跳ね出さねばならぬ、窮すれば變じ、變ずれば通ずぢや。外道が有無に涉らぬ處を以つて問ふて來たからサ、世尊も有無を離れた處を以つて、グワリッと打ち拔いた、槪を以つて槪を拔くぢや。ソコデ外道、大死一番、蘇生し

來つてからに、氣儘に唄ひたいと思ふ歌を唄ひ、舞ひたいと思ふ舞を舞ふ。活鱍々地に自由な働きをするぢや。「若し計較是非、一時に放下して、情盡き見除かば、自然に徹底分明ならん」と、是非を放下して、本分に徹底したならば、コヽラは何んでもないこッちや。「外道去つて後、阿難、佛に問ふて云く、外道何んの所證有つてか、而も得入と言ふ、佛云く、世の良馬の、鞭影を見て行くが如しと」、コリャ佛と阿難との問答ぢや。「後來諸方便ち道ふ、又た風に別調の中に吹かると」、瑯琊覺が此の則を拈じて云ふのに、「依稀たる曲に似て纔かに聞くに堪ゆ、又た風に別調の中に吹かる」と。佛が阿難に答へた處は、ドウ調子が違つた、何處へ吹かれたかナ。始め風の程能く吹く時は宮商相ひ調ひ、聞き事であつたが、終りに狂風に吹かれて調子が違つて、聞かれぬぞ。コレはサ、世尊も初め良久の處は見事ぢやつたが、阿難に問はれて話墮せられたと云ふことぢや。「又た云く、龍頭蛇尾と」、コレも瑯琊の語ぢや。初めは悟り拔いて來たが、歸りは駄目ぢや。「世の良馬の鞭影を見て行くが如し」と云はれては、阿難の爲に拖泥ぢやわい。「什麼の處か是れ世尊の鞭影、什麼の處か是れ鞭影を見る處」と、コリャ圜悟の腕前ぢや。「雪竇云く、邪正分たず、過、鞭影に依ると」、コノ語は雪竇の「洞庭錄」の中にある。良久の處は、言詮も及ばず、邪正分たず、一入見事ぢや。然れども佛が鞭影と云ふに至つて過が起つた。サー勝負は鞭の處で付いたぞ。「眞如云く、阿難の金鐘再び擊つ、四衆共に聞く」と、コノ眞如の拈語は「統要」に出て居る。「阿難金鐘」は「楞嚴經」の第四、七

處徵心の處に見ゆ。併し鐘を打つたは羅喉羅で阿難ぢやない。是れ所謂、意を得て言を忘するものぢや。眞如は此の語を設けて、心を徵する類に因つて、之れを引くのか。外道が去つて後、阿難が佛に問ふたのは、是れ金鐘を再び擊つのぢや。「然も是くの如くなりと雖も、大いに二龍の珠を爭ふに似たり」と、阿難の再び打つた金鐘を、四衆も共に聞きつらうがサ、佛と外道との問答が大事ぢや、丁度双龍の珠を爭ふがやうぢや。「他の智者の威獰を長ずと。雪竇頌して云く」と、コレは外道の爲に、翼を添へ了つたぢや。いとど智惠が超越したぞ。コヽを阿難に羽根を生やさせてやつたと云ふ者もあるが、外道の方が本則として當然ぢや。サー雪竇の頌ぢや。

機輪曾未轉　○在這裏○果然不動一絲毫　轉必兩頭走　○不落有必落無○不東則西○左眼半斤右眼八兩　明鏡忽臨臺　○還見釋迦老子麼○一撥便轉○破也破也○敗也敗也　當下分妍醜　○盡大地是箇解脫門○好與三十棒○還見釋迦老子麼　妍醜分兮迷雲開　○放一線道○許爾有箇轉身處　○爭奈只是箇外道　慈門何處生塵埃　○偏界不曾藏○退後退後○達磨來

也　因思良馬窺鞭影　○我有拄杖子○不消儞興我○且道什麼處是鞭影處○什麼處是良馬處　千里追風喚得回　○騎佛殿出三門去也○轉身即錯○放過即不可○便打　喚得回鳴指三下　○前不搆村後不迭店○拗折拄杖子向什麼處去○雪竇雷聲甚大雨點全無

【提唱】

【和訓】機輪曾つて未だ轉せず。（○這裏に在り。○果然として一絲毫を動ぜず。）鞭ずれば必らず兩頭に走る。（○有に落ちざれば必らず無に落つ。○東せざれば則ち西す。○左眼半斤、右眼八兩。）明鏡忽ち臺に臨む。（○還つて釋迦老子を見る麼。○一撥すれば便ち轉ず。○破也破也。○敗也敗也。）當下に硏醜を分つ。（○盡大地是れ箇の解脫門。○好し三十棒を與ふるに。○還つて釋迦老子を見る麼。）硏醜分る迷雲開く。（○一線道を放つ。○儞に許す、箇の轉身の處有ることを。○爭奈せん只だ是れ箇の外道。）慈門何れの處にか塵埃を生ぜん。（○徧界曾つて藏せず。○退後退後。○達磨來也。）因つて思ふ良馬の鞭影を窺ふことを。（○我に拄杖子有り。○儞か我に與ふることを消せず。○且らく道へ、什麼の處か是れ鞭影の處。○什麼の處か是れ良馬の處。）千里の追風喚び得て回す。（○佛殿に騎つて三門を出で去れり。○身を轉ずれば即ち錯る。○放過せば即ち不可。○便ち打つ。）喚び得て回らば指を鳴すこと三下せん。（○前、村に搆らず、後、店に迭らず。○拄杖子を拗折して、什麼の處に向つてか去る。○雪竇、雷聲甚だ大にして、雨點全く無し。）

頌　コレから雪竇の頌ぢや。

「機輪曾つて未だ轉せず」と、外道、「有言を問はず、無言を問はず」と云ふてからに、守一無適にして轉ぜぬ。行くも戻りもならぬ死水裏の漢ぢや。是れ物我不二の處、明暗双々ぢや。

「轉ずれば必らず兩頭に走る」と、チットでも動くが最後ぢや。一念、即ち守一無適を轉ずれば、必らず有無に落つるぞ。コノ一、二の句で、外道の全體を頌した。

「明鏡忽ち臺に臨む」と、世尊良久の處は、奈落の底まで磨き拔いた明鏡ぢや。サー此の大明鏡が照徹する時、外道の知見を透脫させるぢや。

「當下に硏醜を分つ」と、外道は此の良久の下で邪正を分つた。自知自得ぢや、人の鼻は借りはせぬ。

「硏醜分る迷雲開く」と、サー能見所見なき處、迷雲が開いたら、柳は綠、花は紅の色々にグヮラリッと分つた。外道の大歡喜、譬へやうはない。

「慈門何れの處にか塵埃を生ん」と、外道も大慈大悲と云ふた。悟り拔いた處で慈門が現はれる。慈門の端的には塵埃はないぞ。餓鬼は餓鬼で塵埃に非らず、修羅は修羅で塵埃に非らずぢや。

「因つて思ふ良馬の鞭影を窺ふことを」と、世尊良久の處を呑込んで、早く入得した處を見れば、外道は實に傑れたものぢや。鞭影を見て行くやうな怜悧な者は外にはない。

「千里の追風喚び得て回す」と、雪竇の轉處、實に妙極まるぢや。其奴悟つて了つて歸るぞ、ソレ

喚び返せ、用が有る。野ッ放して當途はない、何處まで行かうも知れぬとて喚び返した。「己が儘にやらぬは凧の命かな」ぢや。イヤ難透々々大難透。

「喚び得て回らば指を鳴すこと三下せん」と、喚んで歸つて來たならば、爪彈きして寄せ付けぬと。コリヤ雪竇の妙處、雲門宗の魂膽、屋裏の名作ぢや。南天棒は斯う云はうぞ。此れは是れ雪竇の妙處。若し驚覺と道はゞ、倆を打殺す。喚んで讃歎と作さば、當に齒を拔き去るぞ。

著語 コレから圜悟の著語ぢや。

「機輪曾未轉」――「這裏に在り」、元來不轉の處ぢやもの、大方サウであらうと思ふた。「果然として一絲毫を動ぜず」、雪竇もソノ心よ。不思善不思惡と云ふが、今時の禪法ぢや。

「轉必兩頭走」――「有に落ちざれば必らず無に落つ」「東せざれば則ち西す」、動くとすれば、何方かへ落ちなくちやならぬ。有でなけらりや無ぢや。コレぢやに依つて、只だ御座れの禪法が出來る。此處を今一つ輪拔けにや駄目ぢや。「左眼半斤、右眼八兩」、似たり寄つたりの悟りぢや、何方へ轉んでも同じことか。

「明鏡忽臨臺」――「還つて釋迦老子を見る麼」、サー落處を見るやと。コリヤ重言ぢや、後にも此の句がある。「一撥すれば便ち轉ず」、世尊の一トかきまはしに逢ふて、外道、目の玉がヒックリ返つた。「破也破也」、「敗也敗也」、世尊の良久に逢ふては、悟も迷も粉微塵ぢや。

「當下分研醜」――「盡大地是れ箇の解脫門」、分つて後に見れば、隱居も大家も、國土草木、悉皆成佛と合點する。斯う云ふも汚ない。「好し三十棒を與ふるに」、妍醜を分つなどと、小面の憎い、三十棒を喫はさう。「還つて釋迦老子を見る麼」、コレが眞の釋迦ぢや、拜め〳〵。

「妍醜分兮迷雲開」――「一線道を放つ」、路のない處へ、如來が良久で一線道を付けたナ。併しコレぢや未だ〳〵ホンのことぢやない。「倆に許す、箇の轉身の處有ることを」、外道、貴樣は迷雲が開けたと云ふがサ。「爭奈せん只だ是れ箇の外道」、大悟はしたはしたが、幾かに悟處が有れば、ソレこそ舊に依つて外道ぢや。ナゼ〳〵、眼橫鼻直、元と是れ眞壁平四郎ぢやもの。コリヤ圜悟の腕力で云ふたものぢや。

「慈門何處生塵埃」――「徧界曾つて藏せず」、ヒルの皮を剝くやうに、生死涅槃の皮を引ン剝いた。何處も彼處も皆な慈門ぞ。「退後退後」慈門などと云はないで、引ッ去れ〳〵。「達磨來也」、達磨のお通りぢや。サーこれが眞個の慈門と云ふものぢや。

「因思良馬窺鞭影」――「我に拄杖子有り」、誰に世話にならんでも、人々是れ、親重代の拄杖子を具足して居る。他の力を借らんでも、自分で自分の尻を叩いて走れ。「倆が我に與ふることを消せず」、鞭影なぞ吳れて貰はんでも好い。鞭影も拄杖子も別物ぢやないぞ。「且らく道へ、什麼の處か是れ鞭影の處」、サー鞭影とは何處のことぢや。ソンナ邪魔ものがあらうかい、元來無所得の鞭影ぢや。

「什麼の處か是れ良馬の處」、良馬ナンと云ふソンナ胡散なものはない。コノ「鞭影」と「良馬」とを能く看るが好い。併し只ぢや看えぬぞ。

「千里追風喚得回」――「佛殿に騎つて三門を出で去れり」、「千里追風」の句の當位、轉身自在な處はサ、極樂に騎つて地獄へ通るも同じぢや。「身を轉せば卽ち錯る」、喚んで歸るなら、ソリャ良馬ぢやない。所謂頭を回せば卽ち錯るぢや。「放過せば卽ち不可」、「便ち打つ」、少しでも油斷したら落馬ぢや。サー打つぞ。

「喚得回鳴指三下」――「前、村に搆らず、後、店に迭らず」、頭は在處へも達かぬに、尻ッぺたは茶店へも到かぬ。大將かと見れば續く勢もない。折角喚び回しても三下するでは、何方付かずぢや。「拄杖子を拗折して、什麼の處に向つてか去る」、雪竇、拄杖子は何處に置いた。彈指するとは手ぬるい、拄杖子で打てば好いに。「雪竇、雷聲甚だ大にして、雨點全く無し」、雪竇、氣が拔けたと見える。喚び回す勢は强かつたが、指を鳴すとは尻スボミぢや。大蛇でも出さうであつたが、蚊も出ないなあ。

機輪曾未轉轉必兩頭走機乃千聖靈機輪是從本已來諸人命脈不見古人道千聖靈機不易親龍生龍子莫因循趙州奪得連城璧秦主相如總喪身外道却是把得住作得主未嘗動著何故他道不問有言不問無言豈不是全機處世尊會看風使帆應病與藥所以良久全機提起外道全體會去機輪便阿轆轆地轉亦不轉向有亦不轉向無不落得失不拘凡聖二邊一時坐斷世尊纔良久他便禮拜如今人多落在無不然落在有只管在有無處兩頭走雪竇道明鏡忽臨臺當下分研醜這箇不曾動著只消箇良久如明鏡臨臺相似萬象不能逃其形質外道云世尊大慈大悲開我迷雲令我得入且道是什麼處是外道入處到這裏須是箇箇自參自究自悟自會始得便於一切處行住坐臥不問高低一時現成更不移易一絲毫纔作計較有一絲毫道理卽礙塞殺人更無入作分他後面頌世尊大慈大悲開我迷雲令我得入當下忽然分研醜分兮迷雲開慈雲何處生塵埃盡大地是世尊大慈大悲門戶儞若透得不消一揑此亦是放開底門戶不見世尊於三七日中思惟如是事我寧不說法疾入於涅槃因思良馬窺鞭影千里追風喚得回追風之馬見鞭影而便過千里教回卽回雪竇意賞他道若得俊流方可一撥便轉一喚便回若喚得回便鳴指三下且道是點破是撒沙

【和訓】機輪曾つて未だ轉ぜず、轉ずれば必らず兩頭に走る。機は乃ち千聖の靈機、輪は是れ從本已來諸人の命脈。見ずや、古人道く、千聖の靈機親み易からず、龍、龍子を生ず因循なること莫れ、趙州奪ひ得たり連城の璧、秦主相如總に身を喪すと。外道却つて是れ把得住し、作得主して、未だ嘗つて動著せず。何が故ぞ。他道ふ、有言を問はず、無言を問はずと。豈に是れ全機の處にあらずや。世尊風を看て帆を使ひ、病に應じて藥を與ふることを會す。所以に良久す、全機提起す。外道全體會し

去つて、機輪便ち阿轆轆地に轉ず。亦た轉じて有に向はず、亦た轉じて無に向はず、得失に落ちず、凡聖に拘らず、二邊一時に坐斷す。世尊纔かに良久。他便ち禮拜す。如今の人多く無に落在す、然らざれば有に落在す。只管有無の處に在つて兩頭に走る。雪竇道く、明鏡忽ち臺に臨む、當下に研醜を分つと。這箇曾つて動著せず、只だ箇の消息を消す。明鏡の臺に臨むが如くに相ひ似たり、萬象其の形質を逃るゝこと與はず。外道云く、世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむと。且らく道へ、是れ什麼の處か、是れ外道の入處。這裏に到つて、須らく是れ箇箇自ら參じ、自ら究め自ら悟り、自ら會して始めて得べし。便ち一切處に於て、行住坐臥、高低を問はず、一時に現成して、更に一絲毫を移易せず。纔かに計較を作して、一絲毫の道理有らば、即ち人を礙塞殺して、更に入作の分無けん。後面に、世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむと云ふを頌す。當下に忽然として研醜分つ。研醜分る迷雲開く、慈雲何れの處にか塵埃を生ぜんと。盡大地是れ世尊大慈大悲の門戸。儞若し透得せば、一担を消ぜじ。此れ亦た是れ放開底の門戸なり。見ずや、世尊三七日の中に於て、是くの如きの事を思惟す。我れ寧ろ說法せずとも、疾かに涅槃に入らんと。因つて思ふ良馬の鞭影を窺ふことを、千里の追風喚び得て回すと。追風の馬は鞭影を見て便ち千里を過ぐ、回さ數むれば即ち回る。雪竇の意、他を賞して道ふ、若し俊流を得ば、方に一撥すれば便ち轉じ、一喚すれば便ち回る可し。若し喚び得て回らば、指を鳴すこと三下せんと。且らく道へ。是れ點破か是れ撒沙か。

【提唱】 コレから圜悟の評ぢや。「機輪曾つて未だ轉ぜず」と、一機未發已前は、男とも女とも、善とも惡とも分らぬぞ。「轉ずれば必らず兩頭に走ると」、一度轉ずれば三細四相、有無、今時那邊と分れるぢや。「機は乃ち千聖の靈機」と、三世如來の第一機は人々少しも違はぬがサ、此處に止まるを、正位に證を取ると云ふぢや。靈機とは言說を離るゝ機ぢや。卽ち生不生なれば、全體現ずるぞ。「輪は是れ從本已來諸人の命脈」と、正位の上に生佛無い故に、度生悲願の上に、佛祖の命脈があるぞ。

輪は轉身自在ぢや。上、諸佛なく、下、衆生ない處から、無緣の大悲を起す、コレが諸佛の願輪ぢや。又た諸人、生死流轉の命脈ぢや。「見ずや、古人曰く」と、コレは雪竇ぢや。「祖英集」にある。「庭前柏樹子」の話の頌の一つぢや。「千聖の靈機親み易からず」と、柏樹子の話は、ナカ〳〵容易なことぢやない。自己の佛性ぢや。神も佛も寄り付くことはならぬ。「龍、龍子を生ず因循なること莫れ」と、龍の產む子は矢ッ張り龍ぢや。龍と云ふのは趙州、龍子と云ふは覺鐵觜のことぢやと見ても好い。必らず〳〵なれ〳〵に光陰を送るな。「趙州奪ひ得たり連城の璧」と、祖師西來意如何と問へば、庭前の柏樹子と答ふ。是れ連城の璧を奪ふたのぢや。サー煩惱の玉、菩提の玉、涅槃の玉も、趙州の一句で悉く落花微塵ぢや。「秦主相如總に身を喪すと」、コリヤ驚いて、睾丸が飛んだらう。「外道却つて是れ把得住し、作得主して、未だ嘗つて動著せず」と、外道、來問已前から、守一無適をシッカリ握り、主となつて動かない。「何が故ぞ。他道ふ、有言を問はず、無言を問はずと。豈に是れ全機の處にあらずや」と、ソレが何故ならばサ、有無を問はざる處が、取りも直さず全機獨立して居つた。「世尊、風を看て帆を使ひ、病に應じて藥を與ふることを會す。所以に良久す、全機提起す」、と世尊の方便ぢや。南天棒が云ふたら、虛火を炙火を以つて拔くが如く、外道の全機、如來の全機に依つて透脫するぞ。「外道、全體會し去つて、機輪便ち阿轆轆地に轉ず」と、丁度桶底の脫するやうに、スポンと脫けた。生悟りぢやない、一器の水を一器に移す通りぢや。「亦た轉じて有に向は

ず、亦た轉じて無に向はず、得失に落ちず、凡聖に拘らず、二邊一時に坐斷す。世尊縱かに良久。他便ち禮拜す」と、サー透脱してみりや、有ぢやの無ぢやのと云ふ對峙の二邊は、一時に取れて仕舞つて、有の時は普天普地有ぢや、無の時は普天普地無ぢや。得失、凡聖も亦た是くの如しぢや。ソレはサ、世尊良久、外道禮拜、ソレ其處ぢや。南天棒云く、コノ評は是れより已下未穩在ぢや、外道の悟處が、再び舊見に歸るに似て居るぞ。「如今の人多く無に落在す、然らざれば有に落在す。只管有無の處に在つて兩頭に走る」と、今時の人等はサ、我空の無に落在するか、又は讀誦の有に落在するぢや。併しコレには三つの義があるぞ。凡夫は妄執し、二乘の外道は修證し、大乘の菩薩は滯在するぢや。一方向きに見てはならぬ。「雪竇道く、明鏡忽ち臺に臨む、當下に妍醜を分つと。這箇曾つて動著せず、只だ箇の良久を消す。明鏡の臺に臨むが如くに相ひ似たり、萬象其の形質を逃るゝこと能はず」と、世尊の良久は、恰も明鏡の臺に臨むがやうなもので、少しも隱すことは出來ぬ。「外道云く、世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむと。且らく道へ、是れ什麼の處か、是れ外道の入處。這裏に到つて、須らく箇箇自ら參じ自ら究め、自ら悟り自ら會して始めて得べし」と、コリヤ自參自究するより外はない、付け智惠や貰ひ悟りではいかぬぞ。「便ち一切處に於て、行住坐臥、高低を問はず、一時に現成して、更に一絲毫を移易せず」と、是れ啞子が苦瓜を喫つた底ぢや。ソコに何の天堂の地獄の、迷の悟のと云ふ高下があらうぞ。ソンナとには論なく、ソレ其儘に現成ぢや。苦い、只だソレ切りぢや。「縱かに計較を作して、一絲毫の道理有らば、卽ち人を礙塞殺して、更に入作の分無けん」と、サー外道の入處が、如何の斯うのと云はうぞならば、ソレこそ何んの働きもなさぬぞ。「後面に、世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむと云ふを頌す。當下に忽然として妍醜を分つ。妍醜分る迷雲開く、慈雲何れの處にか塵埃を生ぜんと。盡大地是れ世尊大慈大悲の門戸」と、後に「迷雲開く」と云ふがサ、開くの閉ぢるのと云ふことが、何れにあるぞ。盡大地是れ大慈門ではないか。「爾若し透得せば、一揑を消ぜじ。此れ亦た是れ放開底の門戸なり。見ずや、世尊三七日の中に於て、是くの如きの事を思惟す。我れ寧ろ說法せずとも、疾かに涅槃に入らんと」、諸人、透得しさへすりや、コノ則なぞ一ト揑がものもないぞ。元來如來の門戸は閉ぢてはないぞ。銘々の門も閉ぢてはないぞ。昔より今に至るまで開け通しぢや、四方八面遮欄なしぢや。天神七代地神五代より今日まで、いつ閉ぢたことがあるか。如來も始め出山せられ時に、悟るべき法もなく、度すべき衆生もない、我れ疾かに良久の槃地に入らんと云はれた。是れ良久の端的ぢや。人々骨折つて看るが好い。此の事は「法華經」の方便品にある。「因つて思ふ良馬の鞭影を窺ふことを、千里の追風喚び得て回すと。追風の馬は鞭影を見て便ち千里を過ぐ、回さ敎むれば卽ち回る」と、斯う云ふ良馬はナカ〳〵得難いものぞ。喚んで回す、ソノ回さしむる處はドウぢや、實に自由自在ぢやらうがサ。「雪竇の意、他を賞して道ふ、若し俊流を得ば、方に一撥すれば

便ち轉じ、一喚すれば便ち回る可し」と、コレより已下の評は衲は取らぬ、不是々々。コレでは雪竇は見えるものぢやない。「若し喚び得て回らば、便ち指を鳴すこと三下せんと」、コノ評は斯うではないぞ。併しサ、斯う云はねばなるまいか。此處には妙處があるが、評は一隻眼を失したぞ。「且らく道へ、是れ點破か、是れ撒沙か」と「點破」とは掃蕩か、「撒沙」とは建立か。サー如何ぢや。幸に雪竇末後の句有り、人々眼を着けて始めて得べしぢや。

〔百一病〕一大增損すれば百一病生じ、四大（地水火風）增損すれば四百四病生ずるなり。紀摩經方便品に云く、「是れ身、災を爲す、百一の病惱」と。〔其の口をタハツテ飯を喰へ〕タハツテは塞ぐと云ふこと。〔天衣の義懷和尙〕雪竇重顯の法嗣。〔色界の四禪〕色界は三界の一、欲界の上にある天界の名。中に初禪天、二禪天、三禪天、四禪天を含む。〔無色界の四空〕無色界も三界の一、三界の最上位に在る天界なり。是れに、空無邊處、識無邊處、無所有處、非想非非想處の四處あり。〔五天〕五天竺の略稱。即ち東天竺、西天竺、中天竺、南天竺、北天竺なり。〔鄧鄧覺〕鄧鄧慧覺禪師、汾陽善昭の法嗣。勅號を廣照禪師と云ふ。〔羅喉羅〕釋迦の一子。〔守一無適〕一を守つて適く無きを云ふ。〔三細四相〕三細は起信論の所說、根本無明の相狀を分明にせしもの。枝末無明の六麁に對して三細と云ふ。一に無明業相、二に能見相、三に境界相なり。四相も起信論の所說、生滅の四相あり。即ち生相、住相、異相、滅相なり。〔疊鐵觜〕趙州の法嗣。〔なれ〳〵に光陰を送るな〕なれ〳〵は等閑と云ふこと。

第六十六則　巖頭什麼處來

【巖頭什麼處來】

垂示云、當機覿面提陷虎之機、正按傍提布擒賊之畧、明合暗合雙放雙收、解弄死蛇還他作者。

【和讀】垂示に曰く、當機覿面、陷虎の機を提ぐ。正按傍提、擒賊の畧を布く。明合暗合、雙放雙收。死蛇を弄することを解することは、他の作者に還す。

【提唱】第六十六則、「巖頭什麼處來」と、コノ則は、宗門向上の一ノ事、最も知音を責むることを明すのぢや。

「垂示に云く、當機覿面、陷虎の機を提ぐ」と、吹毛劍を拔き放さぬ前に、先の人の首をチョン切る、第十一則の「黃檗酒槽漢」のやうぢや。ソノ素早さ、實に間髮を容れぬ。「正按傍提、擒賊の畧を布く」と、眞向正面、卽ち當陽から斬ると、橫ッ面から卽ち斜視して斬るのとある。「正按」は正兵、關鎖ぢや。「傍提」は、奇兵、方便ぢや。斯うして皆な悟りの滓を拔くのぢや。是等は悉く枕詞のや

うなものぢや。「明合暗合、雙放雙收」と、コレは其の滓を抜く働きぢや。放行もし把住もし、主と賓と、放つときんば一時に放ちサ、收むるときんば一時に收める。「死蛇を弄することを解することは、他の作者に還す」と、サー死蛇を弄する手脚は如何ぢや。本則に就いて本分の作家の活作畧を看よ。

擧巖頭問僧什麼處來 ○未開口時納敗缺了也○穿過髑髏○要知來處也不難 **僧云西京來** ○果然一個小賊 **頭云黃巢過後還收得劒麼** ○平生不曾做草賊○不懼頭落○便恁麼問好大膽 **僧云收得** ○敗也○未識轉身處○茅廣漢○如麻似粟 **巖頭引頸近前云因** ○也須識機宜始得○陷虎之機○是什麼心行 **僧云師頭落也** ○只見錐頭利不見鑿頭方○識甚好惡○著也 **巖頭呵呵大笑** ○盡天下衲僧不奈何○欺殺天下人○尋這老漢頭落處不得 **僧後到雪峯** ○依前顢頇懞懂○這僧往往十分納敗缺去 **峯問什麼處來** ○不可不說來處○也要勘過 **僧云巖頭來** ○果然納敗缺

峯云有何言句 ○擧得不免喫棒 **僧擧前話** ○便好趕出 **雪峯打三十棒趕出** ○雖然斬釘截鐵因甚只打三十棒○拄杖子也未到折在○且未是本分○何故朝打三千暮打八百○若不是同參爭辨端的○雖然如是且道雪峯巖頭落在什麼處

【和訓】擧す。巖頭、僧に問ふ、什麼の處よりか來る。（○未だ口を開かざる時、敗缺を納れ了れり。○髑髏を穿過す。○來。處を知らんと要すれども也た難からず。）僧云く西京より來る。（○果然として一個の小賊。）頭云く、黃巢過ぎて後、還つて劒を收得す麼。（○平生曾つて草賊と做らず。○頭の落ちんことを懼れず。○便ち恁麼に問ふ、好大膽。）僧云く、收得す。（○敗也。○未だ轉身の處を識らず。○茅廣の漢。○麻の如く粟に似たり。）巖頭、頸を引べて近前して云く。因。（○也た須らく機宜を識つて始めて得べし。○陷虎の機。○是れ什麼の心行ぞ。）僧云く、師の頭落ちぬ。（○只だ錐頭の利なるを見て、鑿頭の方なることを見ず。○甚んの好惡をか識らん。○著也。）巖頭呵呵大笑す。（○盡天下の衲僧、奈何ともせず。○天下の人を欺殺す。○這の老漢の頭の落處を尋ぬるに得ず。）僧後に雪峯に到る。（○依前として顢頇懞懂。○這の僧往往に十分に敗缺を納れ去る。）峯問ふ、什麼の處よりか來る。（○來處を說かずんばある可からず。○也た勘過せんことを要す。）僧云く、巖頭より來る。（○果然として敗缺を納る。）峯云く、何んの言句か有りし。（○擧し得て免れず棒を喫せんことを。）僧、前話を擧す。（○便ち好し、趕ひ出すに。）雪峯打つこと三十棒して趕ひ出す。（○然も斬釘截鐵なりと雖も、甚んに因つてか只だ打つこと三十棒。○拄杖子也た未だ折るに到らざること在り。○且つ未だ是れ本分にあらず。○何が故ぞ、朝打三千暮打八百。○若し是れ同參にあらずんば、爭でか端的を辨ぜん。○然も是くの如くなりと雖も、且らく道へ、雪峯、巖頭、什麼の處にか落在する。）

【提唱】

本則　コレから本則ぢや。

「擧す。巌頭、僧に問ふ、什麼の處よりか來る」と、巌頭が、或る坊サマに向つて、貴公は何處から來せたかと斬りかけた。

「僧云く、西京より來る」と、長安から參りましたと。コノ坊サマはウカと巌頭の鉤に掛つた。巌頭は早や此奴、役に立たぬ坊主と見拔いた。「西京」は西京と云ふのぢやが、西京と讀ませるぢや。

「頭云く、黄巣過ぎて後、還つて劒を收得す麼」と、コノ時は丁度、黄巣が名劍を得て、反逆を思ひ立つた評判の眞ッ最中ぢやつたから、ソコデ巌頭が、都から來たと云ふなら、黄巣の劒を持つて來たか如何ぢやと問ふた。コノ黄巣のことは、「唐書」の黄巣傳に云ふてあるのに、「曹州、寃勾の人なり。通鑑に云ふ（是れは通鑑の意を取つたのぢや）、唐の僖宗帝の乾符二年、黄巣、千餘衆を聚め王仙芝に應ず。巣、少うして仙芝と與に鹽を販つて業と爲す。巣、騎射を善くし、任俠を喜び、書傳に涉る、屢々進士に擧すれども及第せず。遂に盜と爲る。民、重斂に困しむ者爭ふて歸す。衆、數萬に至る。五年、招討使曾元祐、仙芝を破る。巣、方に亳州を攻むと雖も、未だ降らず。齊克讓が師、仙芝が餘衆、之れに歸す。巣を推して主と爲し、衝天大將軍と號す。廣明元年、帝位に卽き、國を太齊と號し、金統と改元す。中和三年三月、李克用、黄巣を破つて長安を復す」と。「花抄」にも、「黄巣は五代の唐の時なり。天より劒を降す。酩に、天、黄巣に賜ふの四字有り。此の劒を以つて天下を奪ふ云々」とある。コノ騒動中ぢやから、斯う問ふたものと見える。サー義經が死んだ後に、友切丸は如何したかサ。

「僧云く、收得す」と、コノ答は如何ぢや。エー此の役立たず奴が。

「巌頭、頸を引べて近前して云く、囮」と、ソレなら、サー切つて看よと、巌頭が頸を引べた。コノ坊主、埒の明かぬ奴ぢやが、弄してみた。是れ「死蛇を弄することを解す」ぢや。コノ「囮」は容易ぢやないぞ。權も有り實も有る。囮とは、前にも云ふたが、力を出す貌ぢや。「傳燈錄」には、「師、頸を引べて刄を受くる聲を爲す」とあつて、囮の字はない。

「僧云く、師の頭落ちぬ」と、大馬鹿者め、何んと云ふザマぢや。此處で呵々大笑すれば好いにサ。コノ南天棒なら高笑ひするぞ。

「巌頭呵呵大笑す」と、ア、能く斬つた、斬り當てたぞと弄した。此点に大悲の籠つて居るのを看て取れ。

「僧後に雪峯に到る」と、ソレから此の僧が偏參して、雪峯の處へ行つたと見える。

「峯問ふ、什麼の處よりか來る」と、雪峯が又たいきなり、何處から來せたと問ふた。

「僧云く、巌頭より來る」と、巌頭の處から參りました。

「峯云く、何んの言句か有りし」と、巖頭が何んぞ云ふたか。

「僧、前話を擧す」と、ソコデ前話を擧したが、コノ坊サマ、巖頭の大笑を見て、我が働き了せたを、巖頭が肯ふたと思ふたものぢやから、餘り拍子にかゝつて、雪峯の處まで是れを擔ぎ込んだ。

「雪峯、打つこと三十棒して趕ひ出す」と、コ、の雪峯の働きは、ドウも〳〵。コノ坊サマも雪峯の處へ、態々打たれに來たやうなものぢや。サー諸人、巖頭の大笑と、雪峯の棒と、同か別か。サー道へ〳〵。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「擧巖頭問僧什麼處來」――「未だ口を開かざる時、敗缺を納れ了れり」、コノ僧、未だ口を開かざる前に、敗缺は知れて居る。「髑髏を穿過す」、コノ僧の髑髏は、此處に來ぬ先から、巖頭に眞ッ二つにされて仕舞つた。「來處を知らんと要すれども也た難からず」、來處を問ふまでもない、チャンと知れて居る。大抵は足取りでも分るぢや。

「僧云西京來」――「果然として一個の小賊」、ソリャこそ此の盜み喰ひ奴。併しタカがセヽリ盜坊ぢや、トテモ大盜坊ぢやない。

「頭云黃巢過後還收得劍麼」――「平生曾つて草賊と做らず」、同じ盜坊でも、巖頭の奴は大盜坊ぢや。「頭の落ちんことを懼れず」、命知らずと云ふものぢや。併し是れは平人ぢや出來ぬぞ。此處に爲人の處が充分有るのぢや。錯るまいぞ〳〵。「便ち恁麼に問ふ、好大膽」、コリャ恐しい膽ッ玉ぢやナ、肝に毛の生えた奴ぢや。

「僧云收得」――「敗也」、大いに敗闕し了れりぢや。自分に持つて居る名劍を、早や引ッ剝がれた。埒もない坊サマぢや。「未だ轉身の處を識らず」、語に隨つて計り居つて、得働かぬとは、情けない奴ぢや。「茅廣の漢」、「麻の如く粟に似たり」、コノ僧は、在鄕者の無分曉ぢや。「茅廣」とはサ、荒故と云ふやうなもので、實なくして、規に拘らぬ義ぢや。早く云へば、偏參に身が入らぬと云ふことぢや。今時の者は大抵茅廣の漢ぢや。

「巖頭引頸近前云囚」――「也た須らく機宜を識つて始めて得べし」、學者の機宜を辨ずることは、作家でなくてはならぬ。「陷虎の機」、恐しい手管ぢや。ウカと乘らうものなら命はないぞ。「是れ什麼の心行ぞ」、コリャ何んたることぢやナ。あんまり技倆が拙しいぞ。

「僧云師頭落也」――「只だ錐頭の利なるを見て、鑿頭の方なることを見ず」、コノ僧、己が利巧立してからに、巖頭に齒の立たぬことを知らぬ。機轉の利かぬ奴ぢや。「甚んの好惡をか識らん」、西も知らなけりや東も知らぬ。「著也」、ヤー切り付けたぞと。コリャ弄したのぢや。

「巖頭呵呵大笑」――「盡天下の衲僧、奈何ともせず」、サー此の笑つた端的は、天下の衲僧も如何ともし難い。コリャ這の僧をのみ笑つたと見ると違ふぞ。實にハヤ、棒を與へずに笑ふたは、「天

下の人を欺殺す」、天下の人を馬鹿にしたのぢや。「這の老漢の頭の落處を尋ぬるに得ず」、サテ巖頭の頭は落ちたと云ふが、何處に在るか、尋ねても尋ね當てぬ。

「僧後到雪峯」――「依前として顢頇懞懂」、コノ坊サマは、いつもヌラリッとした箆棒ぢやもの、雪峯の處へ行つたとて、別に新しい働きは出來まいに、自分は出來る積りで出掛けたは圖々しい。今でもコンナ禪學者が多いぞ、眉唾な話しぢや。「這の僧往往に十分に敗缺を納れ去る」、コノ坊サマも坐禪したのぢらうか、何處へ行つても、チョコリ〳〵と遣られて仕舞ふ。

「峯問什麼處來」――「來處を說かずんばある可からず」、サテ有り底に道へ。「也た勘過せんことを要す」、酸いか甘いか、コレを探るのが善知識の役目ぢや。

「僧云巖頭來」――「果然として敗缺を納る」、案の如く、ソレ大きな出損ひをした。

「峯云有何言句」――「擧し得て免れず棒を喫せんことを」、默つて居れば好いが、ウッカリ喋舌らうものなら、棒を喫ふべい、見ろよ。

「僧擧前話」――「便ち好し、趕ひ出すに」、一口も口を開かせぬ前に、コンナ奴はさっさと打き出して仕舞へ。

「雪峯打三十棒趕出」――「然も斬釘截鐵なりと雖も、甚んに因つてか只だ打つこと三十棒」、コリヤひどいものぢやなあ。併しサ、粉微塵にしても好いのに、何故三十棒ぢや。三十棒ばかりでは足らぬ〳〵。「拄杖子也た未だ折るに到らざること在り」、何故マット打たぬ。打つて〳〵、棒の折れる迄打ちのめせ。「且つ未だ是れ本分にあらず」、「何が故ぞ、朝打三千暮打八百」、ソレでも未だ〳〵思ふ存分ぢやないのに、三十棒ばかりでドウするぞ。朝打三千、暮打八百でも猶ほ足りぬ。實にハヤ、アキのない奴ぢや。「若し是れ同參にあらずんば、爭でか端的を辨ぜん」、巖頭と雪峯とは、德山下の同參なりやこそ、呵呵大笑の端的を知るぢや。「然も是くの如くなりと雖も、且らく道へ、雪峯、巖頭、什麼の處にか落在する」、雪峯の打つた處、巖頭の大笑した處、ソノ穩坐地は何處ぢやと思ふ。憎うて打つたぢやない。可笑しうて笑ふたぢやないぞ。ソノ落處を知るや。サテ諸人看よ。

大凡挑囊負鉢撥草瞻風也須是具行脚眼始得這僧眼似流星也被巖頭勘破了一串穿却當時若是箇漢或殺或活擧著便用這僧迂郎當却道收得似恁麼行脚閻羅老子問爾索飯錢在知他踏破多少草鞋直到雪峯當時若有些子眼筋便解瞥地去豈不快哉這箇因緣有節角誦訛處此事雖然無得失得失甚大雖然無揀擇到這裏却要具眼揀擇看他龍牙行脚時致箇問端問德山學人仗鋒鋩擬取師頭時如何德山引頸近前云囫圇龍牙云師頭落也山便歸方丈牙後擧似洞山洞山云德山當時道什麼牙云他無語洞山云佗無語則且置借我德山落底頭來看牙於言下大悟遂焚香遙望德山禮拜懺悔有僧傳到德山處德山云洞

山老漢不識好惡這漢死來多少時也救得有什麼用處這箇公案與龍牙底一般德山歸方丈則暗中最妙巖頭大笑他笑中有毒若有人辨得天下横行這僧當時若辨得出千古之下免得檢責於巖頭門下已是一場蹉過看他雪峯老人是同參便知落處也不與他說破只打三十棒趕出院可以光前絶後這箇是拈作家衲僧鼻孔爲人底手段更不與他如之若何教他自悟去本分宗師爲人有時籠罩不教伊出頭有時放令死郎當地却須有出身處大小大巖頭雪峯到被箇喫飯禪和勘破只如巖頭道黄巢過後還收得劒麼諸人且道這裏合下得什麼語免得他笑又免得雪峯行棒趕出這裏諸訛若不曾親證親悟縱使口頭快利至究竟透脫生死不得山僧尋常教人覷這機關轉處若擬議則遠之遠矣不見投子問鹽平僧云黄巢過後收得劒麼僧以手指地投子云三十年弄馬騎今日却被驢子撲看這僧也不妨是箇作家也不道收得也不道收不得與西京僧如隔海在眞如拈云他古人一箇做頭一箇做尾定也雪竇頌云

【和問】　大凡そ囊を挑げ鉢を負ふて、撥草瞻風せんには、也た須らく是れ行脚の眼を具して始めて得べし。這の僧、眼、流星に似たるも、也た巖頭に勘破し了られて、一串に穿却せらる。當時若し是れ箇の漢ならば、或は殺或は活、舉著せば便ち用ゐん。這の僧、逈郎當にして却つて道ふ、收得すと。恁麼の行脚に似ば、闍羅老子、倆に問ふて、飯錢を索ること在らん。

知んぬ、他、多少の草鞋を踏破して、直に雪峯に到る。當時若し些子の眼筋有つて、便ち瞥地に去ることを解せば、豈に快ならざらん哉。這箇の因緣、節角話訛の處有り。此の事、然も得失無しと雖も、得失甚だ大なり。然も揀擇無しと雖も、這裏に到つて、却つて眼を具して、揀擇せんことを要す。看よ、他の龍牙行脚の時、箇の問端を致して德山に問ふ、學人鐵鏘の劒に仗つて、師の頭を取らんと擬する時如何。德山、瓢を引べて近前して云く、因る。龍牙云く、師の頭落ちぬ。山便ち方丈に歸る。牙後に洞山に擧似す。洞山云く、德山當時什麼とか道ひし。牙云く、他無語。洞山云く、佗、語無きことは且らく置く、我に德山落つる底の頭を借し來れ、看ん。牙、言下に於て大悟。遂に香を焚いて、遙かに德山を望んで禮拜、懺悔す。僧有つて傳へて德山の處に到る。德山云く、洞山老漢好惡を識らず、這の漢死し來ること多少時ぞ。也た救ひ得るとも、什麼の用處か有らんと。這箇の公案、龍牙底と一般なり。德山、方丈に歸る。則ち暗中最も妙なり。巖頭大いに笑ふ、他の笑中に毒有り。若し人有つて辨得せば、天下に横行せん。這の僧當時若し辨得出せば、千古の下、檢責を免れ得ん。巖頭門下に於て已に是れ一場の蹉過。看よ、他の雪峯老人、是れ同參にして便ち落處を知る。也た他の爲に說破せず、只だ打つこと三十棒して院を趕ひ出す。以つて光前絶後なる可し。這箇は是れ作家、衲僧の鼻孔を拈じて、人の爲にする底の手段なり、更に他の與に如之若何ともせず、他をして自ら悟り去らしむ。本分の宗師、人の爲にするに、有る時は籠罩して、伊をして出頭せしめず。有る時は放つて死郎當地ならしめ、却つて須らく出身の處有るべし。大小大の巖頭、雪峯、箇の喫飯の禪和に勘破せらるるに致る。只だ巖頭、黄巢過ぎて後、還つて劒を收得す麼と道ふが如きんば、諸人且らく道へ、這裏合に什麼の語を下し得てか、他の笑を免れ得ん。又た雪峯の棒を行して、趕出することを免れ得ん。這裏訛說なり。若し曾つて親證親悟せずんば、縱使ひ口頭快利にして、究竟に至るとも、生死を透脫すること得じ。山僧尋常、人をして這の機關の轉處を覷せしむ。若し擬議すれば遠うして遠し。見ずや、投子、鹽平の僧に問ふて云く、黄巢過ぎて後ち、劒を收得す麼。僧、手を以つて地を指す。投子云く、三十年馬騎を弄す、今日却つて驢子に撲せらると。看よ、這の僧、也た妨げず是れ箇の作家なることを。也た收得すと道はず、也た收不得と道はず。西京の僧と、海を隔つるが如くなること在り。眞如拈じて云く、他の古人、一箇は頭を做し、一箇は尾を做すこと定れりと。雪竇頌して云く。

【提唱】 コレから圜悟の評ぢや。「大凡そ囊を挑げ鉢を負ふて、撥草瞻風せんには、也た須らく是れ行脚の眼を具して始めて得べし」と、サー今も昔も同じぢや、行脚するには行脚する眼を具して居らねばならぬぞ。「這の僧、眼、流星に似たるも、也た巖頭に勘破し了られて、一串に穿却せらる」と、コノ坊サマもサ、一ッかど眼が開いたと思ふてケッカルが、巖頭に鼻孔を穿却せられて、能く〳〵見りや、ナンのこッちや、コノ坊主の眼は、線香花火の火に似た位なものぢや。「當時若し是れ箇の漢ならば、或は殺或は活、舉著せば便ち用ゐん。這の僧、迂郎當にして却つて道ふ、收得すと。恁麼の行脚に似ば、閻羅老子、倆に問ふて、飯錢を索ること在らん」と、コノ坊サマがサ、具眼の漢ぢやつたら、巖頭の所問の下で、巖頭と組んづ轉んづして、商量したであらうのに、コノ坊サマは、無分曉なドジクジぢやから、却つて語に隨つて解を生じてからに、「收得す」なぞと云ふたが、若しッンナことで日を過したら、閻魔王に飯代を請求されるぞ。コノ坊主ばかりぢやない、スタ〳〵行脚の坊主等は皆な斯うぢや。「他、多少の草鞋を踏破して、直に雪峰に到る。當時若し些子の眼筋有つて、便ち瞥地に去ることを解せば、豈に快ならざらん哉」と、此奴、少しばかり徧參して、ソレデもう濟んだなぞと思ふてからに、雪峰の處へ出て來せたがサ、彼の巖頭が、頸を引べた處で、目端が利いて、蹉過了也と云はうぞならば、面白からうのに。「這箇の因緣、節角諸訛の處有り」と、コノ則の因緣、入り組みの處は、コヽから起つたのぢや。「此の事、然も得失無しと雖も、得失甚だ大なり。然も揀擇無しと雖も、這裏に到つて、却つて眼を具して、揀擇せんことを要す」と、コノ二十五字には甚だ要妙有るぞ、能く看よ。自己に於て得失は無いやうぢがサ、ヤッパリ得失甚大ぢや。又た差別の無い處に淺深があるから、揀擇が必要ぢや。「看よ。他の龍牙行脚の時に、箇の問端を致して德山に問ふ、學人鍬鋤の劒に仗つて、師の頭を取らんと擬する時如何。德山、頸を引べて近前して云く、囫。龍牙云く、師の頭落ちぬ。山便ち方丈に歸る」と、龍牙行脚の時、德山と商量した。ソノ時德山は頸を引べて、囫と云ふや、龍牙は、師の頭落ちぬと云ふた。スルト德山は、默つてスット方丈に入つた。サー此の時、龍牙、股は切れ〳〵、腰はスダ〳〵になつたも知らないで、自分の方が勝つたことゝ思ひ込んで、ソレから又た洞山の處へ行つて擧似した。「牙、後に洞山に擧似す。洞山云く、德山當時什麼とか道ひし。牙云く、他無語」と、洞山は龍牙に、德山は何んと云ふたかと問ふと、龍牙は、德山は無語であつた、大方行き詰つて、語が無いのぢやらうと思ふと云ふた。處が洞山云くぢや。「洞山云く、他、語無きことは且らく置く、我に德山落つる底の頭を借し來れ、看ん。牙、言下に於て大悟。遂に香を焚いて、遙かに德山を望んで禮拜懺悔す」と、ソコデ洞山、舌を振ふて、汝が知つたことではないと一喝してサ、我に德山の落ちた首を持つて來い、看んト。コリャ洞山、好一拶ぢや。コノ一拶で以てからに、龍牙はグワラリッと悟つた。香を焚いて遙かに德山を望んで恩を謝したと云ふことぢや。「僧有つて傳へて德山の處に到る。德山云く、洞山老漢好惡

を識らず、這の漢死し來ること多少時ぞ。也た救ひ得るとも、什麼の用處か有らんと」、ソノ後に他の坊サマが德山の處へ遣つて來て、前にあつたことを話すと、德山の云ふのに、洞山老漢も打ッ捨つて置けば好いのに、餘計なオセッカイをする和尚ではある。龍牙なぞは、トックに死んだ奴ぢや。ソレを救ふたとて何んの役に立たうかい、死馬に針ぢやと。サー是等にもナカ〳〵有難い處があるぞ、篤と看よ。「這箇の公案龍牙底と一般なり。德山、方丈に歸る、則ち暗中最も妙なり」と、今日の本則とコノ龍牙の公案とは同一ぢや。德山が默つて方丈に歸つた處、實に妙ぢや。雪峯にも巖頭にも、何れもコノ機はあるぞ。「巖頭大に笑ふ、他の笑中に毒有り。若し人有つて辨得せば、天下に横行せん」と、巖頭は大笑したがサ、コノ笑は尋常の笑ぢやない、スサマジイ笑ぢや。觸るゝ者は皆な死ぬるぞ。併しサ、諸人、此の大笑の處を篤と呑み込み得てあらうぞならば、實にハヤ、天地に横行せんで、ソレこそ二十五道場は愚か、幾百の牢關をも打ち破つて粉微塵ぢや。「這の僧當時若し辨得出せば、千古の下、檢責を免れ得ん。巖頭門下に於て、已に是れ一場の蹉過」と、コノ坊サマも、巖頭の手元を見拔いてあらうぞならば、差配にも遇はいで濟まうのにサ、無眼子な奴ぢやから、大しくじりを遣らかした。「看よ、他の雪峯老人、是れ同參にして便ち落處を知る。也た他の與に說破せず、只だ打つこと三十棒して院を趕ひ出す。以つて光前絶後なる可し。這箇は是れ作家、衲僧の鼻孔を拈じて、人の爲にする底の手段なり。更に他の與に如之若何ともせず、他をして自ら悟り去らしむ」と、雪峯はチャンと知つて居るがサ、坊主に點滴も施さず、只だ三十棒打ち喫はして逐ひ出した。實にスサマジイぢやないか。コノ雪峯の三十棒は、コノ坊主を眞物にしたい爲めの手段ぢや。ぢやからウンダともツブレタとも云はずに、三十棒打ちノメした。是れ自ら悟らしめたい爲めぢや。コヽの「以つて光前絶後なる可し」は、「光前絶後なりと謂つ可し」とした方が好い。「本分の宗師、人の爲にするに、有る時は籠罩して、伊をして出頭せしめず。有る時は放つて、死郎當地ならしめ、却つて須らく出身の處有るべし」と、師家と云ふものは、斯うしたものぢや。金網を冠せ〳〵サ、動きの取れぬやうにして悟らせることもある。ソレから又た、ダラリとした、馬鹿を云はせて、捨てゝ置いて、自ら肯はせることもあるぢや。「大小大の巖頭、雪峯、箇の喫飯の禪和に勘破せらるるに到る」と、大小大の巖頭も雪峯も、コノ喰ひ拔けの禪坊主に勘破せられたとサ。元來此の僧に勘破の力はないが、コリャ圜悟の腕前で斯く判したぞ。「只だ巖頭、黃巢過ぎて後、劒を收得す麼と道ふが如きんば、諸人且らく道へ、這裏合に什麼の語を下し得てか、他の笑を免れ得ん。又た雪峯の棒を行して、趕出することを免れ得ん。這裏誦訛なり」と、サー此の時、何んと云ふて語を下したら、巖頭に笑はれたり、雪峯に打たれずに濟むか。「杜撰の長老譫語すること莫れ」、又た、「我は要せず這般の閑家具」と云ふたら如何ぢや。「若し曾つて親證親悟せずんば、縱使ひ口頭快利にして究竟に至るとも、生死を透脫すること得じ」と、全く自己の胸襟より流出するものでないならば、縱令ひ

辯口が傑れて、口先で利巧にマギラかして置いても、生死を透脱することは出來ぬぞ。「山僧尋常、人をして這の機關の轉處を覷せしむ」と、ソレぢやから衲は、平素皆んなに骨折れ〳〵とせちがらのぢや。どうか轉身自在を得させたいと思ふからぢや。「若し擬議すれば遠うして遠し」と、若しトジクジしやうぞならば、白雲萬里ぢや。「見ずや、投子、鹽平の僧に問ふて云く、黄巢過ぎて後、劒を收得す麼」と、投子が、鹽平郡の疎山二世の守證禪師に、黄巢の劒を問ふたと見える。「鹽」は延の誤りぢやとも云ふ。「僧、手を以つて地を指す」と、コノ僧は利巧な奴ぢやあるが、コリャ機關の働きぢや。只だ是れ半月程ぢや。コレを、盡大地那一劒と見たと云ふなら、とゞかぬ〳〵。若しサウ見た奴ならナゼ打ち殺さぬ。「投子云く、三十年馬騎を弄す、今日却つて驢子に撲せらると」、ソコデ投子が、三十年來馬に乘り馴れたが、今日却つてセンダラ馬に蹴られたわいと。南天棒の眼から見ると、コノ僧は此處に到つて、喪身失命したぞ、知らぬか。「傳燈」には、「二十年馬技を學び、昨日驢に撲せらる」となつて居る。意に變りはない。「看よ、這の僧、也た妨げず作家なることを。也た收得すと道はず、也た收不得と道はず。西京の僧と、海を隔つるが如くなること在り」と、コノ僧、西京の僧とは大分隔りがあるがサ、衲に云はせると、未だ〳〵眞の作家ぢやないぞ。「眞如拈じて云く、他の古人、一箇は頭を做し、一箇は尾を做すこと定れりと。雪竇頌して云く」と、眞如の慕喆が云ふのは、巖頭の奴は頭を造りサ、雪峰の奴は尾を造りサ、二人して一つの活龍を造つたと。サー雪竇の頌を看よ。

黄巢過後曾收劒　○孟八郎漢有什麼用處○只是錫刀子一口　大笑還應作者知　○一子親得○能有幾箇○不是渠儂爭得自由　三十山藤且輕恕　○同條生同條死○朝三千暮八百○東家人死西家人助哀○却與救得活　得便宜是落便宜　○據欵結案○悔不慎當初○也有些子

【和讃】黄巢過ぎて後ち曾つて劒を收む。（○孟八郎の漢什麼の用處か有らん。○只だ是れ錫刀子一口。）大笑は還つて應に作者知るべし。（○一子親しく得たり。○能く幾箇か有る。○是れ渠儂にあらずんば、爭でか自由を得ん。）三十山藤且らく輕恕す。（○同條生、同條死。○朝三千、暮八百。○東家の人死すれば、西家の人哀を助く。○却つて與に救ひ得て活せしむ。）便宜を得るは是れ便宜に落つ。（○欵に據つて案に結す。○悔らくは當初を慎まざりしことを。○也た些子有り。）

【提唱】

頌　コレから雪竇の頌ぢや。

「黄巢過ぎて後ち曾つて劒を收む」と、巖頭が僧に向つて黄巢の劒を收めたかと問ふた。サー手

前の五塵六慾を殺し盡せば、跡は自己の名劍ばかりぢや、コノ僧も左樣かサ。

「大笑は還つて應に作者知るべし」と、巌頭の大笑は庸流の及ばぬ處ぢや。コレは知音でなければ知らぬ。

「三十山藤且らく輕恕す」と、雪峰の三十棒は、猶ほ是れ一著を放過した。手ヌルイなあ。併しコリヤ負けて置いたのぢや。

「便宜を得るは是れ便宜に落つ」と、コノ僧は、仕おゝせたと思ふてからに、大いにカブつた。思ふと、思ふ穴へ落ちる、得ざれば得ざるに落ちる。大笑も三十棒も、是れ好便宜ぢやがサ、不會ぢやから棒を戴くは、是れ又た便宜に落つるぢや。南天棒は云ふ、玆に仔細有り、雪竇の語は、塗毒鼓の聲々、人を殺すが如しぢや。

著語 コレから圜悟の著語ぢや。

「黄巣過後曾收劍」――「孟八郎の漢什麼の用處か有らん」、ガラクタ者の破落戸め、汝れ何んの働きもない癖に、一ッかど器量人のやうな面をする。「只だ是れ錫刀子一口」、ナマクラ刀ぢや。鉛の一腰、何んの役に立たうかい。

「大笑還應作者知」――「一子親しく得たり」、巌頭の大笑した處は、知り人はなかつたが、雪峰だけは知つて居る。「能く幾く箇か有る」、サー雪峰のやうに、コノ笑を知る人は幾人あらうぞ。雪竇は知つてだらう。「是れ渠儂にあらずんば、爭でか自由を得ん」、巌頭でなければ此の大笑は出來ぬ。又たソコを見拔いて打つたのも、雪峰でなければ出來ぬ。コノ二人を外にして、誰れか斯くの如き自由が有らうぞ。

「三十山藤且輕恕」――「同條生、同條死」、巌頭と雪峰とは知音底ぢやから、擧著すれば直に落處を知るぢや。「朝三千、暮八百」、若し眞箇に打つならば、三千や八百でも未だ足りぬぞ。「東家の人死すれば、西家の人哀を助く」、圜悟が眼から見れば、折角人にしてやらうと笑ふた巌頭も、役立たぬ坊主がソノ笑を殺して仕舞つたのを不愍に思ふて、コレを働かさうと三十棒喫はせた雪峰も、同じ泣き面の寄合ぢや。「却つて與に救ひ得て活せしむ」、知音同士で此の僧を活かさうとしてみた。

「得便宜是落便宜」――「欵に據つて案に結す」、僧のコノ失策を見拔いて、雪竇が頌したぞ。「悔ゆらくは當初を愼まざりしことを」、初行脚の時から骨を折らなんだから、今度面目を失ふた。「也た些子有り」、サー此の僧の何處に取る處が有るか。コリヤ弄したのぢや。

黄巣過後曾收劍大笑還應作者知雪竇便頌這僧與巌頭大笑處這箇些子天下人摸索不著且道他笑箇什麼須是作家方知這笑中有權有實有照有用有殺有活三十山藤且輕恕頌這僧後到雪峯面前這僧依舊莽鹵峰便據令而行打三十棒趕出且道爲什麼却如此儞

要盡情會這話麼、得便宜是落便宜

【和訓】黃巢過ぎて後ち曾つて劔を收む、大笑は還つて應に作者知るべしと。雪竇便ち、這の僧と巖頭大笑の處とを頌す。這箇の些子、天下の人摸索不著。且らく道へ、他、箇の什麼をか笑ふ。須らく是れ作家にして方に、這の笑中に權有り實有り、照有り用有り、殺有り活有ることを知るべし。三十山藤且らく輕恕すと。這の僧、後に雪峯の面前に到つて、這の僧、舊に依つて莽鹵。峯便ち令に據つて行して、打つこと三十棒して趕ひ出すことを頌す。且らく道へ、什麼と爲てか却つて此くの如くなる。儞、情を盡して這の話を會せんと要す麼。便宜を得るは是れ便宜に落つ。

【提唱】コレから圜悟の評ぢや。「黃巢過ぎて後ち曾つて劍を收む、大笑は還つて應に作者知るべしと」、コリヤ雪竇がチヤンと知つて居る。「雪竇便ち、這の僧と巖頭大笑の處とを頌す。這箇の些子、天下の人摸索不著。且らく道へ、他、箇の什麼をか笑ふ」と、コノ大笑の些子、天下の人も知るまいぞ。サー知つて居るならば、巖頭は何を笑ふたぞ、道へ〳〵。「須らく是れ作家にして方に、這の笑中に、權有り實有り、照有り用有り、殺有り活有ることを知るべし」と、コノ中に甚深微妙の鹽梅があるが、コリヤ作家の漢でなくては知れぬとぢや。「三十山藤且らく輕恕すと、這の僧、後に雪峯の面前に至つて、這の僧舊に依つて莽鹵。峯便ち令に據つて行して、打つこと三十棒して、趕ひ出すことを頌す」と、三十棒は負けて置いたと云ふのか。併し雪峯は、御法度通り遣つたのぢや。「且らく道へ、什麼と爲てか却つて此くの如くなる。儞、情を盡して這の話を會せんと要す麼」と、コリヤ雪峯の貴い爲人ぢや。サー諸人、此の話を會せんとするか。「便宜を得るは是れ便宜に落つ」と、圜悟も甚だ老婆ぢや。何故棒を喰ふたなれば便宜に落つるのか。サー些つとでも手懸りがあると、悟りの障りとなるからぢや。コヽが好いと思ふと、其處が糞詰りになるぞ。

註釋〔アキのない奴ぢや〕アキは飽きにして、飽かずに、いくらでも棒を喫ふ奴との意。〔骨折れ〳〵とせちがうのぢや〕せちがうは强請する意、セガムなり。〔センダラ馬〕駄馬を云ふ。

第六十七則　梁武帝請講經

【梁武帝請講經】

擧梁武帝請傅大士講金剛經　○達磨兄弟來也○魚行酒肆卽不無○衲僧門下卽不可○這老漢老老大大作這般去就　大士便於座上揮案一下　○直得火星迸散○似則似是則夫是○不煩打葛藤　武帝愕然　○便下座

兩回三度被人瞞○也教他摸索不著　誌公問陛下還會麽　○黨理不黨情
○肱膊不向外○也好與三十棒　帝云不會　○可惜許　誌公云大士講
經竟　○也須逐出國始得○當時和誌公一時與趕出國始是作家○兩箇漢同坑無異
土

【和訓】舉す。梁の武帝、傅大士を請じて、金剛經を講ぜしむ。（○達磨の兄弟來也。○魚行酒肆、即ち無きにあらず。○衲僧門下は即ち不可。○這の老漢老老大大、這般の去就を作す。）大士便ち座上に於て、案を揮ふこと一下、便ち下座。（○直に得たり、火星迸散することを。○似たることは似たり、是なることは未だ是ならず。○葛藤を打することを煩はさず。）武帝愕然。（○兩回三度、人に瞞ぜらる。○也た他をして摸索不著ならしむ。）誌公問ふ、陛下還つて會す麽。（○理に黨して情に黨せず。○肱膊外に向はず。○也た好し三十棒を與ふるに。）帝云く、不會。（○可惜許）誌公云く、大士講經竟んぬ。（○也た須らく國を逐ひ出して始めて得ん。○當時誌公に和して、一時に與に國を趕ひ出して、始めて是れ作家。○兩箇の漢、同坑に異土無し。）

【提唱】第六十七則、「梁武帝請講經」と、コノ則は、看經の眼、此の傅大士に依りて、別に消息を通じ、衲子の基を爲すことを明すのぢや。コノ看經の眼を明すのに、一句幷に五事があるぢや。一句とは、コノ南天棒が常に徒に示して曰く、阿含の小乘は、誠に圓教の大乘に超ゆる百千萬倍と。

老衲は此の句を以つて諸子を誡む。汝等若し此の理に通じなば、是れ全く眞の禪匠なり。此の理に通ぜざれば吾が兒孫にあらず。次に五事とは、一には梵網經の十重四十八、二には遺教經の大事、三には楞嚴經の大事、四には涅槃經の大事、五には法華經の大事、コノ五つを云ふ。コノ則には垂示がない、直に本則ぢや。

「舉す。梁の武帝、傅大士を請じて、金剛經を講ぜしむ」と、コレはサ、武帝が誌公に向つて、「金剛經」を講ぜよと云ふたが、誌公、其の時傅大士が山から下られたのを知つて居るから、コノ講經は傅大士にして貰ふ方が宜しう御座ると勸めた。ッコデ傅大士が講經することになつたのぢやさうな。又た「編年通論」の傅大士章論には、「傅大士、書を武帝に致し、上中下の善を條べんと欲ず。意は則ち佳し。然れども中夏、能く之れを行ふ處に非らず。武帝に見ゆるに及んで、頗る甚だ契合せず。寶公、大士を擧して經を講ずるに至る。說く者以謂らく、大士、朝に入るは、寶公世を去つて凡そ二十一年なりと。然れども、寶公は神異著明なり、沒すると雖も、時々禁中に降現して、帝の爲めに事を言ふ。是れ亦た疑ふに足らず云々」とある。是れではマルデお化のやうな話しぢやが、ソンナこともあらうかい。

「大士便ち座上に於て、案を揮ふこと一下、便ち下座」と、コリヤ如何ぢや。大士は講座に陞つてからに、ウンともスンとも云はず、案を一つコッンとやつて下座した。實に天晴れな働きぢや。

「武帝愕然」と、武帝、魂消返つてキヨロリとした。鴉が豆鐵砲喰ふたやうなものぢや。

「誌公問ふ、陛下還つて會す麼」と、ソコデ誌公がお會りになりましたかと云ふたが。

「帝云く、不會」と、武帝は猶ほ上の空ぢや。コレぢや平生の講經、何んの役にも立たぬ。武帝は且らく措き、卽今諸人は如何會する麼。

「誌公云く、大士講經竟んぬ」と、誌公が云ふのに、大士は徹底讀了したと。サーどう讀んだぞ。是れ根から葉から、筋骨を拔いだのぢや。コノ誌公の語は、未だ以つて取るに足らぬが、然れども更に答ふ可き語は無い。コリヤ「大士講經し竟んぬ」ばかりぢやあるまい、佛祖も亦た講經し竟んぬぢや。

著語 コレから圜悟の著語ぢや。

「擧梁武帝請傅大士講金剛經」――「達磨の兄弟來也」、武帝を困らせた達磨の兄弟分、傅大士のお出でぢや。「魚行酒肆、卽ち無きにあらず」、「衲僧門下は卽ち不可」、コノ二句は一理ぢや。「魚行」は魚屋、「酒肆」は酒屋ぢや。圜悟の評にも、「將に金陵城中に入つて魚を賣らんとす」とある。サー傅大士、酒屋や魚屋の辻談義はいくべいが、王宮ぢや左樣もなるまいテ。コリヤ祖師問下の働きは未在と云ふのぢや。「這の老漢老老大大、這般の去就を作す」、ナンぢや講釋などを。年寄の癖にソンナ教者法師の眞似をして、仕損ひをし樣とするのか。

「大士便於座上揮案一下便下座」――「直に得たり、火星迸散することを」、火の粉の散る處にや寄り付かれたものぢやない。傅大士が頓機の說法、眼を貶すれば卽ち蹉過する。實にハヤ、向はんとすれば、箭、新羅を過ぐぢや。「似たることは似たり、是なることは未だ是ならず」、此處に衲僧の鼻孔、無いではないが、未だ〳〵圜悟は許されぬ。のみならず却つて圜悟が又た一重添へたのぢや。コリヤ圜悟、目端が利いた。コノ些子は舊參の上士でなければいかぬぞ。「葛藤を打することを煩はさず」併し、ベチヤクチヤと喋舌らずに、本分の經を講ぜられたのは、流石に傅大士ぢや。モー葛藤を打して貰ひたくない。

「武帝愕然」――「兩回三度、人に瞞ぜらる」、達磨と云ひ、傅大士と云ひ、每度馬鹿にされたり、嬲られたり、大いに見苦しいぞ。「也た他をして摸索不著ならしむ」、傅大士のコノ働きは、武帝も中々カヽグリ當てることはならぬ。

「誌公問陛下還會麼」――「理に黨して情に黨せず」、本分の事の上からは、人情で天子ぢやとて贔負はならぬ。誌公は傅大士の大理に味方して、帝の人情にからまれずに問ふのぢや。サー陛下、ナンと未生已前のカチン（案を打つ音）が會りましたか。「肱膊外に向はず」、ドウも無理に悟らせるとはならぬ、斯く云ふ外はない。「也た好し三十棒を與ふるに」、何故繪解きをするか、ソンナことはいらぬ。恐れ多いが本分の事にや代へられぬ、コヽで三十棒打ち參らすれば好いに。

「帝云不會」――「可惜許」、又た不會か、あゝ殘念々々。

「誌公云大士講經竟」――「也た須らく國を逐ひ出して始めて得ん」、エー誌公、自慢臭い。コンナ奴は武帝のお附きとせずに、トットと國を逐ひ出して仕舞へ。「當時誌公に和して、一時に與に國を趕ひ出して、始めて是れ作家」、サー其の時、誌公と一處に傅大士を逐ひ出したらば、初めて作家の好い働きと云ふものぢやと。コレは祖師門下の大事があるから、かう云ふたのぢや。「兩箇の漢、同坑に異士無し」、傅大士も誌公も、是れ爲人度生ぢや。一つ穴の狐ぢやわい。

梁高祖武帝蕭氏諱衍字叔達立功業以至受齊禪卽位後別註五經講議奉黃老甚篤而性至孝一日思得出世之法以報劬勞於是捨道事佛廼受菩薩戒於婁約法師處披佛袈裟自講放光般若經以報父母時誌公大士以顯異惑衆繫於獄中誌公乃分身遊化城邑帝一日知之感悟極推重之誌公數行遮護隱顯迨不可測時婺州有大士者居雲黃山手栽二樹謂之雙林自稱當來善慧大士一日修書命弟子上表聞於帝時朝廷以其無君臣之禮不受傅大士將入金陵城中賣魚時武帝或請誌公講金剛經誌公曰貧道不能講市中有傅大士者能講此經帝下詔召之入禁中傅大士旣至於講座上揮案一下便下座當時便與推轉免見一場狼籍却被誌公云陛下還會麼帝云不會誌公云大士講經竟也是一人作頭一人作尾誌公恁麼道還夢見傅大士麼一等是弄精魂這箇就中奇特雖是死蛇解弄也活旣是講經爲甚却不大分爲二一如尋常座主道金剛之體堅固物物不能壞利用故能摧萬物如此講說方喚作講經雖然如是諸人殊不知傅大士只拈向上關捩子略露鋒鈍敎人知落處直截與儞壁立萬仞恰好被誌公不識好惡却云大士講經竟正是好心不得好報如美酒一盞却被誌公以水攪過如一釜羹被誌公將一顆鼠糞汚了且道旣不是講經畢竟喚作什麼頌云

【和訓】　梁の高祖武帝は蕭氏、諱は衍、字は叔達。功業を立てて、以つて齊の禪を受くるに至る。即位の後別して五經を註して講議す。黃老を奉ずること甚だ篤し。而も性至孝なり。一日出世の法を得て以つて、劬勞に報ぜんことを思ふ。是に於て道を捨てて佛に事へて、廼ち菩薩戒を婁約法師の處に受け、佛袈裟を披て、自ら放光般若經を講じて、以つて父母に報ず。時に誌公大士、異を顯し衆を惑すを以つて獄中に繫がる。誌公乃ち身を分つて城邑に遊化す。帝、一日之れを知つて感悟す、極めて之れを推重す。誌公數遮護を行して、隱顯測る可からざるに迨ぶ。時に婺州に大士と云ふ者有り、雲黃山に居り、手から二樹を栽えて、之れを雙林と謂ひ、自ら當來の善惠大士と稱す。一日書を修して、弟子に命じて表を上つて帝に聞す。時に朝廷、其の君臣の禮無きを以つて受けず。傅大士將に金陵の城中に入つて、魚を賣らんとす。時に武帝、誌公を請じて金剛經を講ぜしめんとすること或り。誌公曰く、貧道講ずること能はず、市中に傅大士と云ふ者有り、能く此の經を講ずと。帝、詔を下して之れを召して禁中に入る。傅大士旣に至る。講座の上に於て、案を揮ふこと一下、便ち下座。當時便ち與に推轉せば、一場の狼籍を見ることを免れん。却つて誌公に、陛下還つて會す麼と云はれて、帝云く不會。誌公云く、大士講經竟んぬと。也た是れ一人頭を作せば、一人尾を作す。誌公恁麼に道ふ、還つて夢にも傅大士を見ん麼。一等に是れ精魂を弄す、這箇、中に就いて奇特なり。是れ死蛇なりと雖も、弄することを解すれば也た活す。旣に是れ講經、甚んと僞てか却つ

て大いに分つて二と爲さざる。」へに尋常の座主の云ふが如きんば、金剛の體は堅固にして、物物壞すること能はず。利用なるが故に、能く萬物を摧くと。此くの如く講說するを、方に喚んで講經と爲す。然も是くの如くなりと雖も、諸人殊に知らず、傳大士只だ向上の關捩子を拈じて、暗ぼ鋒鋩を露して人をして落處を知らしむ。直截して儞が與に壁立萬仞なることを。恰好に誌公に、好惡を識らずして、却つて大士講經竟んぬと云はる。正に是れ好心、好報を得ず。美酒一盞、却つて誌公に水を以つて攙過せらるゝが如く、一釜の羹、誌公に一顆の鼠糞を以つて汚し了らるるが如し。且らく道へ、既に是れ講經にあらずんば、畢竟喚んで什麼とか作さん。頌して云く。

【提唱】 コレから圜悟の評ぢや。「梁の高祖武帝は蕭氏、諱は衍、字は叔達。功業を立てて、以つて齊の禪を受くるに至る」と、武帝のことは上卷の第一則の處でも云ふたが、武帝は勳功に依つて、齊の禪を受けたのぢや。又た齊の高祖は姓は蕭、名は道成と云ふて、宋より禪を受け、相ひ襲ふこと、七主、二十四年にして、梁に讓つたのぢや。武帝卽位するや、改元して天監と號した。「卽位の後、別して五經を註して講義す。黃老を奉ずること甚だ篤し」と、卽位してから、特別に五經の註を作つて講義したが、中にも「黃帝經」や「老子經」を尊んで御座つた。「而も性至孝なり。一日、出世の法を得て、以つて劬勞に報ぜんことを思ふ」と、御孝心の處から、何卒世間の取り沙汰を離れ、生先を透脫して、父母の劬勞に報ひたいと思召したが、黃老の書では、とても出世間の法は得られぬと考へ及ぼされた。ソコデ、「是に於て道を捨てて佛に事へて、廼ち菩薩戒を婁約法師の處に於て受け、佛袈裟を披て、自ら放光般若經を講じて、以つて父母に報ず」と、大事因緣を究明するには、佛道でなくてはならぬと、佛弟子となられ、菩薩の大戒を婁約法師に就いて受けた。ソシテ佛袈裟を着て、「放光般若經」を講じ、以つて父母の恩に報ゐられた。コノ般若經は二十卷、九十品で、大品中の二十卷を譯出したものぢや、ソレラのことは、上卷の第一則を見ると出て居る。サー此の「孝」と云ふことが大切ぢや。恐れ多いことぢやが、上御一人でも、父母の在らせ給はぬことはない。孝の道は現在ばかりぢやない。實に未來永劫ぢや。ソノ中にも生死を透脫する位大なる孝はないぞ。「時に誌公大士、異を顯し衆を惑はすを以つて獄中に繫がる」と、コレは未だ梁にならぬ前のことぢや。誌公大士が種々の不思議を行つたものぢやから、衆人を惑はすと云ふので、獄に下された。コノ誌公も尋常の者ぢやない、爲人度生の大願があるぢや。「誌公乃ち身を分つて城邑に遊化す。帝、一日之れを知つて感悟す、極めて之れを推重す、誌公數遮護を行して、隱顯測る可からざるに迨ぶ」と、誌公は觀音の三十二應身のやうに、自己は獄中に在りながらも分身して、城內に於て種々に說法した。ソレを武帝が御覽になつて、コリャなみ〳〵の者ぢやないと、酷く御叡感あつて、重く用ひられた。ソコデ誌公は度々、遮惡護善の法を行したが、ソノ玄妙不可思議なることは、傍からは測ることが出來なかつた。「時に婺州に大士と云ふ者有り、雲黃山に居り、手から二樹を栽えて、之れを雙林と謂ひ、自ら當來の善慧大士と稱す」と、古板には、「大士」の上に「傳」の字が有るやうぢ

や。傅大士は婺州義烏縣の人ぢや、本名は翕と云ふ。ソノ傅大士が雲黄山に居つてト、雲黄山は虎丘山と云ふが本名ぢや、大士が山頂に於て行道した時、其の山忽ち黄雲を起し、盤施して蓋ふが如くであつたから雲黄山とも云ふて居る。ソノ山の頂に、大士が手から二本の樹を栽えて雙林と謂ひ、寺を創てゝ之れに居つた。寺の名は雙林寺と云ふ外に、双稠寺とも双檮寺とも云ふ。ソシテ自ら當來の善慧大士と稱した。釋迦は善慧と曰ふた、彌勒も亦た名く。蓋し因地に在る時の號ぢや。「一日書を修じて、弟子に命じて、表を上つて常に聞す。時に朝廷、其の君臣の禮無きを以つて受けず」と、或時傅大士が武帝に表を上つた。所謂上求菩提、下化衆生の大願心があるからこそぢや。處が君臣の禮が無いからとて表文も御嘉納にならなかつた。「傅大士、將に金陵の城中に入つて、魚を賣らんとす」と、金陵は武帝の都ぢや、其處で魚を賣ると云ふ。コリヤ大權の菩薩でなくてはとても出來ぬことぢや。「時に武帝、誌公を請じて金剛經を講ぜしめんとすること或り。誌公曰く、貧道講ずること能はず、市中に傅大士と云ふ者有り、能く此の經を講ずと。帝、詔を下して之れを召して禁中に入る。傅大士既に至る」と、ソノ時、武帝が誌公に向つて、金剛經を講ぜよと命令したと見える。スルト誌公が、貧道は能う講じませぬが、今ま此の金陵に傅大士と云ふ者があつて能く金剛經に通じて居りますから詔を下してお召になつて、講ぜしめては如何で御座ると勸めた。コノ「貧道」と云ふは、僧は道人ぢやけれども、修道の極めて貧しい者ぢやと、謙遜して云ふのぢや。

ソコデ武帝が早速に召すと、傅大士は入内して講座に就いた。「講座の上に於て、案を揮ふこと一下、便ち下座」と、大士は座に上るや、案を揮ふこと一下して降りた。コリヤ大士が眞箇拶ひぢや、今時の演法は泥沓ぢや。コノ「案」を「抄」には、界尺に作るが可いとあるが、ソレは穿鑿に過ぎて居る。寧ろ見臺とするが可い。「當時便ち輿に推轉せば、一場の狼籍を見ることを免れん。却つて誌公に、陛下還つて會す麼と云はれて、帝云く、不會」と、ソノ時、武帝が若し講坐を引つくり返してあらうどならば、取り亂したこともなく、誌公の世話にはなるまいにサ。「誌公云く、大士講經竟んぬと、也た是れ一人頭を作せば、一人尾を作す」と、實に大士は頭をしたから、誌公が尾を付けた。二人で始末したのぢや。「誌公恁麼に道ふ、還つて夢にも傅大士を見ん麼」と、コノ一句には甚だ力がある。誌公も利巧振つたけれども、案を揮ふた處は夢にも知るまい。「一等に是れ精魂を弄す。這箇、中に就いて奇特なり」と、昔の大善知識は、爲人度生の爲めにはサ、種々なる言說を以つてからに、或は麁と說き或は細と說き、一樣に骨折るが、ソノ中でも取り分け、此の揮案は又た格別なものぢや。「是れ死蛇なりと雖も、弄することを解すれば也た活す」と、コノ「金剛經」は活法ぢやけれども、武帝面前に在つては死蛇も同じぢや。ソレを傅大士が打案の處で、イキ〳〵と活返らせた。總て經論は用ひ人に依つて、死蛇ともなれば活蛇ともなる。コノ南天棒も、三十年來「法華經」を以つて、死蛇と作し了つたわい。サー諸人、「金剛經」がカチッと云ふ處で、ピチ〳〵活した

のを知るかドウぢや、「既に是れ講經、甚んと爲てか却つて大いに分つて二と爲さゝる」と、サー既に是れ講經ぢや、何故、體用法喩を講じ、大小半滿を說かないのか。「一へに尋常の座主の道ふが如きんば、金剛の體は堅固にして、物物壞する能はず。利用なるが故に、能く萬物を摧くと。此くの如く講說するを、方に喚んで講經と爲す」と、コレが並み大抵の者ならサ、金剛の正體こそ那一身で、是非を以つて分別すべきぢやない。三災壞空にも此一身は不壞ぢや。たとへ佛でも、菩薩でも、コノ金剛には手を觸るゝことは出來ぬぞ。ソノ用は能く切れるから、是れを用ひたならば、天堂を摧き、地獄を摧き、悟りを摧き迷を摧き、萬物を摧き自己をも摧く。有らゆる物、一として摧かざるはないと、斯のやうに講ずるのが當然ぢやのに、ソレをカチッと遣るとはドウぢや。「然も是くの如くなりと雖も、諸人殊に知らず、傅大士只だ向上の關捩子を拈じて、略ぼ鋒鋩を露して、人をして落處を知らしむ。直截して倜が與に壁立萬仞なることを」と、コノ傅大士の揮案は全く脫體現成底ぢや。サー諸人、玉の落ち處は何處か、看よ〳〵。了簡や妄想の屆く處ぢやないぞ。シッカリ隻手を聞き分けなきや、コノ消息は知れぬ。「恰好に誌公に、好惡を識らずして、却つて大士講經竟んぬと云はる」と、傅大士、一下して、サッパリと程好うしやうと思ひきや、誌公の奴が向上の大事を以つて、錯つて講經の名にして了つた。却つて是れ、誌公の爲めに汚されたのぢや。「正に是れ好心、好報を得ず」と、大士の打案は下司喰はずぢやに、誌公に蹴散らかされた。「美酒一盞、却つて誌公に水を以つて搖過せらるるが如く、一釜の羹、誌公に一顆の鼠糞を以つて汚し了らるるが如し」と、實にアッタラことをしたわい。「且らく道へ、既に是れ講經にあらずんば、畢竟喚んで什麼とか作さん。頌して云く」と、若しサ、打案の處が、講經でないならば、喚んで何んと云はうぞ。是れ般若かサ、是れ法華かサ。雪竇の頌する處を看よ。

不向雙林寄此身　○只爲他把不住○囊裏豈可藏錐　却於梁土惹埃塵　○若不入草爭見端的○不風流處也風流　當時不得誌公老　○作賊不須本○有牽伴底癩兒　也是栖栖去國人　○正好一狀領過○便打

【和訓】雙林に向つて此の身を寄せず。（○只だ他の把不住なるが爲めなり。○囊裏豈に錐を藏す可けんや。）却つて梁土に於て埃塵を惹く。（○若し草に入らずんば、爭でか端的を見ん。○風流ならざる處也た風流。）當時誌公老を得ずんば、（○賊と作つて本を須ひず。○伴を牽く底の癩兒有り。）也た是れ栖栖として國を去る人ならん。（○正に好し、一狀に領過するに。○便ち打たん。）

【提唱】

頌　コレから雪竇の頌ぢや。南天棒云く、此の頌、雪竇、只だ打案を賞せば、當に其の意を頌すべきに、偶然として始末を述ぶるは、雪竇、別に向上の旨有ればなり。是れは古來多く蹉過す。看經の眼を具せずんば、爭でか敢て分曉ならんや。

「雙林に向つて此の身を寄せず」と、宗門向上の一事に向つて、隱遁の全體で居れば好いに。卽ち雲黃山の雙林に引き込んで、本分を守つて居るべきに、サウはせぬと。コリャ雪竇屋裏の祕訣、天に倚る長劍ぢや。

「却つて梁土に於て埃塵を惹く」と、看經の眼の、透關の腸のと云ふて、異なることをしてから却つて佛に疵を付けたぞ。「埃塵を惹く」とは、打案の處を云ふたものぢや。

「當時誌公老を得ずんば」と、誌公が居合せたればこそ、お茶を濁したれ。若し誌公が居らなかつたら如何ぢや。

「也た是れ栖栖として國を去る人ならん」と、達磨と同じやうに、スゴ〳〵と國を去つて、江を渡らんけりやなるまい。折よく誌公が居合せて、先づ好かつた。「栖栖」の字は、「論語」憲問篇の十四に出て居る。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「不向雙林寄此身」――「只だ他の把不住なるが爲めなり」、自分の居る可き處にも居らないでサ、大士、取り止めがないぞ。「囊裏豈に錐を藏す可けんんや」、サハ去りながら、其の儘には捨て置かれぬ。爲人度生の心が鋭いから、藏くして包んで置くとは出來ぬ。大慈悲の錐が、囊を破つて出る。

「却於梁土惹埃塵」――「若し草に入らずんば、爭でか端的を見ん」、本分地上に入らいでは、金剛の端的は得られぬ。瓦石に入らずんば、明珠の得られぬと同じやうにサ。諸人是れ、入鄽垂手せにや、大士の端的は會らぬぞ。「風流ならざる處也た風流」、埃塵を惹く處、却つて風流ぢや。棒鼻汁を垂して歩くのが、ナカ〳〵面白い。關山國師も鼻を拭む間がなかつたぞ。

「當時不得誌公老」――「賊と作つて本を須ひず」、サー誌公も賊ぢやが、雪竇も賊ぢや。誌公、傅大士が揮案一下して下座すると、「大士講經竟んぬ」と木の頭を入れて引ッ淡つた。マルデ人の褌で角力取つたやうなもの、本手いらずの大商ひをして、非常な利益をせしめた。去りながら、雪竇の賊はナカ〳〵知れまいぞ。「伴を牽く底の癩兒有り」、達磨と誌公と、雪竇と、ノソリ〳〵とサ、乞食の大連ぢや。

「也是栖栖去國人」――「正に好し、一狀に領過するに」、スゴ〳〵と國を去る處は、傅大士も達磨も過は同じぢや。一層のこと、兎や角う云ふ誌公も雪竇も、引ッからげて括つて仕舞へ。「便ち打たん」、サウして打ちノメさう。

不向雙林寄此身却於梁土惹埃塵傅大士與沒板齒老漢一般相逢達磨初到金陵見武帝帝問如何是聖諦第一義磨云廓然無聖帝云對朕者誰磨云不識帝不契遂渡江至魏武帝舉問誌公云陛下還識此人否帝云不識誌公云此是觀音大士傳佛心印帝悔遂遣使去取誌公云莫道陛下發使去取合國人去他亦不回所以雪竇道當時不得誌公老也是栖栖去國人當時若不是誌公爲傅大士出氣也須是趕出國去誌公既饒舌武帝却被他熱瞞一上雪竇大意道不須他來梁土講經揮案所以道何不向雙林寄此身喫粥喫飯隨分過時却來梁土恁麼指注揮案一下便下座便是他惹埃塵處既是要殊勝則目視雲霄上不見有佛下不見有衆生若論出世邊事不免灰頭土面將無作有將有作無將是作非將瓮作細魚行酒肆橫拈倒用敎一切人明此箇事若不恁麼放行直到彌勒下生也無一箇半箇傅大士既是拖泥帶水賴是有知音若不得誌公老幾乎趕出國了且道卽今在什麼處

【和訓】雙林に向つて此の身を寄せず、却つて梁土に於て埃塵を惹くと。傅大士、沒板齒の老漢と一般に相ひ逢ふ。達磨初め金陵に到つて武帝に見ゆ。帝問ふ、如何なるか是れ聖諦第一義。磨云く、廓然無聖。帝云く、朕に對する者は誰ぞ。磨云く、不識。帝、契はず。遂に江を渡つて魏に至る。武帝擧して誌公に問ふ。公云く、陛下還つて此の人を識るや否や。帝云く、不識。誌公云く、此れは是れ、觀音大士佛心印を傳ふと。帝悔ゐて遂に使を遣はし、去つて取らしめんとす。誌公云く、道ふこと莫れ、陛下使を發して去つて取らしめんと。合國人去るとも、他亦た回らじと。所以に雪竇道く、當時誌公老を得ずんば、也た須らく是れ、國を趕ひ出し去るべし。誌公既に饒舌、武帝却つて他に熱瞞一上せらる。雪竇の大意に道く、須ひず、他、梁土に來つて講經して案を揮ふことを。所以に道ふ、何んぞ雙林に向つて此の身を寄せて、喫粥喫飯、分に隨つて時を過さずして、却つて梁土に來つて、恁麼に指注して、案を揮ふこと一下、便ち下座すと。便ち是れ他、埃塵を惹く處なり。既に是れ殊勝を要する則んば、目に雲霄を見て、上、佛有ることを見ず、下、衆生有ることを見ず。若し出世邊の事を論せば、免れず灰頭土面にして、無を將つて有と作し、有を將つて無と作し、是を將つて非と作し、瓮を將つて細と作し、魚行酒肆、横拈倒用、一切の人をして、此箇の事を明めしむ。若し恁麼に放行せずんば、直に彌勒下生に到るとも、也た一箇半箇も無けん。傳大士既に是れ拖泥帶水、賴に是れ知音有り。若し誌公老を得ずんば、幾乎と國を趕ひ出し了られん。且らく道へ、卽今什麼の處にか在らん。

【提唱】コレから圜悟の評ぢや。「雙林に向つて此の身を寄せず、却つて梁土に於て埃塵を惹くと。傅大士。沒板齒の老漢と一般に相ひ逢ふ」と、傅大士、雲黃山に居れば可いのに、態々出て來せて、王城に入つてからに、案を打つて下座するなぞ、齒欠けの達磨の爺父と同じやうぢや。コノ二人とも、皇室に入つて、陛下に向つて說法する端的が似て居る。「達磨初め金陵に到つて武帝に見ゆ。帝問ふ、如何なるか是れ聖諦第一義。磨云く、廓然無聖。帝云く、朕に對する者は誰ぞ。磨云く、不識、帝、契はず。遂に江を渡つて魏に至る。武帝擧して誌公に問ふ。公云く、陛下還つて此の人を識るや否や。帝云く、不識。誌公云く、此れは是れ、觀音大士佛心印を傳ふと。帝悔ゐて遂に使を遣はし、去つて取らしめんとす。誌公云く、道ふこと莫れ、陛下使を發して去つて取らしめんと。

合國人去るとも、他亦た同らじと」、コリャ上卷の第一則で悉しく講じて置いた。達磨が初めて支那へ渡つて、先づ第一に武帝に見えての商量ぢや。帝が聖諦第一義を問へば、達磨は廓然無聖と答へた。帝が朕に對する者は誰ぞと問へば、達磨は不識と答へた。コノ達磨の答が帝には會らぬので、達磨は遂に揚子江を渡つて魏の國へ行つた。ソノ後で武帝が、達磨との問答を誌公に問ふたぢや。スルト誌公が、陛下はアノ人を御存じ無いのですかと云ふた。帝は不識と答へた。誌公が云ふのに、アレは觀音大士が佛心印を傳へに來たので御座いますと。ソコデ帝は大いに悔ゐて、使を以つて迎へんとすると、誌公は止めて、ソレはお止めなされたが好い、誰れを迎ひにやつても、達磨は同つて參りませんと。此處等は大いに仔細があるぞ。「所以に雪竇道く、當時誌公老を得ずんば、也た是れ栖栖として國を去る人ならんと。當時若し是れ誌公、傅大士の爲に氣を出すにあらずんば、也た須らく是れ、國を趕ひ出し去るべし」と、ソノ時サ、誌公が助け船を出して、講經竟んぬと云ふたから、傅大士も息が出來たのぢや。サモなきや達磨同樣、夜逃げをせにやならぬ。「誌公既に饒舌、武帝却つて他に熱瞞一上せらる」と、誌公はおしやべりの奴ぢや。武帝も亦た自己を知らぬから、ヤー達磨ぢやのヤー觀音ぢやのと、ヌックと喞されたぢや。「雪竇の大意に道く、須ひず、他、梁土に來つて講經して案を揮ふことを。所以に道ふ、何んぞ雙林に向つて此の身を寄せて、喫粥喫飯、分に隨つて時を過さずして、却つて梁土に來つて、恁麼に指注して、案を揮ふこと一下、便ち下座す

と。便ち是れ他、埃塵を惹く處なり」と、雪竇も云ふて居る。本分の上から見ればサ、何も說くとも案を打つこともないぢや。ソレぢやから、雙林寺にヂッとして居つて、喰ふたり寢たりサ、分相應にして居りや好いのぢやに、サウも能うせずに、都くんだりまで出て來せてからに、揮案一下して金剛經に注脚し、大事な金剛を汚しくさつた。「既に是れ殊勝を要する則んば、目に雲霄を見て、上、佛有ることを見ず、下、衆生有ることを見ず」と、殊勝の境界卽ち自己の風光を見拔いた第一義諦の眼から見りや、生死有るを見ず菩提あるを見ずサ。衆生と見る眼から、直に地獄を見るぞ。「若し出世邊の事を論ぜば、免れず灰頭土面にして」と、サー殊勝の本分を出で、上求菩提、下化衆生の二義に亘らば、灰頭土面ぢや。コリャ第二義門ぢや。「無を將つて有と作し、有を將つて無と作し、是を將つて非と作し、麁を將つて細と作す」と、ぢやから地獄と云ふ處が有るぞと云ひ。ソレ此の座敷に人子一人も無い。元來佛でない者は一人もないのに、自の惑ひから婆婆を見る。あら〳〵しい凡夫が直に彌陀ぢや。實に稀有なる哉。一切の衆生、悉く如來の智惠德相を具有する。「魚行酒肆、橫拈倒用、一切の人をして、此箇の事を明めしむ」と、背戸でも街道でも、何處でも、ドンナことをしても、一切の人に此の大事を明めさせなけりやならぬ。辻談義もするが好い、宮城內で見臺を打くのも好い。要は爲人にあるぢや。「若し恁麼に放行せずんば、直に彌勒下生に到るとも、也た一箇半箇も無けん」と、コノやうにオッ肌脫いで、泥ジンマイになつて世話を燒かずんば、彌勒

下生の時になつても、とても一人も利することはなるまい。「傅大士既に是れ拖泥帶水、賴に是れ知音有り。若し誌公老を得ずんば、幾乎と國を趕ひ出し了られん」と、傅大士の揮案一下も拖泥帶水ぢや。幸に知音があつたから好かつたのぢや。若し誌公と云ふ知音がなかつたならば、達磨と同樣に國を逐ひ出されるぢやらう。「且らく道へ、卽今什麼の處にか在らん」と大士の落處は何處ぢや。サー諸人道へ〳〵。コノ「卽今」の二字が、福本には「過」と作つて居る。

【註】〔梵網經の十重四十八〕梵網經に說かれたる十重禁戒と、四十八の不得輕戒を云ふ。〔因地〕果地に對す、地は地位の義、又た因位とも云ふ。卽ち菩薩未だ佛果を得ずして、六度の因行を修しつゝある間の地位を云ふ。首楞嚴經第五、大勢至圓通の文に、「我れ本と因地に念佛の心を以つて無生忍に入り、今は此の界に於て、念佛の人を攝して、淨土に歸せしむ」と。〔大權の菩薩〕正しくは大權修利菩薩と云ふ。元と支那阿育王山の護法神にして、又た護塔の神、渡海の守護神として尊崇せられ、禪門一般に護法善神として佛殿に奉祠す。像は右手を以つて祈願し、遠望の姿勢をなし、身に帝王の服を纏ふ。〔界尺〕界線を引くの尺木にして、文具に屬す、又た文鎭にも用ふ。〔大小半滿〕頓敎、漸敎なり。〔泥シンマイ〕泥まるけになつて爲人度生するとを云ふ。

第六十八則　仰山問三聖　【仰山問三聖】

垂示云掀天關飜地軸擒虎兕辨龍蛇須是箇活鱍鱍漢始得句句相投機機相應且從上來什麼人合恁麼請擧看

【和訓】垂示に道く、天關を掀げ地軸を飜し、虎兕を擒へ龍蛇を辨ず。須らく是れ箇の活鱍鱍の漢にして、始めて句句相ひ投じ、機機相ひ應ずることを得べし。且らく從上來、什麼人か恁麼なる合き。請ふ擧す、看よ。

【提唱】第六十八則「仰山問三聖」と、コノ則はサ、衲子別に宗門向上の機に通ず。三聖、仰山、是れ此の人にして、參詳すべきことを明すのぢや。

「垂示に云く、天關を掀げ地軸を飜し」と、コノ垂示は、宗師の手段の超凡なることを云ふたのぢや。「天關を掀げ」と、コリヤ祖師門下の大事、天の九虎關のやうなものぞ。サー其の天の關門を投げ飛ばし、地輪を引ッくり返さうぞならば、日月星辰、悉く皆な其の光明を失ひ、佛祖も命を乞はうぞ。天地造化の二義は運轉するがサ、中間の軸樞は、不動の如くにして動かぬ。ソノやうに、

衲僧も横拈倒用すれども、本分の家山を動がぬ。ソレを打つて〳〵打ち碎くぢや。「虎兕を擒へ龍陀を辨ず」と、法窟の爪牙を握れば、手も濡さずに虎兕を擒へることが出來る。龍陀を定めるなんぞ、手間隙は入らぬ。「須らく是れ箇の活鱍鱍の漢にして、始めて句句相ひ投じ、機機相應ずることを得べし」と、具眼の漢が有つてサ、師學共に作家にして、初めて句句相投じ、箭鋒相ひ拄ふぞ。サウあらうぞならば、「機機相ひ應ず」で、袖の振り合ふにも、來機を辨ずるぢや。併し如何しても一回圓地一下を經た奴ぢやないと、コノ場はナカ〳〵容易ではない。「弓も折れ矢も盡き果てた處にて、當り外れを如何定めん」と云ふことがあるが、コヽを今ま一歩進んでサ、「弓も折れ箭も盡き果てた處にて、當り外れを暫し射てみよ」と出なけりや駄目ぢや。「且らく從上來、什麼人か恁麼なる合き。請ふ擧す、看よ」と、サー從上來、什麼人か此のやうな働きをしたか。本則に就いて看よ。

擧。仰山問三聖。汝名什麼。○名實相奪。○勾賊破家。聖云。惠寂。○坐斷舌頭。○擺旗奪鼓。仰山云。惠寂是我。○各自守封疆。聖云。我名惠然。○闘市裏奪去。○彼此却守本分。仰山呵呵大笑。○可謂是箇時節。○錦上鋪花。○天下人不知落處。○何故土曠人稀相逢者少。○一似巖頭笑。又非巖頭笑。○一等是笑爲什麼却作兩段。○具眼者始定當看。

【和訓】擧す。仰山、三聖に問ふ、汝名は什麼ぞ。（○名實相ひ奪ふ。○勾賊破家。）聖云く、惠寂。（○舌頭を坐斷す。○旗を擺き鼓を奪ふ。）仰山云く、惠寂は是れ我。（○各自に封疆を守る。）聖云く、我名は惠然。（○闘市裏に奪ひ去る。○彼此却つて本分を守る。）仰山呵呵大笑す。（○謂つ可し是れ箇の時節と。○錦上に花を鋪く。○天下の人、落處を知らず。○何が故ぞ、土曠かに人稀れにして、相ひ逢ふ者少し。○一へに巖頭の笑に似て、又た巖頭の笑に非らず。○一等に是れ笑ふ、什麼と爲てか却つて兩段と作る。○具眼の者始めて定當して看よ。）

【提唱】

本則　コレから本則ぢや。

「擧す。仰山、三聖に問ふ、汝、名は什麼ぞ」と、仰山が何知らぬ貌して、一太刀拔いて掛つた。コリヤ明頭合、暗頭合ぢや。全體三聖は臨濟下、人無き處を行く如く天下を横行する者にサ、名は什麼ぞと云ふて問ふたは、人境俱奪のやうなものぞ。コノ則は賓主互換ぢや、百則の中でも事變つた調ぢやから、久參の上士でも、キヨロッとすると聞えぬぞ。三聖は且らく措いて、卽今諸人に向つて、名は什麼ぞと問ふたら、各々は何んと答へるぞ。

「聖云く、惠寂」と、賓、主を看る。把住ぢや、是れ暗頭合ぢや。ハイ惠寂と、實に洒々落々ぢや。

人境俱奪、釋迦と云ふても達磨と云ふても、何んと云ふても違ふ、サー惠寂でないとは云はせぬぞ。

「仰山云く、惠寂は是れ我」と、實に作家同士。仰山も又た洒々落々と、惠寂は我れぢやと出た。放行ぢや、明頭合ぢや。

「聖云く、我名は惠然」と、コレも明頭合ぢや。ソナタが惠寂なれば、此方は惠然と。コヽが垂示にもあつた「天關を掀げ地軸を飜す」ぢや。コノ出合ひは如何ぢや。

「仰山呵呵大笑す」と、是れ機々相ひ應ずる處、笑にして仕舞ふより外はないが、諸人は此の笑の落處を如何看るか。實にハヤ　何んとも知れぬ笑ぢや。マー著語を看るが好い。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「擧仰山問三聖汝名什麼」――「名實相ひ奪ふ」、仰山の問ふた處はサ、人境兩俱奪ぢやから、名を以つて答へることも、實を以つて答へることもならぬ。仰山天を喚んで地と作す腕前で問ふたぢや。コノ句が福本には、「各自相ひ奪ふ」となつて居る。「勾賊破家」、仰山、コンナに浴せ掛けて置いてサ、却つて賊の手引をするやうなものぢや、今に屋財家財失ふぞ。問ふことは問ふても、相手が強かつたからおしまひぢや。仰山、喧嘩を買つて、如何シンマイするか。

「聖云惠寂」――「舌頭を坐斷す」、仰山に口を開かせぬ。三聖も自分の名を一寸盗まれたが、ソノ取り返す手際の素早さ。「旗を攪き鼓を奪ふ」、三聖の働きは、擊石火、閃電光の樣ぢや。仰山の機鋒を直に奪つた。

「仰山云惠寂是我」――「各自に封疆を守る」、サー此處になると、何方も陣法を守つて動かない。賓主を立てて、互に固め合つた。人境俱不奪ぢや。

「聖云我名惠然」――「鬧市裏に奪ひ去る」、コリヤ人込みの中で、晝盗坊をするやうぢや。先に自分の名を取られたが、手早く取り返した。「彼此却つて本分を守る」、面白い。名前は各々元へ戻つて、賓主共に手は付けられぬ。コレも人境俱不奪ぢや。

「仰山呵呵大笑」――「謂つ可し、是れ箇の時節と」、オヽ好い笑ひ時ぢや、笑ふべき時に笑つたナ、自然の笑ひぢや。「錦上に花を鋪く」、双放双收の端的、互に見事なものぢや、繪にも描かれぬ。

「天下の人、落處を知らず」、コノ呵呵大笑の落處は、天下の人も知らない。恐らくは佛祖と雖も知ることはならぬぞ。「何が故ぞ、土嚇かに人稀れにして、相逢ふ者少し」、コノ骨合を知る知音はあるまい。「一へに巖頭の笑に似て、又た巖頭の笑に非らず」、六十六則に出た巖頭の笑に似て居るがサ、ソレとは更に大違ひぞ。「一等に是れ笑ふ、什麼と爲てか却つて兩段と作る」、同じやうに笑つたのに、何故二樣になつたのぢや。サー巖頭、是か不是か、仰山、是か不是か。「具眼の者始めて定當して看よ」、具眼の者なら會るぢやらう。好く眼を著けて看よ。

三聖是臨濟下尊宿少具出群作略有大機有大用在衆中昂昂藏藏名聞諸方後辭臨濟徧遊淮海到處叢林皆以高賓待之自向北至南方先造雪峯便問透網金鱗未審以何爲食峯云待汝出網來即向汝道聖云一千五百人善知識話頭也不識峯云老僧住持事繁峯往寺莊路逢獼猴乃云這獼猴各各佩一面古鏡聖云歷刼無名何以彰爲古鏡峯云瑕生也聖云一千五百人善知識話頭也不識峯云罪過老僧住持事繁後至仰山山極愛其俊利待之於明窓下一日有官人來參仰山山問官居何位云推官山豎起拂子云還推得這箇麼官人無語衆人下語俱不契仰山意時三聖病在延壽堂仰山令侍者持此語問之聖云和尚有事也再令侍者問未審有什麼事聖云再犯不容仰山深肯之百丈當時以禪板蒲團付黃檗拄杖拂子付潙山潙山後付仰山仰山既大肯三聖三聖一日辭去仰山以拄杖拂子付三聖三聖云某甲已有師仰山詰其由乃臨濟的子也只如仰山問三聖汝名什麼佗不可不知其名何故更恁麼問所以作家要驗人得知子細只似等閑問云汝名什麼更道無計較何故三聖不云惠然却道惠寂看佗具眼漢自然不同三聖恁麼又不是顛一向攙旗奪鼓意在仰山語外此語不墮常情難爲摸索這般漢手段却活得人所以道佗參活句不參死句若順常情則歇人不得看佗古人念道如此用盡精神始能大悟既悟了用時還同未悟時人相似隨分一言半句不得落常情三聖知佗仰山落處便向佗道我名惠寂仰山要收三聖三聖倒收仰山仰山只得就身打劫道惠寂是我是放行處三聖云我名惠然亦是放行所以雪竇後面頌云雙收雙放若爲宗只一句內一時頌了仰山呵呵大笑也有權有實也有照有用爲佗八面玲瓏所以用處得大自在這箇笑與巖頭笑不同巖頭笑有毒藥這箇笑千古萬古清風凜凜地雪竇頌云

【和讃】三聖は是れ臨濟下の尊宿。少より出群の作略を具して、大機有り大用有り、衆中に在つて昂昂藏藏として、名諸方に聞ゆ。後ち臨濟を辭して、徧く淮海に遊ぶ。到る處の叢林、皆な高賓を以つて之れを待す。向北より南方に至る。先づ雪峯に造つて、便ち問ふ。網を透る金鱗、未審し、何を以つてか食と爲さん。峯云く、汝が網を出で來らんを待つて、即ち汝に向つて道はん。聖云く、一千五百人の善知識、話頭だも也た識らず。峯云く、老僧住持事繁しと。峯、寺莊に往く路、獼猴に逢ふ。乃ち云く、這の獼猴各各一面の古鏡を佩ぶ。聖云く、瑕生ぜり。聖云く、一千五百人の善知識、話頭だも也た識らず。峯云く、罪過、老僧住持事繁しと。後に仰山に至る。山、極めて其の俊利なることを愛して、之れを明窓下に待す。一日官人有つて、來つて仰山に參ず。山問ふ、官、何の位にか居する。云く、推官。山、拂子を豎起して云く、還つて這箇を推し得てんや麼と。官人無語。衆人下語するに、俱に仰山の意に契はず。時に三聖、病んで延壽堂に在り。仰山、侍者をして此の語を持して、之れを問はしむ。聖云く、再犯容さずと。仰山深く之れを肯ふ。百丈當時禪板蒲團を以つて黃檗に付し、拄杖拂子を潙山に付し、潙山後に仰山に付す。仰山即に大いに三聖を肯ふ。聖、一日辭し去る。仰山、拄杖拂子を以つて三聖に付せんとす。聖云く、某甲已に師有りと。仰山、其の由を詰るに、乃ち臨濟の的子なり。只だ仰山、三聖に問ふが如きんば、汝、名は什麼ぞと。佗、其の名を知らずんばある可からず。何が故ぞ、更に恁麼に問ふ。所以に作家、人を驗みて子細を知ることを得んと要す。只だ等閑に似て、問ふて云く、汝名は什麼ぞと。更に道ふ、計較無し。何が故ぞ、三聖、惠然と云

ばずして、却つて惠寂と道ふ。看よ、佗の具眼の漢、自然に同じからざることを。三聖恁麼、又た是れ顛ずるに不らず、一向に旗を攙き鼓を奪ふ。意、仰山の語外に在つて、此の語常情に墮ちず、摸索を爲し難し。這般の漢、手段却つて人を活得す。所以に道ふ、他、活句に參じて死句に參ぜざれと。若し常情に順せば、人を欺むること得じ。看よ佗の古人、道を念ずること此くの如し。精神を用ひ盡して、始めて能く大悟す。既に悟り了れば、用時還つて未悟の時の人に同じく相ひ似たり。分に隨つて一言半句、常情に落つることを得ず。三聖、佗の仰山の落處を知つて、便ち佗に向つて道ふ、我名は惠寂と。仰山、三聖を收めんと要す。三聖、倒に仰山を收む。仰山、只だ就身打刼なることを得て、道く、惠寂は是れ我と。是れ放行の處なり。三聖云く、我名は惠然と。亦た是れ放行す。所以に雪竇、後面に頌して云ふ、雙收雙放若く宗を爲すと。只ぞ一句の内、一時に領し了る。仰山呵呵大笑す。也た權有り實有り、也た照有り用有り。佗の八面玲瓏たるが爲に、所以に用處大自在を得たり。這箇の笑、巖頭の笑と同じからず。巖頭の笑、毒藥有り、這箇の笑、千古萬古、清風凜凜地。雪竇の頌に云く。

【提唱】 コレから圜悟の評ぢや。「三聖は是れ臨濟下の尊宿。少より出群の作略を具して、大機有り大用有り、衆中に在つて昂昂藏藏として、名諸方に聞ゆ」と、三聖は臨濟下の和尚さんぢや。若い時から中々なものぢやつた。十分に見性も濟んでサ、大勢の中でも、水際立つて氣高く見えた。ぢやから其の名も諸方に聞えて居つた。「昂昂」は露はれたる貌ぢや、「藏藏」は隠れたる貌ぢや。今で云へば巍々堂々と云ふやうなとぢや。「後ち臨濟を辭して、徧〻淮南に遊ぶ。到る處の叢林、皆な高賓を以つて之れを待す」と、臨濟遷化の問答が了つてから、南の方を徧遊した。淮海とはサ、南淮や海州邊を云ふたのぢやが、茲では一天四海を指したものぢや。サー前にも云ふたやうな俊傑ぢやから、天下に横行すれども點の打ち人がない。何處の叢林でも、高賓の禮を以つて攝待した。「向北より南方に至る。先づ雪峰に造つて」と、向北とは河北のことぢや。臨濟は河北の鎮州に居た。ソレから南方へ出掛けたのぢやが、路順に當るから、先づ雪峰を訪ねたと見える。「便ち問ふ、網を出る金鱗、未審し、何を以つてか食と爲さん。峯云く、汝が網を出で來らんを待つて、即ち汝に向つて道はん」と、ソコデ三聖が、今時那邊、佛界魔界、拔け切つた奴に、何んぞ御馳走はないかと問ふた。スルト雪峯が、お主が網を出て來るのを待つて居るのぢやわいと。コノ話は、中卷の第四十九則の本則にあるから、就いて見るが好い。此處では悉しくは云はぬぞ。「聖云く、一千五百人の善知識、話頭だも也た識らず」と、三聖、コリャ天晴れ働いた。「峯云く、老僧住持事繁しと」、雪峯が、己や忙しいわいと。「峯、寺莊に往く路、獼猴に逢ふ。乃ち云く、這の獼猴各各一面の古鏡を佩ぶ。聖云く、歷刼名無し、何を以つてか彰して古鏡と爲る」と、ソレから雪峯がコナシ部屋へ行く路で、猿に逢ふたものぢやから、雪峯が、此奴等も一面の古鏡を持つて居るわいと云ふと、三聖が、ヱー佛と云ふも無理、法と云ふも穢れぢやのに何を以つて古鏡とするのぢやと咎めた。「峯云く、瑕生ぜり」と、ソコデ雪峯が、ソノ様に云やるのが瑕ぢや。ヤイ汝は瑕を出したなと。實にハヤ鋭い、驚き入つたものぢや「瑕生ぜり」とは、全體三聖が云ふべきぢやが、ソレを雪峯に云はれて、三聖實は一杯喰ふて瑕が生じたけれども、三聖に瑕はない。コヽで若し三聖に力が無ければ、必らず二鐵

圍山の外へ取つて抛げられるぞ。危い處を流石は三聖ぢや、直に陣を立て直した。「聖云く、一千五百人の善智識、話頭だも也た識らず」と、「瑕生ぜり」などと云はれるのは、大善智識の面汚しぢや。「峯云く、罪過、老僧住持事繁しと」、イヤこれは惡かつた。ドウも衲は忙しうてならぬと。「後に仰山に至る。山、極めて其の俊利なることを愛して、之れを明窓下に待す」と、ソレから仰山の處へ行つた。仰山は其の俊利なることを見拔いたものぢやから、高賓の式を以つて僧堂首座の位に置き、書院の床脇に著かせた。「一日官人有つて來つて、仰山に參ず。山問ふ、官、何んの位にか居する。云く、推官。山、拂子を竪起して云く、還つて這箇を推し得てんもと。官人無語。衆人下語するに、俱に仰山の意に喫はず」と、或日、一人の官人が仰山に參じた。仰山が、お前さんの官位は何んぢやと問ふた。官人が、ハイ私は推官でありますと。「推官」とは、ものゝ理非を正す役、所謂目附役ぢや、今の裁判官のやうなものぢや。スルト仰山が拂子を竪起して、推官と云ふならば、サー這箇の過の輕重は、どう推するぞと問ふた。ソコデ官人は行き詰つて、無語ぢや。大衆達も種々と下語するが、一つも仰山の意に契はぬ。「時に三聖、病んで延壽堂に在り。仰山、侍者をして此の語を持して、之れを問はしむ。聖云く、和尚、事有りと」、ソノ時三聖は、病僧堂に寢て居つたと見える。仰山は侍者を遣つて、今官人に問ふた語を、更に三聖に問はしめた。スルト三聖は、ソリヤ事ぢや、大事ぢや、大變々々、大小の論爭が起つたと。「和尚、事有り」が、「傳燈錄」には、「和尚、事生ぜり」

となつて居る。「再び侍者をして、未審し、什麼の事か有ると問はしむ。聖云く、再犯容さずと。仰山深く之れを肯ふ」と、ソコデ仰山は再び侍者をして、什麼の事があるのぢやと問はせた。スルト三聖は、「再犯容さず」と、又た出たか、もう容さぬぞと。さりとては作家の漢ぢや。仰山は深く之れを肯ふた。「百丈當時禪板蒲團を以つて黃檗に付し、拄杖拂子を以つて溈山に付し、溈山後に仰山に付す。仰山既に大いに三聖を肯ふ。聖、一日辭し去る。仰山、拄杖拂子を以つて三聖に付せんとす」と、ソノ頃百丈は禪板と蒲團を黃檗に遣り、拄杖と拂子を溈山に遣つた。ソコデ溈山は又仰山に遣つた。コリヤ附法の證ぢや。仰山は三聖を見拔いたものぢやから、三聖が辭し去らうとする時、仰山は、今の百丈傳來の拄杖と拂子を三聖に遣らうとした。「聖云く、某甲已に師ありと。仰山、其の由を詰るに、乃ち臨濟の的子なり」と、スルト三聖は、ハイ有り難うは御座るが、某甲には已に師匠がありますと。斯う無うてはならぬぞ。仰山が、ソリヤ誰れの法嗣かと訊ねてみると、臨濟の的子ぢやつた。「只だ仰山、三聖に問ふが如きんば、汝、名は什麼ぞと。佗、其の名を知らずんばある可からず。何が故ぞ、更に恁麼に問ふ。所以に作家、人を驗みて子細を知ることを得んと要す」と、仰山は、三聖の名を知らなかつたか如何か。維那が通じてある筈ぢやから、仰山が知らぬと云ふ譯はない。ソレに名を問ふたのは如何ぢや。仰山は作家ぢや、三聖の所得を驗さんとしてのことか。福本には、「知ることを得ん」の二字がない。「只だ等閑に似て、問ふて云く、汝、名は什麼ぞと。

更に道ふ計較無し。何が故ぞ、三聖、惠然と云はずして、却つて惠寂と道ふ。看よ、他の具眼の漢、自然に同じからざることを」と、仰山は只だ何んの意も無く、名は何んぞと問ふたまでぢや、別に道理も理窟もない。然るに三聖は、何故惠然と云はずして惠寂と云ふたかサ。三聖のやうな眼の明いた人は格別ぢや、尋常の人とは違ふぞ。「更道無計較」の五字が、福本には、「無亦道理計較」としてある。「三聖恁麼、又た是れ顚ずるに不らず、一向に旗を擺き鼓を奪ふ。意、仰山の語外に在つて、此の語常情に墮ちず、摸索を爲し難し。這般の漢、手段却つて人を活得す。所以に道ふ、佗活句に參じて、死句に參ぜざれと」、三聖は決して氣違染みたことをしたのぢやない。一騎打ち入つて、旗を擺き鼓を奪ふたのぢや。ソノ意は、如何あらうぞならば、仰山が、貴公は名は何んと云ふかと出た小股を取つて返したのぢや。こりやサ、常情に墮ちぬから、一寸摸り當てられぬぞ。コノ手段あつてこそ、三聖の三聖たゝ處で、能く人をも活し得る。ぢやから平生も云ふ通り、活句に參じて死句に參ずるなとは、此處のことぢや。「若し常情に順せば、則ち人を欺むると得じ。看よ佗の古人、道を念ずること此くの如し、精神を用ひ盡して、始めて能く大悟す」と、サー常情なれば出入りが出來る。ソレぢや人を休歇せしむることを得ぬ。ぢやから看よ古人は、此の通り道の爲めに難行苦行して大悟するぢや。「既に悟り了れば、用時還つて未悟の時の人に同じく相ひ似たり。分に隨つて一言半句、常情に落つることを得ず」と、悟つたからとて、其の悟りに取つ附いて居るやうぢや駄目ぢや。悟つて仕舞つたら、矢つ張り未だ悟らぬ者と同じやうにならにやいかぬ。「到り得還り來つて別事無し、廬山の烟雨浙江の潮」ぢや。寒の時は寒を知り、熱の時は熱を知る。サウあらうぞならば、ソノ時〳〵の一言半句も常情に落ちない。コリヤ凡情の胴袋からは出ぬぢやテ。「三聖、佗の仰山の落處を知つて、便ち佗に向つて道ふ、我名は惠寂と」、三聖は、仰山が、汝名は什麼ぞと問ふて來た落處を知つとるから、直にソレ仰山に向つて、「我名は惠寂」と云ふて出た。「仰山、三聖を收めんと要す、三聖倒に仰山を收む。仰山、只だ就身打劫なることを得て惠寂は是れ我と。是れ放行の處なり」と、仰山が三聖を手籠めにせんと掛つてサ、却つてアベコベに、三聖に自分が取り挫がれて、身動きも出來ぬ處から、惠寂は是れ我れぢやと、當身を吳れて突ッ放した。仰山の奴、人の物をすらうとして、却つて大きなスリに出逢ふたと同じぢや。「三聖云く、我名は惠然と。亦た是れ放行す」と。三聖亦たナカ〳〵手强者ぢや、仰山に突ッ放されても斃ばらぬ。直に宙返りして突ッ立つてからに、我名は惠然ぢやとやつた。禪者は此の機用が無くちやならぬ。宙返りはスミスの飛行とばかり思ふな、禪者は常に大虛空に於て、自在に宙返りもし、逆落もし、驀進もせにやならぬ。コノ仰山、三聖の働きを、形の上で見たきや、夜間空中飛行の宙返りを見るが好い。「所以に雪竇後面に頌して云ふ、雙收雙放若く宗を爲すと。只だ一句の內、一時に頌し了る」と、ぢやから雪竇が後に頌して、雙收雙放、是くの如き宗要を爲したと云ふて居る。實に此の一句の中に、二人

の働きを頌し了つた。「仰山呵呵大笑す。也た權有り實有り、也た照有り用有り。佗の八面玲瓏たるが爲に、所以に用處、大自在を得たり」と、スルト仰山がウスン〳〵と笑ふた。コノ笑の中には、種々なものが籠つて居るぞ。諸人何んと看るか。權有り實有り、照有り用有りぢや。サー各々荊棘林を透過すると、コノ八面玲瓏たる大自由が得られるぞ。「這箇の笑、巖頭の笑と同じからず。巖頭の笑、毒藥有り、這箇の笑、千古萬古、清風凜凜地。雪竇の頌に云く」と、コノ終りの評は屆かぬ、好くない。南天棒は、「這箇の笑、巖頭の笑と、什麼と爲てか兩段と作る」とばかりで置きたい。巖頭の笑に毒藥有りでは、散々な騷きぢや。彼れは一體、僧の不會を笑ふたかサ、又た此の笑は、三聖を肯ふた笑ふサ、どちらが如何か。サー雪竇の頌を看よ。

雙收雙放若爲宗　○知他有幾人○八面玲瓏○將謂眞箇有恁麼事　騎虎由來要絶功　○若不是頂門上有眼肘臂下有符爭得到這裏○騎則不妨只恐倒下不得○不是恁麼人爭明恁麼事　笑罷不知何處去　○盡四百軍州覓恁麼人也難得○言猶在耳○千古萬古有清風　只應千古動悲風　○如今在什麼處○咄○既是大笑爲什麼却動悲風○大地黑漫漫

【和訓】雙收雙放若く宗を爲す。（○知んぬ他、幾く人か有る。○八面玲瓏。○將に謂へり、眞箇恁麼の事有らんと。）虎に騎る由來功を絶せんことを要す。（○若し是れ頂門上に眼有り、肘臂下に符有るにあらずんば、爭でか這裏に到ることを得ん。○騎ることは則ち妨げず、只だ恐くは倒下るることを得ざらんことを。○是れ恁麼の人にあらずんば、爭でか恁麼の事を明めん。）笑ひ罷んで知らず何れの處にか去る。（○盡四百軍州、恁麼の人を覓るに也た得難し。○言猶ほ耳に有り。○千古萬古清風有り。）只だ應に千古悲風を動すべし。（○如今什麼の處にか在る。○咄。○既に是れ大いに笑ふ、什麼と爲てか却つて悲風を動す。○大地黑漫漫。）

【提唱】

頌　コレから雪竇の頌ぢや。

「雙收雙放若く宗を爲す」と、惠寂と云ふた處は雙放ぢや、惠然と云ふた處は雙收ぢや。サー眞箇如是に、鎬を削つて、主客共に宗をなした。祖師門下の事は、常に斯う無うてはならぬ。本則の賓主相見こそ、實に宗要とも云ふべきぢや。又た互に本分を坐斷して、尾鰭を出すを待ち合ふ處なぞ、正に二龍の珠を爭ふやうに妙ぢや。能くもマア此のやうな修行が出來るものぢや。「若爲宗」が、「花抄」には「若く宗を爲す」と云ふてあるが、コレは「若く宗を爲す」と讀んだ方が好い。「人は言ふ井邊に龍を摸す、我は道ふ天の間第一松。朝に看夕に望んで興極らず、床頭枕下若く宗を爲す」と。コノ偈を看ても會る。コレは白隱が天明七年五月二十日、江戸の白木庵（今の至道庵ぢや）

に在つて、病臥しながら松を見て作つた偈ぢや。

「虎に騎る由來功を絕せんことを要す」と、虎のやうな學者をサ、氣力も用ゐず、さのみ骨も折らず、造作もなく騎り伏せるには、工夫や思慮があつては駄目ぢやぞ。無功用でなければコノ働きは出來ぬ。仰山がソレぢや。

「笑ひ罷んで知らず何れの處にか去る」と、仰山の大笑した處は如何ぢや。コリヤ嬉しうて笑ふたか悲しうて笑ふたか。サー笑つた落處は何處ぢや。諸人は落處を如何と看るぞ、道へ〳〵。雪竇の奴にも看えぬのかサ。

「只だ應に千古悲風を動すべし」と、サー千古の後も知音はあるまい。今時の者は多くは參禪の力はなし、只だ頭を搔くより外はないぢや。「悲風を動す」と云ふには、ドウも感に堪えたる斷腸の調があるぞ。コノ句には許多の工夫が有る。雪竇頌して此の句を作り得たりと云つて、歡喜してからに、雛僧をして茶を煎じ去らしめたと云ふことぢや。

著語 コレから圓悟の著語ぢや。

「雙收雙放若爲宗」――「知んぬ他、幾く人か有る」、仰山と三聖との相見の具合は、とても外では看られぬ、實に千歲一遇ぢや。コノ「知んぬ」は、知らずと云ふ意ぢや。「八面玲瓏」、何方から探つても自由自在ぢや。ソリヤ其の筈サ。悟りの底を拔き、生死の底を拔き切つて、迷悟の障り微塵もない、明々たる一團の珠ぢやもの。「將に謂へり、眞箇恁麼の事有らんと」、「雙收雙放若く宗を爲す」でなくて何んとせう。ソノやうなことも有るべいと思ふた。元來雙收も雙放も、サウむつかしいことぢやないと。コノ句は南天棒は取らぬ、いやな下語ぢやわい。

「騎虎由來要絕功」――「若し頂門上に眼有り、肘臂下に符有るにあらずんば、爭でか這裏に到ることを得ん」、頭の素天邊から、足の爪先迄溢れて居る眼を具してサ、上は非想非々想天より、下は水際奈落のドン底まで一ト目に見通し、手に奪命の神符を握る者でなくては、無功用の地に到つて、這箇の働きをすることは出來ぬ。「騎ることは則ち妨げず、只だ恐くは倒下ることを得ざらんことを」、滅多に騎り放いても、止め度を知らねば何んの役にも立たぬぞ。騎つて下りられなかつたら如何する。佛界には遊ぶとも、魔界に入ることが出來なりや駄目ぢや。先づ騎るには下りることを知れ、下りるには騎ることを知れ。「是れ恁麼の人にあらずんば、爭でか恁麼の事を明めん」、虎に出逢ふても、猫を取り扱ふやうな雪竇なればこそ、二人の魂膽を見拔いて、斯くの如く頌した。

「笑罷不知何處去」――「盡四百軍州、恁麼の人を覓るに也た得難し」、サー金の草鞋で四百軍州を探し廻つても、呵々大笑し去つた仰山のやうな人は居るまいぞ。宋の趙宗の時、天下を區劃して四百軍州としたから斯う云ふた。「言猶ほ耳に在り」、雪竇は、「何れの處にか去る」とて、何處へやら行きやつたやうに云やるが、仰山の笑ひ聲は、今猶ほ耳に殘つて居る。「千古萬古清風有り」、コノ笑

ひ聲は千古萬古の清風ぢや。今日に至つて聞いても、スヽッコイぞ。

「只應千古動悲風」――「如今什麼の處にか在る」、サー其の悲風を動する底は、今何處に居るぞ。

「咄」、エー此の馬鹿奴と、雪竇を咄した。「既に是れ大に笑ふ、什麼と爲てか却つて悲風を動す」、仰山が笑ふたのに、雪竇は何んとして「悲風を動す」と云ふたぞと。コノ下語も面白くない。「大地黑漫漫」、是れ悲風を動する底ぞ。いよ〳〵落處の知り人がない。

雙收雙放若爲宗放行互爲賓主仰山云汝名什麼聖云我名惠寂是雙放仰山云惠寂是我聖云我名惠然是雙收其實是互換之機收則大家收放則大家放雪竇一時頌盡了也佗意道若不放收若不互換爾是爾我是我都來只四箇字因甚却於裏頭出沒卷舒古人道爾若立我便坐爾若坐我便立若也同坐同立二俱瞎漢此是雙收雙放可以爲宗要騎虎由來要絕功有如此之高風最上之機要騎要下便下據虎頭亦得收虎尾亦得三聖仰山二俱有此之風笑罷不知何處去且道佗笑箇什麼直得清風凜凜爲什麼未後却道只應千古動悲風也是死而不弔一時與爾注解了也爭奈天下人啗啄不入不知落處縱是山僧也不知落處諸人還知麼

【和訓】雙收雙放若く宗を爲すと。放行して互に賓主と爲る。仰山云く、汝、名は什麼ぞ。聖云く、我名は惠寂と。是れ雙放。仰山云く、惠寂は是れ我。聖云く、我名は惠然と。是れ雙收。其れ實に是れ互換の機。收むる則んば大家收め、放つ則んば大家放つ。雪竇一時に頌し盡し了れり。佗の意に道く、若し放收せず、若し互換せずんば、爾は是れ爾、我は是れ我と。都來只だ四箇の字、甚んに因つてか却つて裏頭に於て出沒卷舒する。古人道く、爾若し立てば我便ち坐す、爾若し坐すれば我便ち立つ。若し也た同坐同立せば、二り俱に瞎漢と。此れは是れ雙收雙放、以つて宗要と爲す可し。虎に騎る由來功を絕せんことを要すと。此くの如きの高風、最上の機要有り。騎らんと要すれば便ち騎り、下りんと要すれば便ち下る。虎頭に據ることも亦た得たり、虎尾を收むることも亦た得たり。三聖仰山二り俱に此の風有り。笑ひ罷んで知らず何れの處にか去ると。且ら く道へ、佗、箇の什麼をか笑ふ。直に得たり、清風凜凜たることを。什麼と爲てか末後に却つて道ふ、只だ應に千古悲風を動すべしと。也た是れ死して弔せず、一時に爾が與に注解し了れり。爭奈せん、天下の人、啗啄すれども入らず、落處を知らざることを。縱ひ是れ山僧も也た落處を知らず、諸人還つて知る麼。

【提唱】コレから圜悟の評ぢや。「雙收雙放若く宗を爲すと。放行して互に賓主と爲る」の六字は衲は取らぬ。「花抄」には、コノ「行」の字は穩當でないから、「收」の字に直して、放收とするが好いとあるが、ソレでも衲は氣に契はぬ。「仰山云く、汝、名は什麼ぞ。聖云く、我名は惠寂と。是れ雙放」と、コレを雙放と云ふコノ評は其の意を得ぬ。雙收雙放の譯を知らぬ者が添へたのか、但しは板の誤りか。「花抄」、「紫抄」共に「收」として、當に福本に從ふべし、張本に依らば本則に合はぬと云ふてある。「仰山云く、惠寂は是れ我。聖云く、我名は惠然と。是れ雙收」と、サー此の座敷が全體彌陀ぢやがサ、如何ぢや。

コレも先の方を收とすれば、此處は「放」にして看るが好い。「其れ實に是れ互換の機。收むる則んば大家收め、放つ則んば大家放つ。雪竇一時に頌し盡し了れり」と、コノ働きは實に賓主互換の機ぢや。收める時は天地を收め、放つ時は天地を放つ。イヤハヤ自由なものぢや。ソレを雪竇が、一句に頌し盡し了つた。「佗の意に道く、若し放收せず、若し互換せずんば、爾は是れ爾、我は是れ我と」、雪竇の意ではサ、若し放收もせず、又た互換もせなけりや、お前はお前、己は己で、聖は益々聖、愚は益々愚ぢや。コリヤ惡差別、惡平等と云ふものぢや。「都來只だ四箇の字甚んに因つてか却つて裏頭に於て出沒卷舒する」と、惠寂の惠然のと、卽ち雙收の雙放のと、畢竟此の四字が、二人の問答の中で、出たり入つたり、飛んだり跳ねたりして居るぢや。「古人道く、爾若し立てば我便ち坐す、爾若し坐すれば我便ち立つ。若し也た同坐同立せば、二り俱に瞎漢と」、コレは首山省念禪師の語ぢや。サー主となるときんば全體主、客となるときんば全體客。又た勝つときんば總に勝ち、負くるときんば總に負くぢや。此の首山の語には最も仔細があるぢや。具眼の者なら、ソノ有り難きを知らうぞ。此の語、今日知音はない、玆に引證すべき語ぢやない。臨濟の四料簡、三玄三要は、悉く此の語の中に收在して居る。首山、此の語に依つて、臨濟の宗風を挑起したのぢや。「此れは是れ雙收雙放、以つて宗要と爲す可し」と、仰山、三聖の出合ひは實に溈山下の宗要ぢや。「虎に騎る由來功を絕せんことを要すと。此くの如きの高風、最上の機要有り。騎らんと要すれば便ち騎り、下りんと要すれば便ち下る。虎頭に據ることも亦た得たり、虎尾を收むることも亦た得たり。三聖仰山、二り俱に此の風有り」と、仰山の手元には、コノ無功用の働があればこそ、騎りも下りも自由に出來る。コレは仰山ばかりぢやない。三聖にもコノ働きがあるから、コノやうな見事な出合ひが出來るぢや。サー諸人、無功用の處は何處ぢや。コリヤ遠眼鏡でも見えるものぢやないぞ。「笑ひ罷んで知らず何れの處にか去ると。且らく道へ、佗、箇の什麼をか笑ふ。直に得たり、淸風凛凛たることを。什麼と爲てか末後に却つて道ふ、只だ應に千古悲風を動ずべしと」、サー仰山は何を笑ふたかサ、此のウヅ高い笑ひも、知つた同士ならば、いとも凉しからう。ソレをサ、末後に「悲風を動す」と云ふたは、ドウ云ふ譯か。笑つた處、悲風を動すとは、ナカ〳〵大難處ぢやぞ。「也た是れ死して弔せず、一時に爾が與に注解し了れり」と、コリヤ一刀三禮の名作ぢや。「死して弔せず」と拋り出して、一時に注脚するぞ。サー見よと云ふたのぢや。是れ五祖(法演)下の骨髓を得た圜悟一代の筆力、驚く可く恐る可しぢや。コレで雪竇を粉微塵にしたかサ、梵天へ托上したかサ。雪竇も嘸や歡喜したらう。「禮記」に「死して弔せざる者三、畏、壓、溺、是れなり」と。其の註には、「身を輕んじて孝を忘るゝを謂ふ」とある。つまりコノ三つは皆な正命ぢやない、ぢやから弔はぬ。畏と云ふのは、戰場などで勇無くして殺されることぢや。壓とは、物に壓せられて死ぬることぢや、首縊りなどはコノ中か。溺は云ふまでもなく溺死ぢや。コノ評は南天棒も殊の外賞翫ぞ。「爭奈せん、天下の人、

啗啄すれども入らず、落處を知らざることを」と、大笑の落處に至つては、天下の衲僧も齒が立たぬわい。「縱ひ是れ山僧も也た落處を知らず、諸人還つて知る麼」と、コノ評は拙い、コンナことは云はぬ方が好い。恐らくは火後の添入か。

注釈 〔臨濟遷化の問答〕臨濟遷化に臨んで垂示して云く、吾れ去つて後、吾が正法眼藏を滅することを得ざれと。三聖出でて爭でか敢て和尚の正法眼藏を滅却せん。濟云く、已後人有つて倘に問はゞ作麼生。三聖便ち喝す。濟云く、誰れか知らん吾が正法眼藏、這の瞎驢邊に向つて滅却することを。三聖便ち禮拜す。〔コナシ部屋〕穀物をコナス處。〔病僧堂〕延壽堂とも云ふ。〔維那〕僧堂に於ける取締りの役名なり。〔到り得還り來つて別事無し云々〕東坡居士の詩なり。曰く、「廬山の烟雨浙江の潮、到らず千般恨未だ消せず、到り得還り來つて別事無し、廬山の烟雨浙江の潮」と。〔スヽツコイ〕涼しいと云ふこと。

第六十九則　南泉拜忠國師

【南泉拜忠國師】

垂示云、無啗喙處、祖師心印狀、以鐵牛之機、透荆棘林、納僧家如紅爐上一點雪、平地上七穿八穴、則且止不落寅緣、又作麼生試擧看

【和訓】垂示に云く、啗啄の處無し、祖師の心印、狀ち鐵牛の機に似たり。荆棘林を透る納僧家、紅爐上一點の雪の如し。平地上七穿八穴なることは且らく止く。寅緣に落ちざる、又た作麼生。試に擧す、看よ。

【提唱】第六十九則、「南泉拜忠國師」と、コノ則は、宗門、只だ知音を貴び、言句作處、外人の知る可からざるを明すのぢや。

「垂示に云く、啗啄の處無し、祖師の心印、狀ち鐵牛の機に似たり」と、祖師の心印、鐵牛の機に似たりとは如何ぢや。實にハヤ、心印に向つては、嘴を下すとはならぬぞ。サー此の心印、佛やら祖やら、祖師門下の大事に至つては、知解了簡ぢや屆かぬ、とても伺はれるものぢやない。先づ無字隻手をシッカリ手に入れろ。サウあらうぞならば、祖師の心印、鐵牛の機に似たることも知らうぞ。「荆棘林を透る納僧家、紅爐上一點の雪の如し」と、サー末後の一著子を透過して看よ。丁度大火爐の中へ雪の一片を落したやうなもので、今時那邊の沙汰は全く無くなる。ぢやから沒蹤跡ぢや、尋ぬるに處無しぢや。「平地上七穿八穴なることは且らく止く」と、コノ能事を了すれば、平湛々の上、縱横無盡に働けるが、今はソレは且らく措き。「寅緣に落ちざる、又た作麼生。試に擧す、看よ」と、心にも言葉にも及ばぬ處は如何。横目から沙汰の知れないことがあるがサ、諸人は切めて寅緣に落ちない程のことでも出來るか如何ぢや。「寅緣」とは依倚と云ふので、物に依ることぢや。サー本

則を看るが好い。

擧南泉歸宗麻谷同去禮拜忠國師至中路　○三人同行必有我師

○有什麼奇特○也要辨端的　**南泉於地上畫一圓相云道得即去**　○無風起浪○也要人知○擲却陸沈船○若不驗過爭辨端的　**歸宗於圓相中坐**　○一人打鑼○同道方知　**麻谷便作女人拜**　○一人打鼓三箇也得　**泉云恁麼則不去也**　○半路抽身是好人○好一場曲調○作家作家　**歸宗云是什麼心行**　○賴得識破○當時好與一掌○孟八郎漢

【和訓】擧す。南泉、歸宗、麻谷、同じく去つて、忠國師を禮拜せんとす。中路に至つて。（○三人同行するときは、必らず我師有り。○什麼の奇特か有らん。○也た端的を辨ぜんことを要す。）南泉、地上に於て一圓相を劃して云く、道ひ得ば即ち去らん。（○風無きに浪を起す。○也た人の知らんことを要す。○陸沈の船を擲却す。○若し驗過せずんば、爭でか端的を辨ぜん。）歸宗、圓相の中に於て坐す。（○同道方に知る。）麻谷便ち女人拜を作す。（○一人鼓を打てば、三箇も也た得たり。）泉云く、恁麼ならば則ち去らじ。（○半路に身を抽んず、是れ好人。○好し一場の曲調。○作家作家。）歸宗云く、是れ什麼の心行ぞ。（○賴に識破することを得たり。○當時好し一掌を與ふるに。○孟八郎の漢。）

【提唱】

本則　コレから本則ぢや。

「擧す。南泉、歸宗、麻谷、同じく去つて忠國師を禮拜せんとす。中路に至つて」と、南泉の普願、歸宗の智常、麻谷の寶徹、コノ三人は共に馬祖の法嗣ぢや。何れも是れサ、お歴々揃ひぢや。ソノ頃、馬祖だの、石頭なぞは、江西、湖湘に在つて、盛んに雲水を接得して居られたが、又た都では、六祖の法嗣である南陽慧忠國師が、大衆を接して居られて、ナカ〳〵評判が高い、ソコデ一度此の忠國師に見えざる者は、衲子でないやうに云ふたものぢや。實にハヤ天下の龍門ぢや。ソレぢやから今ま此の、普願、智常、寶徹の三大老も、都へ上つて忠國師を拜しやうと、三人連れ立つて出掛けて、途中まで來た。ソノ時南泉が、放過するか如何かと、歸宗、麻谷の二大老を試したのぢや。古人は誠に道に忠實ぢや。今時の行脚のやうに、遊山半分ぢやないぞ。一擧一倒、全く潛行密用したものぢや。

「南泉、地上に於て一圓相を劃して云く、道ひ得ば即ち去らん」と、三人出掛けた途中でサ、南泉の奴、行つても行かないでもと、少と小便心で、圓相なぞを持ち出した。コリャ南泉の家風ぢや。彼は猫を提げてからに、道ひ得ば斬らずと云ふたが、今日は、道ひ得ば連れ立つて國師の處へ行かうと出た。國師の處へ行きやはつて、何をしなさるかい。

「歸宗、圓相の中に於て坐す」と、フラクサリ者め、圓相の中にドッカと坐して、忠國師に成りすました。此奴等只の道連れぢやない、嗚呼二師の妙手を見るに堪へたりぢや。併しサ、是りや情解すまいぞ。

「麻谷便ち女人拜を作す」と、是れ國師相見底ぢや。女人拜をするとは、嗚呼見事なものぢや。サー諸人は此處を如何見るか。歸宗は坐り、麻谷は拜をする、人事ぢやないぞ、シッカと看よ。「女人拜」と云ふのは、頭を地に著けないで拜するを云ふ。粧飾を損ずるを恐れて、頭を地に著けず、首と肩を搖して躍るやうにやるのぢや。

「泉云く、恁麼ならば則ち去らじ」と、ソンなら行くのはいやぢやと。是を國師已に相見了也と見ては、常情に墮つるぞ。サー座に陞つて、殊に一句、今古に耀くを看よ。玆を篤と呑み込め、大事が有るぞ。南泉がサ、氣に入れば行かう、氣に入らなきや行かぬと云ひながら、此處で行くのは止しぢやとは如何ぢや。南天棒も、此の語には讃歎も及ばずぢや。

「歸宗云く、是れ什麼の心行ぞ」と、エー行くの、行かぬのと、什麼のたわごとを吐くと。コリヤ又た、佛眼見れども見えず、魔外も窺ふに路無しぢや。各々此の心行の句に參ぜよ。

著語 コレから圜悟の著語ぢや。

「擧南泉歸宗麻谷同去禮拜忠國師至中路」――「三人同行するときは必らず我師有り」、好い同行ぢやが、中に厄介者もあるべいサ。ソレが南泉ぢやなぞと邪解せまいぞ。「什麼の奇特か有らん」、行き廻つたとて、格別の奇特もあるまいにサ。チヘマの皮ぢや。ガイに外を尋ねるな。「也た端的を辨ぜんことを要す」、三人共に、互に腕前を見んと掛つた。三人の働きを看よ。

「南泉於地上畫一圓相云道得卽去」――「風無きに浪を起す」、行くなら行くが好いのにサ、南泉の土根性の惡るさ、途中になつてから、去るの、去らぬのと、横浪を打ち掛けた。「也た人の知らんことを要す」、併し南泉が一圓相を畫した譯は、人々知らずばなるまいぞ。「陸沈の船を擲却す」、コリヤ圓相に比して云ふ。ソンナ破れ舟は不用ぢや、陸に捨てたと。無功用の義ぢや。若し驗過せずんば爭でか端的を辨ぜん」、國師を禮拜せねばならぬものやら、禮拜せなくても好いものやら、互に一句云ふてみりや知れることぢや。ソコデ南泉が斯う切り出して撿定して、二人の腹のドン底の淺深麁細を知らうとした。

「歸宗於圓相中坐」――「一人鑼を打す」、「同道方に知る」、厄介者と厄介者と拍子を合せた。「鑼」とは銅鑼で、軍器ぢや。

「麻谷便作女人拜」――「一人鼓を打てば、三箇も也た得たり」、厄介者め、トウ〳〵三人共に舞ひ始めた。同道唱和ぢや。

「泉云恁麼則不去也」――「半路に身を抽んず、是れ好人」、南泉は輪抜けの名人ぢや、途中で身

拔けをした。ナカ〳〵手際なものぢやと、南泉を褒めたのぢや。「好し一場の曲調」、コリャ面白い。一人に鑼を打たせ、一人に鼓を打たせて、囃し立てさせる南泉の曲調べぢや。「作家作家」、舞ひ人も歌ひ人も好く揃ふた。作家々々。

「歸宗云是什麼心行」――「賴に識破することを得たり」、歸宗はチャンと南泉の手元を知り切つて居るから、南泉の急處へ針を指したぢや。「當時好し一掌を與ふるに」、歸宗、ソンナことでは手ぬるい。心行なぞと云はずに、南泉が去らじと云ふた刹那に、南泉の頰桁を宿替させる程に、何故打たぬぞ。圜悟が若し歸宗なら許さぬ。「孟八郎の漢」、歸宗はもう少つとシッカリして居さうなものぢやが、案外にシャラクラ者ぢやわいと。コリャ歸宗を抑下したのぢや。

當時馬祖盛化於江西石頭道行於湖湘忠國師道化於長安他親見六祖來是時南方擎頭帶角者無有不欲升其堂入其室若不爾爲人所恥這老漢三箇欲去禮拜忠國師至中路做這一場敗缺南泉云恁麼則不去也旣是一一道得爲什麼却道不去且道古人意作麼生當時待他道恁麼則不去也劈耳便掌看他作什麼伎倆萬古振綱宗只是這些子機要所以慈明道要牽只在索頭邊撥著點著便轉如水上捺葫蘆子相似人多喚作不相肯語殊不知此事到極則處須離泥離水拔楔抽釘儞若作心行會則沒交涉古人轉變得好到這裏不得不恁麼須是有殺有活看他一人去圜相中座一人作女人拜也甚好南泉云恁麼則不去也歸宗云是什麼心行孟八郎漢又恁麼去也他恁麼道大意要驗南泉南泉尋常道喚作如如早是變了也南泉歸宗麻谷却是一家裏人一擒一縱一殺一活不妨奇特雪竇頌云

【和訓】當時馬祖、化を江西に盛んにす。石頭の道、湖湘に行はる。忠國師の道、長安に化す。他は親しく六祖に見え來る。是の時南方に頭を擎げ角を帶ぶる者の、其の堂に昇り其の室に入らんと欲せざる有ると無し。若し爾らざれば、人の爲に恥かしめらる。這の老漢三箇、去つて忠國師を禮拜せんと欲す。中路に至つて、這の一場の敗缺を做す。南泉云く、恁麼ならば則ち去らじと。旣に是れ一一道ひ得たり、什麼と爲てか却つて道ふ、去らじと。且らく道へ、古人の意作麼生。當時他の、恁麼ならば則ち去らじと道はんを待つて、劈耳に便ち掌して、他、什麼の伎倆を作すとか看ん。萬古綱宗を振ふ。只だ是れ這の些子機要なり。所以に慈明道く、牽かんと要すれば只だ索頭邊に在つて撥著す。點著すれば便ち轉ず、水上に葫蘆子を捺すが如くに相ひ似たりと。人多く喚んで、相ひ肯はざる語と作す。殊に知らず、此の事、極則の處に到つて、須らく泥を離れ水を離れ、楔を拔き釘を抽くべきことを。儞若し心行の會を作さば、則ち沒交渉。古人轉變し得て好し、這裏に到つて恁麼ならざることを得ず。須らく是れ殺有り活有るべし。看よ、他の一人は、圜相の中に去つて坐し、一人は女人拜を作す。也た甚だ好し。南泉云く、恁麼ならば則ち去らじと、歸宗云く、是れ什麼の心行ぞと。孟八郎の漢、又た恁麼にして去るや。他、恁麼に道ふ、大寧、南泉を驗んことを要す。南泉尋常道ふ、喚んで如如と作すも、早く是れ變じ了れりと。南泉、歸宗、麻谷、却つて是れ一家裏の人。一擒一縱、一殺一活、妨げず奇特なることを。雪竇、頌して云く。

【提唱】コレから圜悟の評ぢや。「當時馬祖、化を江西に盛んにす。石頭の道、湖湘に行はる。忠國

師の道、長安に化す」と、其の頃、馬大師は江西に、石頭は湖南に、又た忠國師は都の長安に在つて、各々接衆に、日も是れ足りなんだ位ぢや。「他は親しく六祖に見え來る。是の時南方に頭を擎げ角を帶ぶる者の、其の堂に升り其の室に入らんと欲せざる有ること無し」と、忠國師は六祖の法嗣ぢや。六祖以來「南方の佛法」と云ふ名がある位で、其の頃、禪宗の行脚は、總べて南方に限られて居つた。妙に又た南方に有力の大德が多かつたのぢや。コノ忠國師も南方禪の歴々ぢやから、機有る學者は、皆な一度は忠國師に參じない者はなかつた。「若し爾らざれば、人の爲に耻かしめらる」と、若しも國師に逢はねば、衲子の仲間には入れられなんだ、ナンとなく肩身が狹い。ソコデ、「這の老漢三箇、去つて忠國師を禮拜せんと欲す。中路に至つて、這の一場の敗缺を做す」と、南泉、歸宗、麻谷の三大老が、一つ忠國師を訪ふて、其の腕前を見屆けやうとして出掛けてからに、中途に至つて大騒がオッ始つたのぢや。「南泉云く、恁麼ならば則ち去らじ」と、此の語は讃歎も及ばぬぢや。「既に是れ一一道ひ得たり、什麼と爲てか却つて道ふ、去らじと。且らく道へ、古人の意作麼生」と、南泉が始め、道ひ得ば、連れ立つて行かうと云ふたからサ、歸宗も麻谷も、ソレ〳〵に働いたのに、却つて行くのはいやぢやとは、一體南泉の意は如何なことぢやらう。「當時他の、恁麼ならば則ち去らじと道はんを待つて、劈耳に便ち掌して、他、什麼の伎倆を作すとか看ん。萬古綱宗を振ふ。只だ是れ這の些子機要なり」と、南泉が、ソンなら行かぬと云ふたソノ時に、南泉の顏がユガム程に打ちノメいてからに、彼奴の腕前を見たらばサ、「萬古綱宗を振ふ」で、好い見物であつたらうに、殘念なことぢやつた。併しサ、「是れ什麼の心行ぞ」と云ふた處、佛祖も奈何ともせざる底、是れ祖々傳來の機關樞要ぢや。「所以に慈明道く、牽かんと要すれば只だ索頭邊に在つて撥著す。點著すれば便ち轉ず、水上に葫蘆子を捺すが如くに相ひ似たりと」、コリヤ慈明楚圓の牧牛の歌ぢや、「恁麼ならば則ち去らじ」と云ふ類に引いたのぢや。ソノ牧牛童の歌の略に、「首を回らして看れば平田濶し、四方に放去して攔遏を休めよ。一切拘ること無くして意に任せて遊ぶ、收めんと要すれば只だ索頭を把つて撥け。小牛兒、毛に順つて捋づ、恐らくは高坡に上つて四蹄脱す。日已に高し草を餽むことを休めよ、鼻頭を揑定して老少と無く。一時に牽いて圈中に向つて眠る、泥に和して看よ渠が東西に倒るゝことを」と。「僧寶傳」の第二十一卷にある。サー此の牧牛は、味噌をすりながらもなるぞ。鼻面を取つて引ッ立て〳〵すれば進む、止めやうとすれば直に止まる。引くも遣るも心の儘ぢや。水の上に瓢簞を浮かしたやうなもので、根が張らぬから、彼方へ遣るも此方へ引くも自由ぢや、使ひ人次第ぢや。「人多く喚んで、相ひ肯はざる語と作す。殊に知らず、此の事、極則の處に到つて、須らく泥を離れ水を離れ、楔を拔き釘を抽くべきことを」と、コノ已下の評は未審しい。歸宗も麻谷も共に肯はぬの、極則の處に到れば、粘著せぬのと、コリヤをかしい。コレでは拔けぬ、突き放いてこそ拔けべい。「倘若し心行の會を作さば、則ち沒交渉」と、計較思量したら何ん

にもならぬ。「古人轉變し得て好し、這裏に到つて恁麼ならざることを得ず」と、南泉も好く轉じた。コリヤ「恁麼ならば則ち去らじ」と云ふた處を指したのぢや。斯うなくては叶はぬぞ。何故なれば、國師に相見はトックに濟んだ程にサ。「須らく是れ殺有り活有るべし。看よ、他の一人は、圓相の中に去つて坐し、一人は女人拜を作す。也だ甚た好し」と、コノ「恁麼ならば則ち去らじ」と云ふ語の中には、殺も活も有るぞ。實にハヤ、圓相の中に坐る奴もあれば、又た禮拜をする奴もある。何れも是れも拔け目のない者ばかりぢや。「南泉云く、恁麼ならば則ち去らじと。歸宗云く、是れ什麼の心行ぞと。孟八郎の漢、又た恁麼にし去るや」と、南泉の、去らじと云ふに就いて、歸宗が、是れ什麼の心行ぞと、コレにや賞有り罰有りぢやが、此處が圜悟の氣に入らぬ處ぢや。から圜悟、齒痒く思ふてからに、法則に拘らず、エー此のドヂクヂ奴と、抑下して云ふた。「他、恁麼に道ふ、大意、南泉を驗んことを要す」と、歸宗が此處で什麼の心行ぞと云ふたのは、南泉を試んとしたのぢやと、コンナことが入るものか。「南泉尋常道ふ、喚んで如如と作すも、早く是れ變じ了れりと」、此の本則は各々一邊に滯らず、轉變自在ぢやから、故に此の語を引き來つたのぢや。本則に些子の瑕（黴の玉也）有るを引き得たがサ、未だ此の則に徹せざる處がある。此の次ぎの語に旨有るを以つて、之れを引いたのかサ。「傳燈」の八の南泉の章に、「師一日衆に示して云く、箇の如如と道ふも、早く是れ變じ了れり。今時の衲僧、須らく異類の中に向つて行くべしと。歸宗云く、畜生の行を行すと雖も、畜生の報を得ずと。師の云く、孟八郎、又た恁麼にし去れり」とある。サテ「如如」と、何んの如如かサ、頰桁を廻せば好いに。ソンなら石佛のやうに默るが好いか。「如如」とは不變のことぢや。「南泉、歸宗、麻谷、却つて是れ一家裏の人。一擒一縱、一殺一活、妨げず奇特なることを。雪竇、頌して云く」と、此の三人は、皆な是れ馬祖下の人々ぢや。やり手のお揃ひぢやから、爲ることも亦た見事ぢや。サテ雪竇の頌を看よ。

由基箭射猿　○當頭一路誰敢向前○觸處得妙○未發先中　遶樹何太直　○若不承當爭敢恁麼○東西南北一家風○已周遮多時也　千箇與萬箇　○如麻似粟○野狐精一隊○爭奈得南泉何　是誰曾中的　○一箇半箇更沒一箇○一箇也用不得　相呼相喚歸去來　○一隊弄泥團漢○不如歸去好○却較些子　曹溪路上休登陟　○太勞生○想料不是曹溪門下客○低低處平之有餘○高高處觀之不足　復云曹溪路坦平爲什麼休登陟　○不唯南泉半路抽身雪竇亦乃半路抽身○好事不如無○雪竇也患這般病痛

【和訓】 由基が箭猿を射る。（○當頭の一路誰れか敢て向前せる。○觸處妙を得たり。○未だ發せざるに先づ中たる。）樹を遶ること何んぞ太だ直なる。（○若し承當せずんば、爭でか敢て恁麼ならん。○東西南北一家風。○已に周遍なること多時。）千箇と萬箇と。（○麻の如く粟に似たり。○野狐精の一隊。○南泉を得ることを爭奈何せん。）是れ誰れか曾つて的に中たる（○一箇半箇、更に一箇沒し。○一箇も也た用不得）相ひ呼び相ひ喚んで歸去來。（○一隊、泥團を弄する漢。○如かず歸り去つて好からんには。○却つて些子に較る。）曹溪路上登陟することを休む。（○太勞生。○想ひ料るに、是れ曹溪門下の客にあらず。○低低の處、之れを平ぐるに餘り有り。○高高の處、之れを觀るに足らず。）復た云く、曹溪路担平、什麼と爲てか登陟することを休む。（○唯だ南泉半路に身を抽んづるのみにあらず、雪竇亦た乃ち半路に身を抽んず。○好事も無きには如かず。○雪竇也た這般の病痛を患ふ。）

【提唱】

頌 コレから雪竇の頌ぢや。

「由基が箭猿を射る」と、三人の機輪、轉變自在なるとを、此の句と下の句との二句に頌出した。コリヤ絶妙好辭ぢや。南泉も由基のやうに弓の名人ぢや。

「樹を遶ること何んぞ太だ直なる」と、南泉は南泉、歸宗は歸宗、麻谷は麻谷と、三人とも趣は別でも、端的は一直ぢや。サー猿が遶れば矢も遶る、遶る矢を如何して直と云ふたかサ。遶るは別ぢやが、矢壺は違はぬ。

「千箇と萬箇と」、古今弓取りの名人は多いが、その中でも上手は誰かサ。南泉か、歸宗か、麻谷か。

「是れ誰れか曾つて的に中たる」と、歸宗や麻谷のやうに、仕了せたは稀れぢや。歸宗が圓相の中に坐したは、須彌山をオッ立てたやうで、日月も照さぬ。又た麻谷の拜した處の見事さは、揚貴妃も及ばぬぞ。

「相ひ呼び相ひ喚んで歸去來」と、國師の處へ行くのは止めぢや、もう歸らう〳〵と、南泉が先に立つて、エンサカホイと聲々に相ひ扶けてからに、丁度山の難處を越す時、お互に聲を掛け合ふて行くやうに歸つた。

「曹溪路上登陟することを休む」と、已に國師の寢處まで踏ン込んで徹し了つたぞ。諸人はドウ此の寢處へ踏ン込むか、佛祖と雖もナカ〳〵陟れぬぞ。國師は六祖下ぢやから、「曹溪」の字を用ひた。「陟」はチョクで、のぼると訓ずる。

「復た云く、曹溪路担平、什麼と爲てか登陟することを休む」と、雪竇、胸中に百萬の軍馬を繫ぐ、風流の一句、實にハヤ天に倚つて雪を照すぢや。サー世間一統に、前後左右皆な曹溪の一滴水ぢや、所謂是の法は平等にして、高下有ること無し、何故國師の膝元へ行かないのかと講ずるがザ、路が平々坦々ぢやとて、何にも行くには及ばんぢやないか。ソリヤ如何してか。疾に國師の寢處に遊んでをる。「樹を遶ること何んぞ太だ直なる」と云ふ處で、チャンと射止めてあるからサ。

著語 コレから圜悟の著語ぢや。

「由甚箭射猿」――「當頭の一路誰れか敢て向前せる」、雪竇の此の句、サー斯う云ふも老婆ぢやけれ共、コノ箭先に向ふ者はあるまい。「觸處妙を得たり」、處として中らずと云ふことはない。サー行住坐臥、少しも射外しはない、ドウ射ても黑星を射拔くぢや。「未だ發せざるに先づ中る」、空劫已前に早や中つて居るぞ。妙處は實に此處にあるぢや。

「遠樹何太直」――「若し承當せずんば、爭でか敢て恁麼ならん」、三人とも妙處に徹せねば、どうして斯う行くものか。又た三人に妙處が無ければ、雪竇も斯うは頌せられぬ。「東西南北一家風」、三人共に、一大圓相の佛祖城中に踏み込むぞ。「已に周遮なること多時」、樹を遠ると云ふのが、何んで「太だ直なる」ぢや。樹を遠ると云へば、エー廻り遠い。

「千箇與萬箇」――「麻の如く粟に似たり」、思ふ矢壺を射通さぬ者はない。雪竇が「千箇と萬箇と」云ふ通り、澤山有るなあ。「野狐精の一隊」、千箇萬箇、皆な野狐の精ぢや。何奴も此奴も、怪しい奴等計りぢやわい。「南泉を得ることを爭奈何せん」、併し南泉には困つらうぞ。何故なれば、「恁麼ならば則ち去らじ」と云ふた味ひは、何んとも云はれぬからサ。

「是誰會中的」――「一箇半箇、更に一箇沒し」、一人や半人は無いでもない。イヤ一箇も無い、たとへ南泉でも本分から云へば、中つたとは云はれぬぞ。「一箇も也た用不得」、中つた者が有つたにしても、何の役にも立たぬ。

「相呼相喚歸去來」――「一隊、泥團を弄する漢」、悟り臭いガラクタ共ばかりぢや。「如かず歸り去つて好からんには」、さうぢや〳〵、皆んな歸つて晝寢でもしたが好い。「却つて些子に較る」、本分の事とは思へられぬが、ソレでも國師の處へ行くより、途中から歸つた方が未だ增しかサ。

「曹溪路上休登陟」――「太勞生」、三人共出掛けて來て又た歸るとは、エライくたびれものぢや。

「想ひ料るに、是れ曹溪門下の客にあらず」、三人とも尤もぢやがサ、休むと云へば、どうやら別に路があるやうなぞ。途中から歸る處を見ると、とても曹溪の水の飯める奴等ぢやない。「低低の處、之れを平ぐるに餘り有り」、曹溪の路は、高い處から見れば低い〳〵。併し低い處から見れば高い〳〵、どうも足場が惡い。疋上足らず、疋下餘り有りぢや。「高高の處、之れを觀るに足らず」、サー此の曹溪の路は、坦平なる處孤危嶮峻、孤危嶮峻なる處甚だ坦平ぢや。

「復云曹溪路坦平爲什麼休登陟」――「唯だ南泉半路に身を抽んづるのみにあらず、雪竇も亦た乃ち半路に身を抽んず」、南泉め、途中で止めにしたがるがサ、雪竇も亦た中途で身を拔いた。同じやうな奴等ぢやわい。「好事も無きには如かず」、曹溪に陟るがものはない、無事に晝寢でもせよ。サー曹溪は何處ぢや、外ではない、コノ座敷が曹溪ぢやと。サリとは雪竇、利巧がましいぞ。「雪竇也た這般の病痛を患ふ」、雪竇も祖々傳來の傳死病に罹つて、熱に浮かされたわいと。コリヤ圜悟の腕前

で云ふたぢや。

由基箭射猿遶樹何太直由基乃是楚時人姓養名叔字由基時楚莊王出獵見一白猿使人射之其猿捉箭而戲勅群臣射之莫有中者王遂問群臣群臣奏曰由基者善射遂令射之由基方彎弓猿乃抱樹悲號至箭發時猿遶樹避之其箭亦遶樹中殺此乃神箭也雪竇何故却言太直若是太直則不中既是遶樹何故却云太直雪竇借其意不妨用得好此事出春秋有者道遶樹是圓相若眞箇如此蓋不識語之宗旨不知太直處三箇老漢殊途同歸一揆一齊太直若是識得他去處七縱八横不離方寸百川異流同歸大海所以南泉道恁麼則不去也若是衲僧正眼覷著只是弄精魂若喚作弄精魂却不是弄精魂五祖先師道他三人是慧炬三昧莊嚴王三昧雖然如此作女人拜他終不作女人拜會雖畫圓相他終不作圓相會既不恁麼會又作麼生會雪竇道千箇與萬箇是誰曾中的能有幾箇百發百中相呼相喚歸去來頌南泉道恁麼則不去也南泉從此不去故云曹溪路上休登陟滅却荆棘林雪竇把不定復云曹溪路坦平爲什麼休登陟曹溪路絶塵絶迹露躶躶赤洒洒平坦坦儵然地爲什麼却休登陟各自看脚下

【和訓】由基が箭猿を射る、樹を遶ること何んぞ太だ直なると。由基は乃ち是れ楚の時の人。姓は養、名は叔、字は由基。時に楚の莊王、出でて獵す。一の白猿を見て、人をして之れを射せしむ。其の猿、箭を捉へて戲る。群臣に勅して之れを射せしむるに、中つる者の有ること莫し。王遂に群臣に問ふ。群臣奏して曰く、由基と云ふ者、善く射ると。遂に之れを射せしむ。由基、弓を彎くに方つて、猿乃ち樹を抱いて悲號す。箭の發する時に至つて、猿、樹を遶つて之れを避く。其の箭も亦た樹を遶つて、中つて殺す。是れ乃ち神箭なり。雪竇、何が故ぞ、却つて言ふ、太だ直なりと。若し是れ太だ直ならば、則ち中らじ。既に是れ樹を遶る、何が故ぞ、却つて云ふ、太だ直なりと。雪竇、其の意を借る、妨げず用ゐ得て好きことを。此の事、春秋に出づ。有る者は道ふ、樹を遶るは是れ圓相と。若し眞箇此くの如くならば、蓋し語の宗旨を識らず、太だ直なる處を知らず。三箇の老漢、途を殊にして歸を同じうすること、一揆一齊に太だ直なり。若し是れ他の去處を識得せば、七縱八横、方寸を離れず。百川の異流、同じく大海に歸す。所以に南泉道く、恁麼ならば則ち去らじと。若し是れ衲僧、正眼に覷著せば、只だ是れ精魂を弄す。若し喚んで精魂を弄すと作さば、却つて是れ精魂を弄せず。五祖先師道く、他の三人は是れ慧炬三昧、莊嚴王三昧と。然も此くの如く女人拜を作すと雖も、他終に女人拜の會を作さず。圓相を畫すと雖も、他終に圓相の會を作さず。既に恁麼に會せずんば、又た作麼生か會せん。雪竇道く、千箇と萬箇と、是れ誰れか曾つて的に中つると。能く幾箇有つてか、百たび發し百たび中つる。相ひ呼び相ひ喚んで歸去來と。南泉の、恁麼ならば則ち去らじと道ふことを頌す。南泉、此從り去らじ。故に云く、曹溪路上登陟することを休むと。荆棘林を滅却す。雪竇、把不定にして復た云く、曹溪路坦平、什麼と爲てか登陟することを休むと。各自に脚下を看よ。

【提唱】コレから圜悟の評ぢや。「由基が箭猿を射る、樹を遶ること何んぞ太だ直なると。由基は乃ち是れ楚の時の人。姓は養、名は叔、字は由基。時に楚の莊王、出でて獵す。一の白猿を見て、人をして之れを射せしむ。其の猿、箭を捉へて戲る。群臣に勅して之れを射せしむるに、中つる者の有

ること莫し。王遂に群臣に問ふ。群臣奏して曰く、由基と云ふ者、善く射ると。遂に之れを射せしむ。由基、弓を彎くに方つて、猿乃ち樹を抱いて悲號す。箭の發する時に至つて、猿、樹を遶つて之れを避く。其の箭も亦た樹を遶つて、中つて殺す。此れ乃ち神箭なり」と、由基は今まで讀んだ通り、楚の國の人ぢや。楚の莊王が獵に出た時、一の白猿を見て、群臣に命じて之を射させたが、ソノ猿、射る箭を一々手で受け止めては戯れて、誰れ一人射當てる者がない。ソコデ莊王は大に怒つて、弓術に長けた者を召された。コノ莊王は、「史記」にも「祖庭事苑」にも、恭王となつて居る。ソノ時臣下が一様に、彼の猿を射るは由基の外には御座りますまいと申し上げたので、遂に由基が召し出され、猿を射るとになつて弓を取つた。猿は此の由基が、弓に箭を番うのを見ると、悲鳴を擧げた。ソレは由基が弓の名人であつて、とても自分は遁れることが出來ないのを見て取つたからぢや。是等は畜生でもナカ〳〵偉い。由基は覘を定めて、ヒューッと切つて放つと、猿は遁れんとして、樹をグルと遶つた。スルト由基の射た箭も、猿を追ふてグル〳〵と遶つて、遂に射殺したと。實に不思議な箭ぢや、神箭ぢや。コノ不思議は誰れも知らぬ、射た由基も知らぬぢや。「雪竇、何が故ぞ、却つて道ふ、太だ直なりと。若し是れ太だ直ならば、則ち中らじ。既に是れ樹を遶る、何が故ぞ却つて云ふ、太だ直なりと。雪竇其の意を借る、妨げず、用ひ得て好きことを。此の事、春秋に出づ」と、雪竇はコノ由基の射た箭をサ、太だ直なりと云ふが、ソレは全體如何云ふ譯か。直なれば樹を遶つて中る筈がないぢやないか。サー其れを雪竇が此處へ持つて來て、其の意を借るには仔細があるぢや。衲僧家はサ、非想非々想天より金輪水際迄射通すぞ。九十九曲細山路をも直に通るやうになけらにや、禪宗の飯はカサ一杯も喰ふとはならぬぞ。雪竇甘く用ゐ來つて頌した。コノ由基のことは、「呂氏春秋」や「事文類聚」にある。是れは「淮南子」を引いたので、事は同じぢや。「有る者は道ふ、樹を遶るは是れ圓相と。若し眞箇此くの如くならば、蓋し語の宗旨を知らず、太だ直なる處も知らず」と、樹を遶つたのは圓相のことぢやなどと、ソンナ見やうぢや宗旨は知れぬ。ソレぢや太だ直なる處をも知らぬぞ。直なる處はサ、向ふ通るは清十郎ぢやないか。サー清十郎ぢやないかと云ふても、黒星を射拔く場があるぞ。「三箇の老漢、途を殊にして歸を同じうすること、一揆一齊に太だ直なり」と、コノ三人、爲ることは別なやうぢやが、働きは同じぢや。一ッ働きに黒星は違はぬ。的々分明箭後の路ぢや。「若し是れ他の去處を識得せば、七縱八横、方寸を離れず。百川の異流、同じく大海に歸す。所以に南泉道く、恁麼ならば則ち去らじと。若し衲僧、正眼に覷著せば、只だ是れ精魂を弄す。若し喚んで精魂を弄すと作さば、却つて是れ精魂を弄せず」と、コノ五十九字は好くない、衲は取らぬ。併し云ふだけは云ふて置かう。コノ「太だ直なる」と云ふ玉の落處を知つたならば、一つとして仇矢はない。ぢやから南泉が、「恁麼ならば則ち去らじ」と云ふた。ソレは三人齊しく國師の室に入つて、相見して居るから、再び去るには及ばぬと。若しサウ云ふやうに會したならば、

三文錢の値もないぞ。コレを正眼を以て見たらば、甚だ見事な働きぢやと云ふぢやらうが、ソンナものは識破して、寃を作すな。「五祖先師道く、他の三人は是れ慧炬三昧、莊嚴王三昧と」、五祖法演も云ふ、コノ三人は同じ慧炬三昧、莊嚴王三昧ぢやと。是れは「法華經」の妙音品にある妙音菩薩所得の十六三昧の二つぢや、皆な中道王三昧の異名ぢや。慧炬は能く痴暗を破する。又た莊嚴王は總持を以つて妙行を接する。「玄贊」にも、「慧炬は、眞俗諸の境界を照明するが故に。莊嚴王は、能く内外の二莊嚴を具するが故に。三昧は、此に調直、定等と云ふ」とある。つまり「慧炬」とは智光ぢや、盡十方世界皆な自己の白毫光ぢや。迷を照らして悟りとする。サー一心が露れると、山も川も何處も彼處も輝き渡る、是れ莊嚴王三昧ぢや。自己の眞如の月の美しさは、物の比倫を絶して居る。ソノ眞如の月が上ると、地獄を莊嚴し、穢土を莊嚴する。「然も此くの如く女人拜を作すと雖も、他終に女人拜の會を作さず。圓相を畫すと雖も、他終に圓相の會を作さず。既に恁麼に會せずんば、又た作麼生か會せん」と、コリヤ下らない、いやな評ぢや。拜も見ぬ、圓相も見ぬとは何んのことぢや。コノ三十七字は削るが好い。「雪竇道く、千箇と萬箇と、是れ誰れか曾つて的に中つると。能く幾箇有つてか、百たび發し百たび中つる」と、天下廣しと雖も、コノやうに百發百中の人は、幾箇もあるまい。「相ひ呼び相ひ喚んで歸去來と。南泉の、恁麼ならば則ち去らじと道ふことを頌す。南泉、此從り去らじ。故に云く、曹溪路上登陟することを休むと。荆棘林を滅却す」と、南泉が恁麼ならば去らじと云ふたのは、もう行くがものはないと、全休見スカシ切つたのぢや。コリヤ荆棘林を滅却するも同じぢや。「雪竇、把不定にして、復た云く、曹溪路坦平、什麼と爲てか登陟することを休むと」、コリヤ好い詐ぢや。雪竇、あれの、これのと取り留めがないぞと。併し「曹溪路坦平」と云ふたは、コレが雪竇の荆棘參天ぞ。南泉でも歸宗でも麻谷でも、搔き分けられぬ。「曹溪の路、塵を絶し迹を絶す。露躶躶、赤洒洒、平坦坦、脩然地なり」と、又た此の註が惡い、いらぬとぢや。「脩然地」とは「莊子」から出た語ぢや。「脩然として往く」とある。註に、無所累貌、又た疾飛貌とある。さぞかつた有り樣を云ふ。「什麼と爲つて却つて登陟を休むる。各自に脚下を看よ」と、どうして曹溪へ行かぬのか。サー各々、別段遠方に行くにも及ぶまいぞ。人々是れ曹溪の一路有りぢや、脚下を看よ〳〵。

註説 〔江西〕 大明十三省の一。〔湖湘〕 三國の吳には湘東と云ひ、唐には湖南潭州と云ふ。洞庭湖の南なるが故に、即ち明の長沙府なり。〔足上足らず、足下餘り有り〕 足は比なり、即ち上に比すれば不足なれども、而も下に比すれば餘り有りとの義。〔禪家の飯はカサ一杯も云々〕 カサは盞なり、少しの飯もと云ふこと。

第七十則　潙山侍立百丈　【潙山侍立百丈】

垂示云、快人一言快馬一鞭萬年一念一念萬年要知直截未舉已前

且道未舉已前作麼生摸索請舉看

【和訓】垂示に云く、快人の一言、快馬の一鞭。萬年一念、一念萬年。直截を知らんと要せば、未だ舉せざる已前。且らく道へ、未だ舉せざる已前、作麼生か摸索せん。請ふ舉す、看よ。

【提唱】第七十則、「潙山侍立百丈」と、コノ則は、君子、兒孫を思ふの因緣を明すのぢや。中に就いて三つの義が有る。初めは公案、圓かなるに通じて、コレは此の則の潙山を云ふたのぢや。次は公案、未だ圓かならざるに通じて、コレは次ぎの七十一則の五峯を云ふたのぢや。終りは公案、則を失し、向後別に一宗を起し、遠く兒孫に垂る、是れを曹洞の旨と名るに通ずる、コレは七十二則の雲巖を云ふのぢや。能く其の意を以つて、本則を看るが好い。

「垂示に云く、快人の一言、快馬の一鞭」と、到つた人の一言は、實にハヤ小氣味の好いものぢや。ソノ一鞭で、怜悧の學者は飛び出すぞ。快人は師家を指し、快馬は學人を指したのぢや。師學共に斯う有りたいものぢやが、ナカ〳〵左樣は行かぬ。「萬年一念、一念萬年」と、コリヤ何んぢやい、とろくさい。コンナとは、衲僧門下では糟の樣なぞ。此處で筆が弛んだナ、コノ八字を省いて、直に「直截」と云ふて好い。「直截を知らんと要せば、未だ舉せざる已前」と、佛祖の根源を知らうとするならば、語言已前に其の根本を切り斷せ。「且らく道へ、未だ舉せざる已前、作麼生か摸索せん。請ふ舉す、看よ」と、サーそりや如何あらうぞとならば、次ぎ下の本則に就いて看よ。

舉潙山五峯雲巖同侍立百丈　○阿呵呵○終始諸訛○君向瀟湘我之東魯　百丈問潙山併却咽喉唇吻作麼生道　○一將難求　潙山云却請和尚道　○借路經過　丈云我不辭向汝道恐已後喪我兒孫　○不免老婆心切○面皮厚三寸○和泥合水○就身打刼

【和訓】舉す。潙山、五峯、雲巖、同じく百丈に侍立す。（○阿呵呵。○終始諸訛。○君は瀟湘に向ひ、我は東魯に之く。）百丈、潙山に問ふ、咽喉唇吻を併却して、作麼生か道はん。（○一將は求め難し。）潙山云く、却って請ふ和尚道へ。（○路を借りて經過す。）丈云く、我れ儞に向つて道ふことを辭せず、恐くは已後我が兒孫を喪はんことを。（○兎れず老婆心切なることを。○面皮厚きこと三寸。○和泥合水。○就身打刼。）